



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	私立中高一貫教育の現在：北海道のある私学への調査から
Author(s)	横井, 敏郎; 石川, 愛子; 伊藤, 拓也 他
Citation	公教育システム研究, 3, 15-79
Issue Date	2003-12
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/22073
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_P15-79.pdf



私立中高一貫教育の現在

—北海道のある私学への調査から—

横井敏郎*・石川愛子**・伊藤拓也・篠原岳司・八尾崇寛・山下直樹

目次

第1章 私立中高一貫教育調査の課題意識と調査概要

- 1 テーマの設定
- 2 調査の目的と先行研究
- 3 調査の概要と分析視点
- 4 調査経過

第2章 北海道における私学の動向と私学行政

- 1 私学教育の動向と中高一貫教育の推進状況
- 2 北海道における私学行政の機構
- 3 私学行政における定員調整
- 4 教育予算と私学助成
- 5 まとめ—私学教育と私学行政の課題—

第3章 A中学校・高等学校の概要と教育コンセプト

- 1 A中学校・高等学校の概要と設立経緯
- 2 A中学校・高等学校における中高一貫教育の理念、しくみ
- 3 A中学校・高等学校の授業の特徴
- 4 まとめ—「学力」と「学習能力」の両立—

第4章 A中学校・高等学校の教育実践—各教科・特別活動の特徴的な実践

- 1 英語教育
- 2 数学教育
- 3 理科教育
- 4 社会科教育と「法律演習」
- 5 「土曜講座」
- 6 海外研修旅行

第5章 アンケートによる生徒・保護者の意識分析

- 1 生徒アンケート 高1
- 2 生徒アンケート 高3 A大学進学クラス
- 3 生徒アンケート 高3 他大学進学コース
- 4 保護者アンケート 高1
- 5 保護者アンケート 高3 A大学進学コース
- 6 保護者アンケート 高3 他大学進学コース

* 北海道大学大学院教育学研究科教育計画講座助教授（教育行政学）

** 石川以下、北海道大学教育学部3年生

キーワード：私学教育、私学行政、中高一貫、生徒・保護者意識、北海道

7 まとめ

第6章 学校と保護者関係

1 学力・受験指導をめぐる

2 生徒の自立をめぐる

3 まとめ

終章 私立中高一貫教育の展望

1 「学力」と「学習能力」の両立

2 生徒・保護者の分化

3 中高一貫教育の評価

4 私学教育革新の可能性

付録 「A中学・高等学校の教育活動に関するアンケート」の集計グラフ

第1章 私立中高一貫教育調査の課題意識と調査概要

1. テーマの設定

昨年度、教育行政学調査実習グループは、北海道上川町の上川中学校・上川高等学校を事例に連携型中高一貫教育調査を行った。公立中高一貫教育は1999年より実施されている新しい制度であり、その実態を明らかにすることが目的であった。両校の教育実践や生徒・保護者・地域住民・教員の意識分析から、過疎地の連携型中高一貫教育の「実像」なるものが一定描き出せたと思う（本誌前号の調査報告を参照）。両校の教育実践には基礎学力の充実や6年間の一貫した教育プログラムなど従来にない有意義な実践が開始されたことなど、多面的な成果も見られたが、全体として連携型であるために教育課程での特例措置や財政的支援も少ない中で、設置者の異なる2つの学校を教育内容的に接続させ、組織的に協働させて、新しい制度である中高一貫教育を現実に作り出し、定着させようとする多大な努力と試行錯誤がなされていたといえる。公立の連携型という制度からくる実践の特長と実施の難しさが存在していたのである。

それでは、1つの学園、学校の中で実践を行うことができ、無試験での内部進学が予定されており、教育課程の組み替えも一定可能な併設型の、独自の教育理念や教育プログラムをもった私立の中高一貫教育ならば、その制度的理念的特性を生かしてより豊かで有意義な教育実践を展開できるのではないか。一般に私立の中高一貫教育校は、極端に受験教育に偏したエリート校としてみなされているが、全国の私学の中には独自の教育理念に基づいた実践を展開しているところもあろう。そうした私学なら、中高一貫教育制度を有効に利用して、分断された中高関係を有意義につなぐ教育が行われているのではなかろうか。このような問題関心から、私たちは、今年度、私立の中高一貫教育を調査研究の対象とすることとした。

このテーマを選んだのには、高大接続の取り組みを先駆的に実施しながらも、狭い意味の受験校ではなく、より豊かな教育内容を創造し、実践しようとしているある私立中高一貫教育校に出会う機会があったということもきっかけとなった。このA中学・高校に協力を得て、今回の調査は可能となった。

2. 調査の目的と先行研究

本研究の目的は、今日の私立中高一貫教育においては実際にどのような教育が実践されているのか、その実態を明らかにするところにあるが、これに関してこれまでどのような研究が行われてきたのだろうか。

私たちが私立中高一貫教育校の先行研究を調べてみたところ、今日の私立中高一貫教育校の教育実践を個別の中学・高校を事例に実証的に研究したものはほとんどないといってもよいというのが現在の研究状況であった。私立

中高一貫教育は一般に極端な受験中心の教育を実施しているとイメージされているためか、そもそもそれを実証研究の対象にすえている研究が見られないのである。

アンケートなどを利用した統計的調査は、時代をさかのぼれば日本私学教育研究所の紀要などがあるが、内容的には古いものとなっている。また最近では、河内祥子・山口瞳・坂田仰「私学一貫教育に関する調査（速報）」（『月刊高校教育』2002年10月）があり、全国の私立中高併設校へのアンケート調査を実施しているが（回答数216校）、何ら知見といえるものは述べられず、さしたる意味のないものに終わっている。

私立中高一貫教育校を紹介する一般書や進学雑誌が多数出版されているが、それらはもっぱら東大や早慶などの有名大学への合格者数によってランク付けするのみで、もちろんまともな検討の対象になるものではない（たとえば、二見喜章『わが子の未来を拓く中高一貫名門校選択の指針』小学館、2000年。ただし、私立中高一貫教育校の分類には一定役立つ）。

中高一貫教育という点に重きをおかず、私学というふうに枠を広げれば、進学校と異なる道を歩み、独自の教育実践を展開している私立高校の運動や教育活動を書いた書籍もある。たとえば、少し古いものでは愛知私教連編『私学にひるがえる旗』（高文研、1981年）、最近では北星学園余市高等学校編『続・やりなおさないか君らしさのままで一ひとりで悩むな！卒業生・父母・教師からのメッセージ』（教育史料出版会、2003年）などだが、実践記録というものである。

大都市圏で私立中高一貫教育校がどのような社会的背景のもとに台頭してきたかを明らかにしたものとして、小川洋『なぜ公立高校はダメになったのか』（旺文社、2000年）があげられる。同書は、1980年代に大都市圏で私学が急速に「地位上昇」し、「公私逆転」といわれるような事態が出現した要因を、①高学歴志向の「新興中間層」が生徒急増に対応して新設された普通高校に入学せず、私立高校に流れたこと、②スポーツ特待生制度や進学対策、中学部設置など、私立高校が社会的評価向上の取り組みを行ったこと、③国立大学の共通一次試験導入、私立大学の定員減少、大学志願率の上昇などによる私大の入試難のもとで、私立高校が私大進学対策をとったこと、などに求めている。公立の荒れや閉鎖性などに触れるだけで私学の台頭を説明するものと比べて、同書は私立中高一貫教育校の台頭を構造的に説明しており、説得力ある研究といえる。

ただ、同書はほぼ全入に近い状況にある高校教育全体の改革の方向・方策を提示することを目的としており、私学の教育のあり方や公教育における私学の位置づけについて言及する部分が少ない。高校入試廃止を含む改革がなされれば、「創立理念などに基づいた真に個性的な教育をしていない私立学校がどれほどの生徒を集められるか」（226頁）と末尾で述べるぐらいである。著者が提起する改革方策案については共鳴する部分も多いが、都市部では私学が相当の割合で生徒を引き受けている地域もあり、国民の教育機会の拡充の重要な一翼を担う私学の可能性や内面的な改革の筋道を見いだすことなしには、高校教育の改革も完成しないのではなかろうか。

本研究は、もとより高校教育全体の改革プランを描くことも、私学全体の内面的な改革の道筋を具体的に描き出すこともできない。しかし、今日の私立中高一貫教育校がいかなる実践に取り組み、その成果や課題はどのようなものであるかを、一事例とはいえ実証的に明らかにする本研究は、高校教育のあり方を問い直すための基礎的データを提供するものとして位置づけられると考えている。

3. 調査の概要と分析視点

私立中高一貫教育校の現状を明らかにするためには、まず私学行政を一定踏まえ、私学がどのような課題をかかえ、いかなる対応を取っているのかを押さえておく必要がある。そこで、本調査では、まず北海道庁総務部学事課にヒアリングを実施し、現在の私学教育の動向、私学行政の機構と仕組みの特徴と課題をとらえようとした。

次いで、個別私学の事例研究を行うために、A中学・高等学校に2度にわたってヒアリング調査を実施し、同校の教育理念や教育実践の概要、個々の教科の具体的な実践をできるだけ詳細にとらえようとした。その後、生徒と保護者が同校の教育方針や実践についてどのように評価し、いかなる意識をもっているかを明らかにするために、同校の協力を得てアンケートを実施した。これは同校教育実践の評価を明らかにすることに加えて、生徒と保護者の

学校認識を浮き彫りにすることをもねらいにしている。

以上で調査は終了するつもりであったが、たまたま内部進学の高校 1 年生の保護者 2 名と接触する機会があり、ヒアリングを実施した。保護者が学校についてどのような意見をもっているか、その生の声を聞き、上のアンケート調査の傾向を理解する一助とした。以上が調査概要である。

こうした調査を実施し、報告書をまとめる際に特に意識して以下の 2 つの視点をもった。

1 つには受験対策一辺倒でない私立中高一貫教育校の実践の可能性である。受験勉強だけに偏らない豊かな内容を持ちながら、なおかつ進学目標の実現を可能にし、大学進学後も自らの学習を発展させ続けていけるような教育をどう生み出すのか。調査実施前から、A 中学・高校は狭い意味の受験中心教育を行っている学校ではないということは一定承知していたが、その実際の姿はどのようなものであるのかを本研究は事実即して描き出すことにつとめた。

もう 1 つは、生徒・保護者の意識である。学校がある理念をもって教育実践を組み立てようとしても、必ずしもその教育実践に対する生徒や保護者の評価が高くなるとはいえない。生徒と保護者が学校に何を期待しているか、その学校の性格をどのようなものと認識しているかで学校の評価は大きく変わるのであり、ある場合には優れて有意義な教育実践や教育理念も批判的評価の対象になることも考えられる。本研究では、A 中学・高校の場合、生徒・保護者の学校認識はどのようなものなのかを率直に明らかにしようとした。

小川は、高校以下の教育内容を新しい「教養」を獲得することを中心とし、大学入試も問題解決能力に必要な「教養」の質を問うようなものと改めるべきという (226 頁)。これは理想的であるが、こうした教育内容とはどのようなものなのか、また大学の専門的な教育・研究内容といかにして接続が可能なのかについては、昨今の学力問題を持ち出すまでもなく、いまだ十分には明らかになっていないのである。

また生徒・保護者の学校評価は、学校認識(学校への期待)と相関関係にある。次章で述べるように、私学が一個の経営体であり、生徒獲得市場の論理に一定拘束されざるを得ない中では、生徒・保護者の意識を明らかにすることは私学教育の可能性を考えていく上で不可欠である

この 2 つの分析視点への実証的回答は、次章以降の本論でなされる。その回答は、私学、ひいては高校全体の抱える共通の課題を描き出すことにつながるであろう。

4. 調査経過

今回の調査の経過は以下の通りである。

<ヒアリング調査>

1) 2003 年 6 月 11 日

①北海道庁総務部学事課 小中高校グループ主査・同主任

2) 2003 年 6 月 16 日

②A 中学・高等学校 B 校長・C 教頭・D 教頭

3) 2003 年 7 月 8 日

A 中学・高等学校

③英語科

D 教頭 (中学校・英語)

④数学科

C 教頭 (高校・数学)

⑤理科

G 教諭 (高校・理科)

⑥「法律演習」・社会科

H 教諭 (高校・公民)

⑦「土曜講座」

C 教頭

⑧海外研修旅行

G 教諭

4) 2003 年 12 月 22 日

⑨A 高校 1 年生 (内部進学者) の保護者 2 名

<アンケート調査>

[A 中学・高等学校の教育活動に関するアンケート]

2003年10月31日回収

①高校1年生	回答数 86 (2クラス実施)
②高校3年生 (A 大学進学クラス)	回答数 42 (1クラス実施)
③高校3年生 (他大学進学クラス)	回答数 33 (1クラス実施)
④高校1年生保護者	回答数 48 (2クラス実施)
⑤高校3年生 (A 大学進学クラス) 保護者	回答数 20 (1クラス実施)
⑥高校3年生 (他大学進学クラス) 保護者	回答数 18 (1クラス実施)

第2章 北海道における私学の動向と私学行政

本章では、A 中学・高校の中高一貫教育について検討する前に、まず北海道における私学教育の動向と北海道庁の私学行政について一瞥し、私学が共通に抱える課題や私学教育の意義について確認しておきたい。本章の叙述は多くを北海道庁学事課へのヒアリング調査に依拠しており、特に注書きのない引用部分については、すべて当ヒアリング調査によるものである。

1 私学教育の動向と中高一貫教育の推進状況

今日、少子化が進行する中で北海道における公立学校は間口（学級数）削減の対象とされ、学校統廃合への動きも顕著である。他方、私立学校はその性質上、教育的側面と経営・財政的側面を合わせもっていることから、学校存続のために独自のカラーを打ち出し、生徒を確保することが重要課題となっている。このような状況下における私学教育の動向として、次の3点が挙げられる。

第一に、私立高校をもつ学校法人が同系列の中学校を設置する動きが見られる。

表1によれば、最近では函館ラ・サール中学校、立命館中学校、札幌日本大学中学校が開校されている。さらに昨年（2002年）、小樽の双葉高等学校が中学校設置計画書を北海道庁学事課へ提出し、了承されている。このように、中高一貫教育を導入するべく中学校を設置しようとする私学は、元々その学校における中高一貫教育に対する需要があり、それに応える形で中学校を設置する場合と、高等学校の経営も軌道に乗っているが、その評価を確固たるものとするために中学校を設置する場合など、おおまかに2通りに分かれる。もう一つ、高等学校の経営が振るわず、復活への起爆剤として中学校設置を申し出る私学もあるという。しかし、私学といえども公教育の一端を担うものであることから、経営の安定性が要請される。このような私学はその安定性を担保する資産状況にないことから、認可されない場合が多い。以上のように、中高一貫教育導入の背景には各私学の経営戦略が絡んでいるとすることができる。

第二に、学科間における収容定員の変更が見られる。近年の大学進学率上昇に伴う大学進学要求の高まりや、就職難による高校の職業学科離れの進行によって、私学においては職業学科が定員割れを生じ、経営難に陥る可能性が大きい。すなわち普通科志向が高まりを見せているのである。よって、職業学科の募集を停止して、その分の定員を普通科に振り替えることを打開策として打ち出してくる私学も多いという。本年度は、旭川明星高校と函館柏陽高校が商業科の募集を停止している。

第三に、コース制の普及が挙げられる。とりわけ、普通コースと特進コースとに分ける場合が多いという。北海道は進学実績において公立優位の風土であるため、私学も生徒確保のために進学実績を上げ、それをPRする必要がでてくる。そこで、特進コースの生徒の進学実績をあげ、その結果をPRに使うという私学の経営戦略が生まれる。しかし、私学全体が進学校化するというわけではない。1つの学校をとってみても、普通科コースの生徒に対してその役割を期待してはならず、あくまで進学実績向上の役割を担う対象は少人数制である特進コースの生徒に特化されている。

以上のように、北海道の私学は全体的に見ると、少子化という経営的な背景を1つの理由としつつ、普通科の拡充、特に特進コースの設置に動く流れが生じており、中学校設置による中高一貫教育の導入もこの一環としてとらえることができよう。

表1 道内私立学校における中高一貫教育の実施状況

1 中高一貫教育実施校（学則において中高一貫教育に関する規定を明記し実施）

	学 校 名	開校年度	1 学年定員	摘 要
1	函館ラ・サール中学校	1999年度	120	2000年度学則改正
	函館ラ・サール高等学校	1960年度	237	
2	立命館慶祥中学校	2000年度	180	2000年度開校
	立命館慶祥高等学校	1948年度	345	
3	北嶺中学校	1985年度	120	2001年度学則改正
	北嶺高等学校	1989年度	120	
4	藤女子中学校	1984年度	225	2001年度学則改正
	藤女子高等学校	1948年度	225	
5	札幌日本大学中学校	2003年度	80	2003年度開校
	札幌日本大学高等学校	1987年度	324	

2 中学・高等学校併設校

	学 校 名	開校年度	1 学年定員	摘 要
1	北星学園女子中学校	1948年度	100	
	北星学園女子高等学校	1948年度	280	
2	札幌光星中学校	1948年度	80	
	札幌光星高等学校	1948年度	360	
3	札幌大谷中学校	1948年度	100	
	札幌大谷高等学校	1951年度	360	
4	札幌聖心女子学院中学校	1963年度	80	
	札幌聖心女子学院高等学校	1963年度	80	
5	東海大学第四高等学校中等部	1987年度	80	
	東海第四高等学校	1964年度	405	
6	遺愛女子中学校	1948年度	70	
	遺愛女子高等学校	1948年度	280	
7	函館白百合学園中学校	1948年度	70	
	函館白百合学園高等学校	1948年度	248	

注：休校中の中学校1校（海星中学校）

3 2004年度中高一貫教育実施予定

	学 校 名	摘 要
1	双葉高等学校 (仮称) 双葉中学校	2002年12月2日、設置計画了承

(以上、ヒアリング調査時配布資料)

2 北海道における私学行政の機構

本節では、北海道における私学教育行政を機構面から概観する。ここでは主に北海道庁学事課の役割と審議会を扱う。

1) 北海道庁学事課の職務

学事課は次の5点を事務とする。①私立学校の認可及び指導事務、②私立学校に対する助成事務、③私学団体育成事務、④宗教法人事務、⑤高等教育事務、である。本節においては、中高一貫教育が調査対象である関係上、①と②に限定して検討する。

まず、①私立学校の認可及び指導事務とは、「私立学校（大学、短大及び高専を除く。）の設置、廃止、設置者変更、収容定員に係る学則の変更及び学校法人の設立等の認可並びに指導を行」なう事業である（学事課「主要事業の概要」）。大学、短大及び高専は文部科学省所管であるため、これを除いた私学に対して認可・指導を行うということである。私学を新設するためには、設置主体が学校法人にならなければならない。その際に必要となる、学校法人が私学を運営するにあたって定める「寄付行為」（私立学校法第30条）の認可や、学校を実際を作るための「学校設置の認可」が主たるものである。たとえば、立命館慶祥の場合、設置主体はすでに学校法人があり、高校はすでに経営しているうえでの中学校新設であったため、「寄付行為」に関しては変更認可であり、新設する中学校に対する設置認可が必要であった。このように、法人単位・学校単位の2側面からの認可が業務の内容である。

次に、②私立学校助成事務とは、「私立学校の教育条件の維持向上、経営の健全化及び保護者負担の軽減を図るため、私立学校の運営に要する経費の一部を助成するほか、授業料軽減補助並びに経営安定資金及び施設整備資金の貸付けなどを行」う事業である（学事課「主要事業の概要」）。これは私学に対する補助制度を行うものであり、とりわけ管理運営対策費補助金が大部分を占める。私学経営において最も多くかかる経費は人件費であり、これに対する補助を主な業務としている。

2) 私立学校設置手順と「私立学校審議会」

ここで、北海道庁学事課による「学校設置の認可」の具体的な手順を追ってみる。

まず北海道庁に対して学校設置の「申請」が行われると、これに対して道が「審査」を行い、道として最終的に認可・不認可のどちらにするのかを見通し、ここで一定の判断を下す。しかしこれは最終決定ではなく、次に「北海道私立学校審議会」に諮問され（私立学校法第8条・第9条）、そこで出された答申にあるの返答を参考に、道が最終決定を下すのである。実際は、さらに「申請」を行う前年、すなわち学校設置予定年度の前々年に申請者が「計画書」を北海道知事宛に提出し、それをもとに道が事前に申請者と申し合わせ、さらに道庁内部の法的なチェックをした後同審議会へ諮問するという2段階審査方式が採られている。このため、審議会における討議の中で不認可となる例は通常想定されず、スムーズな学校設置手続きが可能となるのである。「計画書」の提出による2段階審査方式は新設学校の危険負担の回避に有効な手続きであると言えることができる。なお、増改築を伴わない学科の設置や収容定員の変更に際しては「計画書」の提出は必要とされない。

なお、「審査」段階の基準については、国が全国一律の最低基準を示しているが、認可権は都道府県にあるため、地域性その他を考慮し、ここでは道が国の基準を一部取り入れながらも独自の基準を定めている。また、この段階における計画書の修正指導は、法的側面における不備に関してのみ行うこととなるが、実際そのような例はほとんどないという。

ここで、上述の「北海道私立学校審議会」について少し触れてみたい。根拠規定は私立学校法第8条と第9条であり、第10条以降に細かい規定がなされている。その理念は、私立学校の自律性を尊重するために所轄庁の権限を制限するというものであるという。実際に、私立学校法の立法者意志には「私学の自主性の確保の観点から、一面私学に対する行政的干渉権を極力しぼる」べきであることが理念として掲げられている（日本私学団体総連合会編『私立学校法解説』自由教育図書協会出版部、1950年、8頁）。「学校設置の認可」の法的根拠は学校教育法であり、認可権が私学の所轄庁である道に認められていることから、同審議会答申を無視することも法的には可能である。しかし、審議会という制度が設けられている趣旨・理念を考えれば、当然答申は尊重されるべきであるというのが道学事課の意向である。

私学審議会委員の人選基準は、私立学校法に規定されている。第10条2項1号においては、学校長あるいは学校法人の理事から、同2号においては学識経験者から組織されなければならない旨が記されている。また、人選の方法に関しては、同法第11条「委員候補の推薦」に規定されている。北海道においては、幼稚園協会や中高協会

などの私学団体が存在し、たいていの私学がそれに所属している。この私学団体が委員にふさわしい人物を選定し、道に推薦しているのである。なお、現在の北海道私学審議会委員の構成は、校長3名、教頭2名、学校法人の理事2名、幼稚園長3名、専修学校各種学校長2名、学識経験者3名となっている。

3 私学行政における定員調整

1) 私学行政と私学教育内容

私学は、公教育の一端を担うものであり、公的側面を含む一方で、建学の精神や独自の理念に基づいて自主的に運営されているものであることから、所轄庁である道の権限は制限されなければならない。道庁学事課も私学における教育内容には関与することはない。それが私学の自律性を生かす道であるというのが道学事課の考え方である。公立学校行政における指導主事に類するような役職も存在しない。学習指導要領についてその読み方を私立学校に押しつけるようなことは一切ない。ただし、法的側面における不備、法律違反に限っては指導の対象となる。

2) 私立高校間の定員調整と公立・私立高校間の定員調整の仕組み

道庁学事課が強い関心を抱いているのは、教育内容の方面よりも私学の経営の安定の方面である。そこで、私学の経営を左右する定員問題についてそれがいかなる仕組みで調整されているかを検討する。

北海道教育委員会は、『公立高等学校配置の基本指針と見通し』（2000年）によって2001年から2007年（通学区域改変予定年）までの公立学校適正配置に見通しを立てているが、この適正配置を考えるに当たって、特にその公立と私立の共存する学区の考え方は、だいたい公立の定員：私立の定員は7：3の割合で収容することを前提としている。この割合は、1984年時における公私の生徒数の割合であり、これを維持し続けてきている。

私立高校間の定員調整を図る組織が「北海道私立高等学校入試協議会」（私立協議会）である。これは、1979年に定員調整を目的に設置されたものである。「同協議会要綱」前文には、「本道の全私立高等学校の安定維持のためには全学校が積極的強調の下に定員の調整及び入試制度等について自主的に調整を行うことが不可欠である」とある。事務局は「北海道私立中学高等学校協会」（中高協会）に置かれており、委員4名は「中高協会」の推薦による。この「私立協議会」は、札幌、函館、小樽、室蘭、旭川、道東の6地区に分かれ、それぞれで私立高校間の定員調整を行っている。

公私定員比率は、地域ごとの格差があり、必ずしも7：3とはなっていない。また、地域性とは別に、入学生徒数の「歩留まり」の読み誤りなどによって、両者の割合が大幅に崩れる可能性がある。このような場合、最終的に微調整を行うのが「北海道公私立高等学校入試協議会」（公私協）である。「公私協」の目的は、「公立・私立学校の役割分担、配置計画、入学定員などについての協議を行う」（「公私協設置要綱」第2条）ことであり、1976年に設置された。委員は、「中高協会」および北海道高等学校長協会の推薦を得て、道教育長が委嘱することとなっており、その構成は、北海道教育庁企画総務部総務政策局長を会長に、私立高校長3名、公立高校長2名、学校法人の理事長3名、北海道総務部学事課長、北海道教育庁企画総務部参事、同生涯学習部高校教育課長となっている。また、オブザーバーとして、私立高校長3名、学校法人の理事長1名が選出されている。

このように、公私間における定員調整は、①公私間の協議すなわち「北海道公私立高等学校入試協議会」、②私学内部の協議すなわち「北海道私立学校入試協議会」、の二本立てで行われているのである。

3) 私学における定員問題

近年、北海道においては入学時に定員割れを出す私学が多くなっている。少子化が進行する中、入学者数は減少し定員割れが生じることは十分予測可能であったにもかかわらず、一定の定員数を打ち出すことが学校の体裁を成すものであったため、学校側がなかなか定員削減に乗り出そうとしなかった結果である。

こうした事態に際して、「私立高等学校入試協議会」は毎年順繰りに定員を2割削減していく方針をとり、私立各校の健全な共存を図るため、定員厳守を申し合わせた。しかし、2003年度は複数入試や絶対評価導入の影響で生徒分布にずれが生じ、これを正確を読み取ることは容易ではなかった。結局、いくつかの私学で定員超過が生じ、札幌地区では23校のうち14校が定員割れとなった。ある私学は3年連続定員超過を起こしており、本年度は定員

380人に対し628人を入学させ、その充足率も165%に達するという事態が生じた。過去にも定員超過を起こした私学が数校あり、再三申し合わせたにもかかわらず事態が連続したため、同入試協は定員充足率が2年連続で110%を越えた場合、翌年度の合格者数を志願者の80%以内に、3年連続の場合は70%以内に制限するペナルティーを設けた。私立高が定員調整を行っているのは北海道、愛知県、京都府の3道府県であり、このように定員超過に対するペナルティーを設けているのは兵庫県を加えた4道府県である（『朝日新聞』2003年10月19日）。こういった場合は、超過した分の生徒を他の学校に入学させるわけにはいかないことから、道学事課は定員超過を起こした私学に対して、普通教室数の確保・増築と不足分の教員を採用するよう指導する。

4) 公私二元行政

ところで、他の都府県においては公私立学校行政の連携のあり方を考える際、教育行政の効率化と機関相互の密接な連携強化の観点から、両者の一元化をめぐる議論がある。実際に複数の県では教育委員会（県教育庁）が私立学校を所管している（南部初世「教育行政における私立学校行政の位置と公立学校行政との関係」日本教育経営学会『シリーズ教育の経営第1巻』玉川大学出版会、2000年）。しかしながら、道学事課は「自らが設置者であるところの都道府県立の学校を所管しているのと、それから設置者が私の法人であるところと、成り立ちが全然違うという中で、そこを事務局部分だけを一体化することに何の意味があるのか」と、一元化には否定的であった。日常的に知事部局と教育委員会は十分に密接な連携が行われており、組織だけを一体化しても意味がないという。

5) まとめ

北海道庁学事課の私学行政は教育内容面ではほとんど私学に関与することはない。本節では、私学の経営基盤に関わる重要な問題である定員問題を対象に、公私間および私学間の定員調整の仕組みを明らかにした。

4 教育予算と私学助成

次に、北海道の教育予算と私学助成について現状を見てみたい。

1) 北海道の教育予算概要

北海道の2002年度当初予算は2兆9,227億円であり、そのうち「教育費」5,791億円が北海道教育庁の予算である。他方、私学予算は、それ自体の名目で配当されておらず、学事課が属する北海道総務部の予算である「総務費」2,682億円の一部として配当される。同年度に総務費の中で配当された「私学予算」総額はおよそ413億円である（表2）。したがって、「教育費」（公立）と「私学予算」を合計した北海道全体の教育予算における両者の割合はおよそ、「教育費」93.3%、「私学予算」6.7%である。北海道の教育予算においては公立学校教育に割かれる予算が圧倒的に多い。これは、教育予算にかかる大部分が人件費によって占められているうえ、教育庁が道立学校に限らず市町村立学校にかかる教職員の人件費をも道費として見ていることが大きく関わっているためである。

2) 私学助成金の運用実態

私学助成とは、国と地方公共団体が行う私立学校に対する補助金の交付などを含めた財政的な助成措置のことである（私立学校法第59条）。

国から北海道へと降りてくる私学助成金は、①国庫補助金、②地方交付税交付金、の2通りがある。道学事課に

表2 2002年度私学関係予算

(単位：千円)

区分	2001年度予算		2002年度予算		増減 (B)-(A)	備考
	(A)	前年比	(B)	前年比		
予算総額	41,891,313 (23,614,185)	96.7 (97.7)	41,321,710 (23,648,877)	98.6 (100.1)	▲569,603 (34,692)	

(『北海道の私学・宗教法人の概要』北海道総務部学事課、2002年)

よれば、補助金は約40億円、地方交付税は約170億円である。地方交付税は、各都道府県の生徒数をもとに積算

され、地方公共団体における事務の健全化を担保するために、国が国費の一部を各都道府県の財政状況に応じて交付するものである。しかし、地方交付税は教育費のほか、あらゆる政策に必要なものが一括されて降ろされてくる、すなわち一般財源化されているため、これに占める教育費の割合を正確に算出することができない。約170億とは学事課による概算である。なお、補助金は特定財源であるため直接私学に対する補助に用いられるが、交付税の運用に関しては北海道に権限があるので、必ずしもこれを私学助成に用いる義務は規定されていないのである。上述した私学予算約413億円のうち、補助金と交付税を合計した金額、すなわち助成金として用いられる金額は約210億円であるから、それを差し引いた残り約200億円は道費でまかなっていると解される。しかしながら、交付税の用途が不明瞭とならざるを得ない制度上の特性があるため、上述の計算は正確であるとは言えず、そういう傾向があるものと捉える他ない。

北海道は経常経費すなわちここでは学校運営経費のおよそ4割を助成しており、この経常費補助の全国順位は第4位である。北海道は、全国的に見て、高い水準で私学助成を実施してきている。学事課によると、これには知事の意向も大きく預かっているという。また私学団体の力も大きく関わっている。近年の私学助成金の推移は、表3の通りである。現在、生徒1人当たり33万円余りが助成されており、そのうち5万円は道独自の負担である。

表3 高等学校管理運営費補助金の推移

(単位：千円、円、%)

年 度	補 助 金	生徒一人当たり	
		単 価	対前年度伸び率
1993	10,940,000	215,520	7.2
1994	11,572,000	231,778	7.5
1995	12,140,000	248,954	7.4
1996	12,592,000	267,079	7.2
1997	12,849,000	286,207	7.2
1998	13,196,000	303,342	6.0
1999	13,196,000	313,966	3.5
2000	13,455,144	320,926	2.2
2001	13,334,129	329,376	2.6
2002	13,169,672	338,100	2.6

(『北海道の私学・宗教法人の概要』北海道総務部学事課、2002年)

ところで、道の私学に対する助成は、①「一般補助」、②「取り組み加算」、の2通りがある。「一般補助」は、助成金の8割を占め、学校の規模や生徒数、教員数すなわち人件費の規模に応じて助成がなされる。他方、「取り組み加算」は、残りの2割を占め、各学校における放課後講習や教員研修などの取り組みに対して個別に助成するものである。

「一般補助」は学校規模に反比例する形で助成金が傾斜配分されるという仕組みとなっているという。つまり、小規模校において生徒確保が困難である状況下で、その生徒数をもとに補助が減額されたならば経営が不安定となり、公教育の一端を担う役割を果たし得ない。そのため、むしろスケールメリットのない小規模校に対して手厚く助成する仕組みとなっているのである。なお、「一般補助」のうち、人件費などを補助する標準経費は110%、保護者負担の軽減などの基本調整額は120%を超えると減額の対象となる。本年度は、先に述べた3年連続の定員超過を起こした私学を含む8校が助成金減額の対象とされた。

3) 生徒納付金の推移と私学経営

北海道の私立高校への納付金は表4の通りである。公立との比較では、入学時納付金は42倍から38倍へ下がり、毎月納付金と両者を併せた年間納付金は一時的に上昇したものの、2002年度で毎月納付金は3.1倍、年間納付金は4.8倍と横ばい状態である。しかし、経年変化を見ると、入学時納付金、毎月納付金、年間納付金のいずれも一貫して上昇し、ここ10年間の私学の年間納付金の伸び率は12.5%で、公立の13.8%を若干下回るが、高い上昇率である。

私学に助成している補助金は毎年増額されている（表3）にもかかわらず、北海道における現在の私学経営は、景気の低迷による寄付金の減少や少子化の煽りを受けた生徒数減で納付金を値上げせざるをえない状況にある。学事課としても私学助成のほか、道内の約20校に対して無利子の貸付制度を適用しているが、人件費を抑えるなど各私学はきびしい経営努力を実行せざるをえない。

表4 高等学校納付金の推移

(単位：円、倍)

年度	入学時納付金		毎月納付金			年間納付金			
	A 私立	B 公立	A/B 割合	A 私立	B 公立	A/B 割合	A 私立	B 公立	A/B 割合
1993	196,000	4,600	42.6	25,501	8,200	3.1	502,012	103,000	4.9
1994	199,158	5,200	38.3	25,928	8,200	3.2	510,294	103,600	4.9
1995	202,193	5,200	38.9	26,518	8,200	3.2	520,409	103,600	5.0
1996	204,649	5,200	39.4	27,060	8,200	3.3	529,369	103,600	5.1
1997	208,845	5,200	40.2	27,605	8,200	3.4	540,105	103,600	5.2
1998	210,828	5,500	38.3	28,113	8,700	3.2	548,184	109,900	5.0
1999	211,121	5,500	38.4	28,315	9,000	3.1	550,901	113,500	4.9
2000	213,684	5,550	38.5	28,598	9,000	3.2	556,860	113,550	4.9
2001	213,730	5,550	38.5	28,803	9,300	3.1	559,366	117,150	4.8
2002	215,291	5,650	38.1	28,989	9,300	3.1	564,878	117,250	4.8

(『北海道の私学・宗教法人の概要』北海道総務部学事課、2002年)

5 まとめ——私学教育と私学行政の課題——

以上、北海道における私学教育の動向および私学行政の内容と仕組みをスケッチしてきた。

近年の北海道の私学教育は、私立中学校の新設やコース制の導入など新しい動きを見せている。こうした動きの背景には、私学の経営問題がある。本年度（2003年度）から、北海道では私立高校に「複数入試制度」（入試日程の2分割）が導入されたが、これも定員割れが拡大する中での志願者数（＝入学者数）の増加を期待する私学の経営上の意向があったと考えられる。

北海道の私学行政の内容は、もっぱら経営の安定化や定員問題に関わるものであり、私学助成金による財政支援と「私立協議会」や「公私協」などの組織による定員調整がそこでの主要な問題であった。道学事課は、「私学の自主性」という私立学校法上の基本精神を尊重し、教育内容面での指導はほとんど行っていない。

現在、私学は国民の教育機会を保障する公教育の一環として大きな存在となっている。そういう観点から私学助成がさらに拡充されてよいかもしれない。とりわけ、道教委の『公立高等学校配置の基本指針と見通し』（2000年）では2007年度までは、従来の7:3のままの公私比率でいくとされているが、少子化のもと、2007年度以降も同じ比率でいけば私学の学校規模縮小と経営困難を来す恐れがある。また国民にとっては、この不況のもと、高学費は大きな負担となる。私学助成の拡充は、国民の教育機会の拡充となるものといえる。

しかし、国や地方自治体の財政悪化を前にすると、私学助成が抜本的に引き上げられる見込みは低い。私立中高一貫教育は、こうした状況の下で、私学が「自主性」を発揮しつつ、安定した経営を確立していく方策の1つとして必然的に生まれたものとも見ることが出来る。道内の私立中高一貫校の教育方針を調べてみると、その多くが6年間の教育内容を5年間で済ますという形での進学教育の推進をうたっている。一定の水準の学費負担に耐えられる層を対象に、進学実績で生徒確保を図ろうとするものと把握できる。職業学科の普通科への改編と特進コースの設置も基調を同じくしており、近年の私学教育の動向はこうした文脈でとらえられよう。

しかし、私学教育の動向が、生徒獲得市場の論理に完全に従属しているとしたら、「自主性」という私学の存立根拠自体を否定することにもなりかねない。経営問題と「自主性」の隘路をどう乗り越えていくかが現今の私学の共通する課題なのである。これはまた私学行政の課題でもある。

第3章 A中学校・高等学校の概要と教育コンセプト

本章は、A中学校・高等学校の概要を簡単に見ると同時に、多少の教育実践にも触れながら、同校の教育コンセプトがいかなるものなのかについて明らかにする。通常イメージされる私立中高一貫教育校とはいくらか異なる同校の教育に対する姿勢が明らかになるだろう。主に校長と教頭（2名）へのヒアリングに依拠しつつ、その際に入手した資料も利用してまとめた。ヒアリングに依拠した部分は特に明示していない場合もある。

1 A中学校・高等学校の概要と設立経緯

A中学校・高等学校は北海道E市に位置する中高一貫教育校（併設型）で、本州にある2つの系列中学・高校と並ぶ、A大学の付属校である。同校の生徒数は中学464人、高校1230人、教職員数は中学高校合わせて138人である（2003年5月現在、2003年学校要覧）。高校は1996年に、A中学校は2000年にそれぞれ開設された。

1) 設立の経緯と行政との関係

A高校の前身となるF高校（商業高校）が、商業高校としての人材養成に限界を感じて、理事長の縁故でA大学に経営を依頼したことが契機となり、F高校を改称してA高校が設置された。当時A大学で教務部長をしていた大学職員が1995年5月から、またI市にあるJ高校（A大学の附属高校で最も古い）で教育改革委員長をしていたB校長が同年夏に北海道に派遣され、A高校を開設したのは翌1996年である。「共学の一貫校というものを前提に考えていた」（B校長）というように、設立当初から中学校を併設して中高一貫を行う予定ではあったが、北海道でAの知名度を広めるということから始めるため、まずは高大一貫をうたいつつ、高校からのスタートとなった。

高校設置にあたっては、北海道内の私立高校の間で話し合いが行われた。そこで、F高校を引き継ぎ商業科（流通経済科）から始めることや定員もF高校の350名を引き継ぐことが決められた。少子化の影響を受け私立間の調整、公私間調整により来年（2004年）度から315名の定員にしていくことも決められている。また中学校設立については、北海道での私立中学の経営について私学関係者や道庁から危惧があったが、教育産業の関係者にアンケートを取った結果を含め、私立中学校への要望があることをデータを添えて報告し、私学審議会ですべて許可されたという経緯がある。道庁との調整によって中学校の定員が120名からスタートすることも決められた。教職員はF高校から全員引継ぎ、さらに全国採用も実施した。現在ではF高校時代の教職員は年々定年を迎え、新しく採用した教員がほとんどになっている。

2) 生徒の出身地・入試形態・進路（中学）

A中学校は4クラスに分かれている。中学校は自宅通学が原則である。居住地域は石狩管内が442人を占める。それ以外の生徒22人も同管内近郊から通っている。

中学校の入学試験は、①全員必修の基礎共通科目（国算理社）と、②選択して受験する「応用試験」・「表現試験」・「個性試験」、を受けなければならない。「応用試験」は、国語算数についてより応用的な問題を受けるといふ、いわゆる一般的な入試形態である。「表現試験」はあらかじめ指定しておいた図書10冊に関する問題を出し作文形式で答案を作成する、「個性試験」は特別な課外活動実績を持った子に対して面接を行う、というもので、いずれも多様な能力を持った生徒を獲得しようという試験形態である（2003年中学校入学案内）。特に「表現試験」はA中学校独自の入試形態で「本好きな子、考える子がほしい」というコンセプトで始められた。受験者の比率は、「応用試験」が7割、「表現試験」・「個性試験」がそれぞれ1.5割程度である。「表現試験」や「個性試験」で入った生徒の方が、勉強の分野でも入学後成績が伸びる子が多いという傾向がある。しかし最近では塾等の進路指導により、「応用試験」では学力面で届かないという子が「表現試験」に逃げて受験するというような現象も出てきてしまっている。

私立の中学校入試というと受験教育の低年齢化という批判を受けることもあるが、A中学校の入試は、「小学校の勉強を邪魔しない、むしろこれらの入試を受けることでより考えられる子を育てる」（校長）ということにも配

慮して組み立てられているのである。

A中学校からA高校への進学は前提となっていて、ほとんど全員がA高校へ進学している。

3) 生徒の出身地・入試形態・進路 (高校)

A高校は現在 (2003 年)、1・3 年生が 10 クラス、2 年生が 9 クラスある。出身地域は石狩管内が 806 人、それ以外の北海道内出身が 398 人、北海道外出身が 22 人、海外出身が 5 人となっている (2003 年学校要覧)。道外・海外出身者は、学校のホームページを見て入学することが多く、私たちが実施したアンケート (後述) に「(A 高校に入学した理由は) 横浜からの転居で、札幌の公立のレベルがよくわからなかったから」とあるように、北海道へ転勤してきた家庭が A 高校に生徒を入学させるという例が多いようである。また、高校には寮もあり、学校寮から通っている生徒が 171 人、下宿から通っている生徒が 94 人いる (2003 年学校要覧)。

高校の入学試験には推薦入試と一般入試があり、2003 年度は 173 人が推薦入試で、161 人が一般入試で入学している。入学生は成績に開きがあり、英数などの教科ではグレード別にクラスを分けるなどの工夫をしている。4 月にクラスの顔合わせとなる宿泊学習も行っており、内部生と外部生で感情的な対立などが起きないように工夫もされている。3 年生からは A 大学進学コースと他大学進学コースにクラスが分けられる (2005 年度からはこのコース分けを廃止し、選択科目によって進学の準備をするという形になる)。

卒業後の進路は、ほとんどの生徒が大学進学を目指している。2002 年度卒業生の進学先は、A 学内進学者 161 名 (そのうち A 大学 155 名、A 系列大学 6 名)、国公立大学 42 名、私立大学 165 名となっている (2003 年高校入学案内)。

2 A中学校・高等学校における中高一貫教育の理念、しくみ

1) 中・高・大・院一貫教育

「中学・高校の一貫教育により、大学、大学院での学びで大きな成果を発揮する真の学力形成に力を注いでいます」(2003 年中学校入学案内) というように、A 中学校・高等学校では中学・高校・大学・大学院までを一貫で考える教育を行っている。「大学生がどのような質を持って大学を出て行くかということが大事」(B 校長) という理念を中学・高校から持っており、大学受験のためだけの教育ではなく、大学に入ってから発揮される力、あるいは大学を卒業してから「世界に通用する力」(2003 年高校入学案内) を身につけることを中等教育段階から目標としているのである。その考え方は、中学校で英検、高校で TOEFL を受験させたり、課題研究や論文発表に力を入れるという A 中学校・高校の教育実践からも見て取ることができる。

2) 中高を通してのカリキュラムの工夫

同校の中高一貫カリキュラムの概要は、次のようになっている。

[中学 1 年・2 年] 体験を重視しながら、ものの見方、考え方、学習上の課題解決の方法を身につけ、基礎的な学力を確実に育成。

[中学 3 年] 学習の成果を問う指導を行いつつ、高校の先取り学習も開始。

[高校 1 年・2 年] 将来の進路目標を定めながら、文系・理系を問わず人文・自然・社会科学の知識を偏りなく学習。高校までの学習範囲を修了。

[高校 3 年] 難関大学突破、そして大学の授業と連携した高度な学習を展開。

このように、公立の学校が中高 6 年間で行う内容を 5 年間で終わらせ、最後の 1 年間は他大学進学者の場合は受験勉強に、A 大学進学者の場合は大学に入ってから準備となるような学習に充てている。また、例えば数学は中学から一貫して代数 (計算) と幾何 (図形) に分け、通常の単元の流れにとらわれない順序の授業を行っていたり、理科でも物理・化学・生物の 3 分野を系統的に教えていたりといったカリキュラムの組み替えもやっており、学年や中学・高校といった枠を越えて、単なる前倒しではない、流れを考えたうえでのカリキュラムを構築して実践しようとしている (2003 年中学校入学案内)。

3) 国の中高一貫制度との関係

A中学・高校は、国の中高一貫制度の併設型を採用している。しかし、「国の制度を使うメリットは、文科省のリストに載ることと、カリキュラムの可変性があるということくらいしかない」と校長はいう。前述したようにA中学・高校では中高を通したカリキュラムの組み替えを行っているが、上級の学年の授業を行おうとしても道教委から教科書を事前に配られることはなく、副読本を使って授業を進めなければならないという実情がある。国が行っている中高一貫校に対するメリットは、もともと自由度の高い私立学校にとっては大した優遇措置であるとはいえず、「補助金を増やす、学年を早めて教科書を配るなどの優遇策がないと、国が進めている中高一貫の制度は広まらない」と校長は考えている。

4) 中高の連携と教員負担

教員はほとんど中学校・高校両方の教員免許を持っていて、年度によって今まで中学校で教えていた教員が高校で教えることや、その逆のこともある。中学だけ、高校だけという形で偏らないように、一定期間に多くの教員が中高両方を担当できるようにするのが人事の方針である。ただし、中高一貫教育はまだ始まったばかりの段階といってもよく、全教員が中高両方を十分に体験するにはいまだ少し時間がかかる。連携型の中高一貫教育では設置者の異なる別組織の中学校と高校が連携を取るという難しさがあるが、A校は併設型といっても異なる組織が連携しているというよりは、最初から1つの学園を構成しているという方が正確である。校長・教頭も、中高一貫教育といってもあえて異なる組織を連携させる活動を積極的に推進するというよりも、最初から6年間が一続きであるのが当然という感覚で運営を進めているということであった。

中高の会議は、まず合同で行い、その後中高分かれて会議をやるという形式になっている。教員は現在、通常の授業だけでなく、講習、担任、分掌、会議、PTAなどの渉外、印刷などの実務、クラブ活動など多岐にわたる仕事を請け負っている。管理職もこうした教員の職務について再検討することを課題として認識している。これに中高2つの会議が加わり、またカリキュラム組み替えの作業と組み替えられたカリキュラムに基づいて実際に授業を行うための準備で、教員の負担は相当大きいものがあると思われる。

3 A中学校・高等学校の授業の特徴

前述したようにA中学校・高校の教育は、効率的な進学教育と「先を見通した学習」の2つで成り立っている。

1) 進学教育

中高全体の制度から見て大きな枠組みでいえば、進学教育として単元組み替えによる効率的なカリキュラム、公立の学校よりも長い勉強時間ということが挙げられる。木曜日以外は1日7時間授業で、公立中学校と比べ主要5教科に割く授業時間は1.5倍以上となっている(2003年中学校入学案内)。個々の授業を取り上げて見てみると、受験対策として、個別学習、習熟度別クラス編成、などが挙げられる。学力に差のつきやすい英語教学は2人の教員で行う個別授業や習熟度別クラス編成を取り入れている。成績不振者に対する補習授業等も行っている。他大学進学希望生徒のための受験対応の選択授業も豊富に用意されている(2003年高校入学案内)。

2) 「先を見通した学習」

他の私立進学校の教育実践とは大きく違う点だが、この大学進学後・大学卒業後を見据えた学習である。「世界に通用する18歳」というスローガンの下に、国際的視野、実用的な英語能力、コンピュータ技術、話す力、書く力、職業選択について考える力、などの育成に力を注いでいる。国際的視野を広めるために、中学3年生・高校2年生における海外研修旅行を行ったり、「地球市民」(総合学習)の授業の中で国際的な課題に触れたりしている。英語に関しては一般的な文法中心の学習ではなく、ネイティブの教員と日本人教員による会話中心や文法指導の授業を行っている。中学1年生から本物の英語の発音に触れることにより、生徒のリスニング能力を育てていることや、中学段階で英検、高校段階でTOFLEの受験を積極的に薦め、将来に向けて自ら学習する習慣をつける工夫をしている。また、「外国人と接することに億劫さはない」(C教頭)というほどに、大学に入ってから海外に出かけていく生徒が多いようである。これも海外研修旅行や外国人教員と普段から接していることの成果である。

また、それぞれの科目でコンピュータを積極的に活用したり、話す機会、書く機会を作ったりしているのも特徴

である。中学校および高校に入学すると全員にネットワークのパスワードとメールアドレスが与えられ、連絡等もEメールを使って送られることも多い。英語ではコンピュータを使った学習法が取り入れられ、地理でもコンピュータの地図ソフトを使った学習がされている。課題をフロッピーディスクで提出する授業もあり、大学進学後も使えるパソコンの技術を中学・高校で身に付けることができる。理科社会の課題研究・理科の実験報告・地球市民・「MESE」(後述)・弁論大会・宿泊合宿・海外研修旅行の事前学習・学校祭など、生徒たちは数多くの議論する機会、論文を書く機会を与えられている。特に「地球市民」の授業は、大学の授業の先取りといった形で、テーマに沿って調査・プレゼンテーション・討論などを行う授業である。その発表の場として学習発表会というものがあり、例えば「テロに対するアメリカの行動について反対か賛成か」などといったディスカッションをすることもある。これらによって培われた話す力、書く力は大学進学後、大学卒業後も役に立つ能力である。これらの成果は弁論部の全国大会優勝や、慶応・早稲田大学などへのAO試験合格者の数などで証明されるだろう。

そして、職業や将来への選択を考える機会をたくさん与えられているのも特徴的である。例えば進路指導の一貫として夏休みに、高校1年生では職業調べ、高校2年生では学部研究を行っていたり、土曜講座では大学の教授を招いて大学での研究についての講義を聴いたりすることもある。また、各種学会への参加が公欠として認められることや司法講座、会計士講座、第2外国語などの講座を開講していることなど、学校全体として、生徒の将来を考える手助けをしていることが伺える。

4 まとめ——「学力」と「学習能力」の両立——

以上見てきたように、A中学・高校の教育は大学の進学実績だけにとらわれない、その先を見た教育であるといえる。海外研修旅行や地球市民の授業に代表されるように国際的視野・話す力・書く力などの育成に重点をおいている教育を行い、そのような教育を見越した上で当初から中学校と高校を併設する予定で北海道の土地に開設された学校なのである。また、私学ならではの充実した設備、海外の学校との提携、交換留学制度、奨学金制度などにより、生徒の成長をバックアップしているのである。

A中学・高校は、3つの「学習能力」の育成、獲得を学校の教育目標としている。①「自己学習力」(さまざまな事がらに興味や関心を持ち、自ら進んで学んでいこうとする姿勢)、②「自己表現力」(蓄えた知識を生かして自分の意見や主張、感性などを発揮し、多くの人たちとコミュニケーションできること)、③「自己啓発力」(全地球的な広い視野に立って、さまざまな問題や課題の解決に向けて自らを高める力)、の3つである(各年高校入学案内)。同校では、単に知識の量的獲得を目指すのではなく、知識を獲得する前提としての学ぶ意欲や、獲得した知識の表現方法、それに知識を生かし、実践していく課題認識力という、幅広い「学習能力」の獲得を目指しているのである。

重要なことは、こうした「学習能力」を「高い学力」を支える位置に置いている点である。同校では、「ゆとり」と「学力」を対立するものとはとらえず、その両立を目指している。大学受験を最重視して生徒を競争させるのではなく、「自立的に行動し、社会性を身につけ、豊かな人間関係を築くことができ、自ら学ぶ目標を定めていける人間」を育てることが同校の目標であり、「深く認識する」「わかったことを使いこなす」「総合し新たな発見をする」という学力をしっかりつけることが「本当のゆとり教育」だという(B校長、2003年中学入学案内)。ゆとりか受験かという単純な二者択一を離れて、意欲や実践力も含めた意味での学ぶ力をつけることで知識獲得的な意味での学力も高め、それによって受験にも対応していこうという統合的な考え方で、子どもの成長と進路実現を両立させていこうとしている。これは、大学受験中心の教育に猛進しているとされる私立中高一貫教育の中で、狭い意味の「学力」獲得だけに偏らない、豊かな教育実践を生む可能性を内包しているといえよう。

次章では、このような教育コンセプトが実際の個別の教科教育やその他の教育活動において採用され、十分に実践されているかを検討したい。またその後の章では、こうしたコンセプトが生徒や保護者にいかに理解され、その実践がいかに評価されているかを検討することとする。

第4章 A中学校・高等学校の教育実践——各教科・特別活動の特徴的な実践

本章では、前章で述べたA中学・高校の教育実践の特徴を、さらに教科ごとのより具体的な教育実践の検討を通して確認していきたい。調査ではすべての教科について担当教員にインタビューすることができなかった。ここでは、英語、数学、理科、社会科（公民）の4つの通常教科と、「法律演習」、「土曜講座」、海外研修旅行の3つの特別な授業科目・特別活動について扱う。

1 英語教育

以下は主にD教頭（中学校、英語科）へのヒアリングを材料にまとめた。

1) 英語教育のねらいと構成

Aの英語教育のねらいについては、D教頭が強調されるネイティブ教員による指導の効果が物語っているだろう。つまり、早いうちから生徒がネイティブ・スピーカーの生きた英語に触れられることで、特に彼らのリスニング力そのものが伸ばせること、そしてそれに伴い外国人とのコミュニケーションに対する自信が形成される、この2点が大ききねらいとされている。「リスニングの強い子はやっぱり喋れるようになるのも早いし、書けるようになるのも早い」とD教頭は言う。A中学・高校の英語教育は、これまでの我が国の英語教育が「読み書き」に偏重していたのに対して、リスニング、コミュニケーション能力の育成を指導における最優先ポイントとしているのである。

英語科での特色ある実践としては、主に以下のことがあげられる。

- ・ 中学校における週6~7時間という時間割編成
- ・ ネイティブ教員と日本人教員との「TT（ティーム・ティーチング）」
- ・ 重点的な個別学習指導

これらの3点を基礎とし、中高一貫6年間における独自のカリキュラムを通じて、生徒に「真の英語力」（学校HP）を育成する取り組みが成されている。ここでの「真の英語力」の育成とは、「リッスン・メモライズ・スピーク」中心の教育により、正確な英語を繰り返し聞いて発音しながら文法を覚えていくという総合的な英語能力の形成を意味する。またそのような学習に対応して、オーストラリア語学研修、短期相互交換プログラム、海外研修旅行など、授業を通じて身につけた英語力を実践できる機会を数多く用意している。

ここで上記の特色3点について述べよう。まず中学校における週6~7時間の授業時間は、公立中学校での英語に比べて2倍の授業時間を編成していることになる。中1は週6時間授業で、そのうち2時間はネイティブ教員が参加するTTとなる。同様に中2では週6時間でTTが4時間と半分以上にネイティブ教員が授業に加わる。そして中3では同様に週6時間、そしてTTが2時間である。

またその中で特徴的なことがネイティブ教員と日本人教員とのTTの授業である。D教頭は、TTで「導入」を行い、日本人教員のみでの授業で「定着」を行うと言っている。これは例えば、ある文法事項を教える際、実際の英語の対話を生徒に聞かせ喋らせながらその中にある文法ルールを発見させるが、その実践をTTというネイティブ教員と日本人教員という2人体制の中で日本語を介さずに行うのである。TTで学んだ知識は、その後の日本人教員による授業の中で練習され、生徒の中に知識・能力としての「定着」がはかられていく。その時間配分としては、TTに2時間、「定着」に2時間をかけ、そして残りの2時間でもう1つの特徴である個別学習を行う。

個別学習では、生徒は個々の学習内容理解度に応じて個別に課題に取り組んでいく。しかし個別といっても学年毎にそれぞれ課題が設定されており、1年次では語彙力の強化や発音指導を中心にスピーキング能力の育成を徹底的に行う。2年次では自由英作文を書かせてネイティブ教員が添削指導を行い、様々な英語の表現方法を学ぶ。そして3年次になり、インターネットを使ったWBT(Web Based Training)教材を用い、例えばビジネス英語に挑戦するなど、個々の進度に応じた学習を生徒自身で主体的に行っていく。

この個別指導については、限られた数の教員がどのように生徒各個人に対応していくのかが課題として考えられるが、A中学・高校の場合は充実したコンピュータ設備がそれを助けている。教員が日々作成するプリントやWBT

がすべてコンピュータ内に用意されているため、生徒たちは自分の学習進度・課題に応じてそれらを選択し学習できるのである。

2) 中高6年間にわたる教科内容の編成

教科内容の編成については、他の私学の中高一貫校でも見られるように、A中学・高校でも中高の教科内容を高2までの5年間で全て終わらせるよう、独自のカリキュラムの組み替えを行っている。しかし典型的な進学校が残りの高3の1年を受験対策に徹底して集中させるのとは異なり、A中学・高校の英語教育においては受験対策に限らずTOEFL対策なども行っているのが特色である。これは、大学受験を目指す生徒だけではなく推薦でA大学に進学する生徒、また海外留学を視野に入れている生徒のように、生徒の多様な進路希望に応じた学習機会を用意したい学校側の方針の表れである。

このようにカリキュラムの組み替えを行っていることから、学習指導要領の沿った検定教科書とは必然的に異なった学習進度になっていく。その組み替えは、「自然な言語獲得に近いパターン」に沿って作られているため、それによって検定教科書の扱いは副読本にすぎなくなるという。

3) 授業計画を立てる上での工夫・課題

このように独自の特色ある教科カリキュラムを作り上げ、それを実践するには、そこに中心的に携わる教員の工夫や課題意識が要求される。この点について、ヒアリングでD教頭が最も強調したことは、教員の潤滑な意思疎通・協働体制の形成である。

教員同士の意思疎通やコンビネーションについては、おそらくどの学校のどんな実践についても求められるものである。しかし、A中学・高校の英語教育においてそれがとりわけ重要なのは、先に説明したネイティブ教員と日本人教員によるTTの授業があるからである。英語科を担当する教員たちはTTを組む教員同士で1週間に1回、1時間などの相談の時間を作り、カリキュラム作成から授業内容の細かい部分までの相談をじっくりと行っている。またそれに伴い、ネイティブ教員にはTESLという専門的な英語教育課程の修了、また日本人英語教員にはネイティブ教員との綿密な打ち合わせを可能にするハイレベルな英語力、が求められる。

その他、教員たちの課題としてあげられることは、生徒たちの家庭学習の時間をどう作らせるか、どう有効活用させるかである。特にA中学・高校では生徒のリスニング力の形成を重要視していることは前に述べた。これはつまり、生徒がどれだけ多くの時間英語の音に触れることができるかがその鍵を握ることになるのだが、だからこそ教員たちは授業という限られた時間以外でいかに生徒たちをエンカレッジしていけるかに課題を感じている。

4) 生徒や保護者の反応

これらの英語科の実践に対して、生徒の反応は、D教頭の談では概ね良く、「生徒はもう楽しい楽しいだね」とのことである。その理由は、コミュニケーションやリスニングの育成を目指し授業が進められるために、生徒たちは常に実技的な授業参加を行う環境にあるという点にある。教科書に沿って読み書きを習うスタイルと比べれば、授業の中で実際に英語を聞き話し、コミュニケーションを学べることは、生徒にとって楽しいものであろう。

しかし一方で、保護者の反応は生徒と異なっていたようである。独自に組み替えたカリキュラムに沿って授業を行っていることが、昔の英語教育を受けてきた保護者世代にとっては、しっかりと能力が身につくかどうかという不安を呼び起こしたようである。しかし、徐々に英検の合格率などで成果が表れてきてからは、保護者もだいぶ安心されてきているとのことである。

以上のような父母の反応を踏まえてみると、私学の独自の実践というのはその内容の質だけではなく、その実践の成果が問われる意味で厳しさが存在する。実際に授業を受けている生徒は楽しく学べていることに満足するだろうが、保護者はその楽しさに成果が伴うことをシビアに要求するのである。学校としての目指したい教育理念と教育内容がある一方で、教育実践に対する生徒のニーズと保護者のニーズの両方に応えなければならない難しさ、これが私学の教育を取り巻く実態である。

5) まとめ

A中学・高校の英語科の実践は、従来の「読み・書き」、文法中心の英語教育とは一線を画する。生徒が英語をコミュニケーションの道具として使えるようになることをねらいとする指導体制やカリキュラムを計画し実践し

ているのである。また、その教育内容・実践の特色は、A中学・高校が「世界に通用する18歳」（2003年度入学案内）、「学校の国際化」（D教頭）を目指し、学校としての特色を作り上げていく上でも重要な位置にある。

2 数学教育

ここではA中学・高校の数学教育について、C教頭（高校、数学科）に対するヒアリング内容を中心にまとめる。

2003年4月に高校の学習指導要領が改訂され、それ以前にすでに改定されていた小中学校と合わせて、数学の教育課程が大きく変わった。大まかに言うと、今まで小学校で扱われていた内容が中学校へ、中学校で扱われていた内容が高校へと持ち上がり、その一方で高校における教育内容については科目間の移行は行われたが削減はほとんど行われず、結果的には数学Ⅱに大きくしわ寄せがくることになった。この改訂から、文部科学省のねらいとしては、義務教育が終る中学3年終了の段階までは、あまりウエイトをかけず全員が横並びになるようにし、高校入学後は、学校や学科、進路に応じて必要な部分を選択するというように読み取ることが出来る。

1) 中高一貫の授業計画

A中学・高校では、中高6ヵ年の授業計画を開始した時期と、前述の学習指導要領改訂の時期とが重なった。この改訂を受けて、「これの通りやっては絶対に学力が下がることは目に見えてるし、そうじゃない組み方をしよう」ということで、「代数・解析」と「図形・幾何」の分野に大きく分け、数値処理と空間図形認識の両方の学力を平行してつけていき、高校2年で合流させるという編成をとっている。高校2年の途中からは、生徒各自の進路に合わせて文系理系に分かれる。そして、通常は中高6年かけて終らせる内容をこのように編成し直すことにより5年間で終らせることができ、最後の1年間の使い方としては、他大学受験生徒は問題演習、A大学進学生徒は経済数学や物理数学など大学での専攻に即した基礎学力を養成する授業が用意されている（これらの授業は、他大学進学希望者でも受講できるようになっている）。

現在高校1年生は、ひとつのクラスにA中学からの内部進学と高校から入学してきた生徒が在籍している。進度等の関係で数学の授業は分けて行っている。

2) A中学・高校における数学教育の特色

①習熟度別授業

A高校では、主に定期試験の結果を基準に習熟度別に生徒を分けて授業を行っている。中には劣等感を持つ生徒が生じることが考えられるが、この問題に関しては、「やっぱり理解度を上げることの方が優先」としている。ただ、「生徒の学習集団としての層が均一化」すれば、習熟度別授業を展開する必要はなくなるとも考えている。

②コンピュータを活用した授業

数学は、ギリシャ時代から「黒板・チョーク」の世界で、あとは頭の中でのイメージによるとされてきた。そこで、A中学・高校では、コンピュータのコンテンツを使い、グラフや図形を見せることで、生徒にイメージづけるという授業改革を行っている。現在は既製のソフトを使っているが、A中学・高校独自のコンテンツ作りというのが、現在の数学教育の課題のひとつである。

3) まとめ

A中学・高校の数学教育において、教員の工夫・苦勞が見られるのは教材作成である。「学校規模が大きいほうですから、当然これ（カリキュラム）を立案する人と、実際にやる人にずれがでできます。そこをどれだけお互いに、6年間のことを頭に入れながらできるのか、組織としての合意体制をどう作るのかということがやっぱり大きいですね」とC氏も述べているように、教員同士の連携が重要となっている。現在は、中高一貫向けの教材も出版されており、A中学・高校でもそれを利用してカリキュラム編成を行っている。

また、「数学が受験科目から外れた場合どうするのか」という課題が教員に預けられている。数学は、生徒の側も「受験にあるから勉強する」という意識が強い一方で、教員も最後の切り札として「これは受験に出るぞ」というセリフを口にしてしまう。そのような受験の枠から離れても生徒が意欲をもって学んでいける授業を展開できて初めて充実した数学教育を生み出したといえる。そうした数学教育をいかに創造できるのか、それが現在の課題と

なっている。

3 理科教育

本節は、A中学校・高等学校における理科教育に関して、高校2年の理科担当のG教諭へのヒアリング調査をもとに検討する。

1) 目標と特徴

A中学校・高等学校は、独自に学習指導要領に相当するものを組み立てており、授業計画は理科に限らず、それに基づいている。文部科学省発行の学習指導要領を生かそうとしつつ教員間の議論を重ねたが、特色ある授業計画立案に寄与するものではないということから、それを組み替えた。

A中学・高校の理科教育は、「『なぜ』『どうして』と感じる心を大切に、実験・観察を中心とした『考える授業』『意見発表する授業』を通して科学的な思考力を培うことを目標」とし(2003年中学校入学案内)、「体験を通して理科を身近なものに」することを掲げている(2003年高校入学案内)。このような理念のもとで展開される教育実践の特徴として、次の3点が挙げられる。

第一に、学習内容の系統性に留意しつつも、仮説実験授業に重きを置いている点である。文科省検定済教科書も購入するが、それを用いることなく、同校理科教師陣が作成した独自の教科書を使用している。内容も仮説実験授業重視を念頭に置いて構成されており、各単元ごとに生徒自身の仮説を書き込む欄を設け、それを確かめる実験の手段も生徒自身に考えさせるよう配慮されている。この教科書を通して、「知識を学ぶ、確かめる、そして発表する」、PLAN-DO-SEEという同校独自の教育理念が反映された授業展開がなされる。実際に、同校の化学授業においては総授業時間数の半数、すなわち6単位中3単位分が実験になっており、物理・生物においても実験を重視した授業計画となっている。担当教員による授業内容・進度にばらつきが生じる恐れもあることから、同一教科担当教師間での相当な打ち合わせがあるという。実験内容においても、可能な限り生徒の自主性を尊重しつつも、数回の統一実験を必修として、最低限の足並みは揃えるよう配慮している。

第二に、教科間におけるコラボレーションが挙げられる。各教科の専門的枠組みを越えて、生徒の興味・関心をかき立てる授業展開を企図した取り組みである。たとえば、「生殖」に関する授業は本来生物科の教育内容であるが、ここで保健科とのコラボレーションを試み、保健の授業において「生殖」を扱うのである。確かに、保健の教育内容には男女の性差に関するものなど生殖と関連する箇所もあるが、それに加えて保健担当の教師が生物科の専門用語などを勉強したうえで、これを交えて授業を行おうとするものである。

第三に、積極的な校外学習活動の推進である。同校においては学会や研究会などの情報が一カ所に集約され、生徒がそれを自由に閲覧できる仕組みになっている。生徒はたとえば日本獣医学会や日本環境学会など、理科に関する学会・研究会に参加したい旨を申し出ることによって、平日における通常授業が公欠扱いになるのである。現在までに認定されているこのような講座は40~60にもなるという。

2) 生徒の反応・評価と授業内容の工夫

A中学・高校は、生徒に対して「授業評価アンケート」を行っている。この結果、理科に関しては毎年「満足度」が非常に高いという。G教諭によれば、生徒の授業に対する満足度は授業内容の工夫に起因するものであるとのことである。このように生徒の興味・関心を増すことに功を奏した工夫を以下に2点挙げたい。

第一に、先に述べた仮説実験授業の取り組みである。自分で仮説を立て、自分で実験方法を考案することに触発されて、自主的に学校の貯水池の水質を調査する生徒も出てきたということである。

第二に、「映画でみる理科」という取り組みである。これは通常授業以外の休業期間における講習の中で実践されている。たとえば、「アポロ13」という映画を見て、宇宙が出てくることから、「無重力」に関する授業を行う。あるいは、「ターミネーター2」という映画を見て、液体金属でできた悪いターミネーターが液体窒素によってやられるシーンが出てくることから、液体・液体窒素・液化水素などの物質や低温現象に関する授業を行う。このように、ただ単に問題集を解かせることをもって授業とするのではなく、何より生徒の興味・関心を引き立て、その

面白さを通じて学習動機を芽生えさせるのである。このことによって、生徒は積極的に理科を勉強するようになるという。

3) 教員の力量形成

上述してきた特色ある教育を実践するうえで、教員の力量が非常に重要になってくる。

教員に関わる課題としては、まず多忙化の問題がある。単なる知識習得学習でなく、生徒に生きた学力と学ぶ意欲を身につけさせる授業を本格的に展開しようとすれば、相当の時間と労力が要求される。

それと同時に、教員の力量形成が独自の課題として存在する。同校の特色ある教育実践では横断的側面が多様に含まれ、そこでは時として人間教育を要求される。したがって、単なる教科力量ではなく、教員としての総合的な力量、すなわち教員力量が必要とされるのである。G教諭によれば、こういった教員力量は教育大学をはじめとする教員養成大学では身につけることはできないという。したがって、同校の教育現場において教師集団の中で互いにそれを育成しあうメニューを構築する必要があるという。そこまで踏み込むことなくして、同校の教育理念を反映した特色ある教育実践は成し得ないということである。

4) まとめ

同校の理科教育においては、学習を「強いる」というよりもむしろ「仕向ける」ことを念頭に置いた教育実践上の工夫・仕掛が数多くなされており、何よりもまず生徒の興味・関心を掻き立てることを重要視していることがわかる。このことが生徒の学習意欲を向上させ、ひいてはそれが学力向上に寄与するものになり得るとの見通しをもってカリキュラムが構築されている。それが学力向上に留まることなく、生徒自身の視野を広げる教育効果となって現れるならば、まさに「21世紀に通用する」人間形成に結びつく可能性をもった教育実践となろう。

このような取り組みを成就させるためには教員自身の力量と意欲が必要であることは言うまでもない。教員力量養成プログラム作成の取り組みは、本校教育実践の成否を分ける1つの鍵となろう。

4 社会科教育と「法律演習」

ここでは、A中学・高校のH教諭へのインタビューをもとに、社会科（公民）と「法律演習」の授業についての特色・実践をまとめる。

1) 公民の特色・実践

A中学・高校の公民の授業は、従来中学2単位・高校2単位だったが、今後（2004年度より）中学0単位、高校4単位にする予定である。これは中高一貫校のメリットを活かしたもので、「高校1年生の4単位で深く掘り下げて具体的にいく方がより充実した政経ができる」ということである。公民も学校全体の理念と同じく「考えさせ、自分の意見を持つこと」、「自分の意見を表現したり書いたりすること」を重視し、授業で新聞記事を配り社説を読ませたり、新聞で話題になったキーワードを出し生徒にその説明をさせたりといったことをしている。実際に使うわけではないが、試験問題を生徒に作らせたりすることもある。また、A大学進学コースの生徒に対しては、課題研究というものがあり、2週に1冊のペースで新書版の本を読ませている。論文も1年間で3万字から4万字近く書かせていて、最終的には本とは別に自分で研究する分野を作り発表する。発表前には生徒が徹夜で準備をするほどだという。まさに大学並の学習を行っているといえる。また、他大学進学コースの生徒に対してもただ受験のためだけに政経の知識を与えるのではなく、新聞を活用したりしてただ勉強をするだけにしないようにしている。「知識だけを身に付けた生徒を大学は求めていないと思う。自分たちが学ぶ力というものを身に付けさせてあげたい」とH教諭は考えている。

2) 「MESE」(Management Economic Simulation Exercise)

また、「地球市民」の授業のひとつである「MESE」(ミース)も、社会科と同様に、話し合い決定する力、多面的に物事を見る力をつけるために行われている。「MESE」とはコンピュータを活用して企業経営を実体験するシミュレーション・プログラムで、グループに分かれ、話し合い、商品の価格・生産量・広告宣伝費・設備投資費・研究開発費などを決定いくというものである。例えば、架空のペンを売り出すというテーマを与えられたとす

る。それについてどれくらいの生産量にするのか、値段はどれくらいに設定するのか、開発費はどうするのかということを組み立てて売っていく。相手チームの出方を見たり、2国で売る場合はどのような比重で売るかを考えてたり、などチーム内で話し合いながら決定していく。チームを組むのは必須で、チームを組めなかった子はネット上で他の学校の子とチームを組まなければならないことになっている。日本全国で400くらいのチームと何回戦もゲームし、A高校も一度優勝している。英語での世界大会もある。この「MESE」の狙いは、企業家精神の育成というだけでなく、意思決定能力やグループ内の異なる意見に耳を傾け、議論していく力を身につけるといふところにある。「地球市民」の授業の中で必修となっており、一年間のうちに何回か行っている。中学校でもやさしいバージョンの「MESE」を授業で行っている。

3) 「法律演習」の概要

「法律演習」(司法講座)とはA大学進学者を対象にした選択教科で、高校2年生・3年生がそれぞれ週3時間受けている授業である。具体的な法律論を勉強するものではなく、国際政治学・地方自治・公共政策・選挙制度なども含めたトータルな法の概念を2年間で勉強していくものである。定員は20名程度で、ゼミ形式で授業は進められる。

定期試験は大学と同様に80分の試験で大問2問を説かせる形式を取っている。例えば大問1で民法のいろいろな問題があるとすれば、問1から問5まであつていろんな見方、解釈をする、自分で判決をするというような問題を出している。「隣の桜の木の下で遊んでいたら虫が出てきてアレルギーになった。隣のおばさんはどう訴えたらいいか」というような答えがあつてないような問題を、H教諭が制作して出題している。六法全書は持ち込み可だが、80分間で3000文字程度の文章を考えながら書くことはほとんどできない。しかし、これを2年間続けることで3年生になるとできるようになってくる。大学に向けて80分の試験に慣れてくるのである。

論文も大学並みのレベルを要求されている。高校の卒業レポートは1万字(しかしだいたいの生徒が3万字くらい書いてくる)で、進級レポートは7000字から1万字のものを提出しなければならない。題名はあらかじめ先生に申告して書き進めていく。

また、授業では模擬裁判も行っている。札幌弁護士会が作ったシナリオを見ながら裁判を進めるという形での模擬裁判を行う学校はいくつかあるが、事件の概要だけ渡して、検察側と弁護側に分かれ論告求刑から最終弁論までを1ヶ月使って自分たちで作り上げるという作業まで行っているのは、高校では珍しい。

このように、「法律演習」はまさに大学進学後を見据えた授業であると言える。単なる法学の先取りというだけでなく、大学の授業時間・テスト形式・レポートに慣れさせる工夫をし、ゼミで議論する力、自分たちで話し合つて物事を深めていく力を育てている。実際に、A高校の「法律演習」を取っていた生徒はA大学でも非常に高い評価を受けているという。

4) 「法律演習」を受ける生徒たちの進路

「法律演習」は本来、A大学の法学部に進む優秀な生徒を育てるための授業で、3年生はA大学進学コースの生徒しか受けられない。しかし、今年(2003年度)の2年生は他大学進学コースの2年生も増えてきて、授業を取っている6割の生徒が他大コースである。また、最近ではA大学進学コースを取っていても、辞退して早稲田・慶應大学等を受ける生徒が出てきている。彼らにとって、課題の多い「法律演習」を取っていることは受験にとって不利なことではない。「法律演習」を受けている子は自信満々でAO入試を受けていく」とH教諭が言うように、生徒たちは慶應・早稲田・中央大学といわゆる難しいと言われる法学部に受かっている。「法律演習」を受ける子は論文でも賞を取っていたり、弁論部で全国優勝をしたりしていて、この授業は受験勉強の邪魔になるところか、書く力やプレゼンテーション能力の上達により、推薦入試やAO入試で大きな武器となっている。進学実績として数字となって表れている「法律演習」の成果は、A高校の大きなアピールともなる点であろう。

また、以前は「法律演習」を受ける生徒のうち4割くらいが司法試験を目指していたのだが、最近では7割くらいの生徒が司法試験を目指す生徒になってきているという。司法試験に興味があるけど経営に行こうか迷っている生徒、ロースクールを目指している生徒など、自分の進路をしっかりと固めて「法律演習」を受けている生徒が増えてきている。

5) まとめ

B校長が「本校の3年間で培われた学力は、難関国公立大学や有名私立大学を突破するだけでなく、大学進学後の高度な専門教育や国際教育の中で限らない力を発揮します」と入学案内で書いているように、この社会や「法律演習」では受験勉強だけではなく大学進学後を見据えた教育がなされていた。H教諭は「中学高校を通じて新聞の『行間を読む』ようになってほしいと思っている」と考え、公民や「法律演習」で新聞を使った授業を行っている。また、「法律演習」では「単なる『法律』という側面からだけでなく、『司法』という幅広い枠組みで授業を行いたい」という展望をもって、知識だけではなく幅広い視野から物事を見られる力を育てようとしているのだということがインタビューの中からひしひしと伝わってきた。このような力は法学部に進む生徒だけではなく、あらゆる分野に進む生徒にとって、大学やそれ以降の大きな力になることだろう。また社会科の課題研究や「法律演習」に代表される「書く、考える、プレゼンテーションする能力」も進学後の大きな力になることは間違いのない。高校生たちが課されている課題の多さは大学生のそれに匹敵する量である。これを高校時代にこなしてきた生徒が大学に入ってきたら、より高いレベルに挑戦することが可能である。さらにこれらの授業で興味を持った内容を大学に入ってから研究している生徒もいるという。まさに大学につながる教育がされていると言える。

そこであえてさらなる課題を挙げるとすれば、保護者の理解についてだろう。やはりA高校の他の実践と同じく、受験勉強には一見直接関係がなさそうに見えるこれらの授業の成果を保護者が理解し切れていないようである。前述したようなAO入試、推薦入試での実績や、今後大学を卒業したAの生徒たちの進路などによってこれらの授業の成果は裏づけされるであろう。それらを基に保護者の理解を得、教師と保護者が一体となって大学進学後を見据えた教育を進めていくことが、今後A高校全体の課題となってくる。

5 「土曜講座」

ここではA高校における土曜日の活用の仕方、特に高校生を対象に行われている「土曜講座」について、C教頭に対するヒアリング内容を中心にまとめる。この「土曜講座」は、教科教育の枠外の情報提供を通じて、生徒の進路意識の向上をねらいとしている。

1) 「土曜講座」の概要

A高校で現在行われている「土曜講座」は、主に学校外部から講師を招き、各専門分野の内容を出来るだけ高校生にも理解できるような形で伝えるというものである。2003年度の「土曜講座」は、春と秋の2期実施された。1期の講座は、A講座とB講座の2種類に分けられ、生徒はA講座を選択すると4週連続、B講座を選択すると4週のうち2週参加することになる。これらのほかにも、大学等で行われる一般向けの講演会などで、学校が認定したものは、自主啓発講座として「土曜講座」の単位に認められる。

なお、A高校では、土曜日にこの「土曜講座」の他にも授業や模試などを実施している。高校生1・2年生の場合は「土曜講座」の他に年間6回程度の模試、高3他大学進学クラスの場合は10回程度の模試、高3A大学進学クラスの場合は年間6回程度のTOEFLの試験等が実施される(2003年度)。また「土曜講座」がない中学生の場合、年間約25回の土曜日の半数を総合学習の「地球市民」に当てられている。

2) 「土曜講座」の運営

①講座の選択

生徒はまず、A講座かB講座のいずれかを選択し、B講座の場合は自分の興味関心に沿ったテーマを選択する。B講座の場合、生徒はテーマだけを選び、どの講座を受講するかは学校側が指定するという形になる。昨年度は講座単位での選択となっていたが、この方法では講座によればらつきが出るのと、「全然知らない情報が入ってきてそこから目を開くという場合もあるから、生徒に選ばせるのはテーマのところまでの範囲にしよう。その結果受ける情報は、今まで全く興味がなくても、新しい情報が入ってきて、そこから興味が生まれる場合もあるので、細かなところまで生徒の今の興味関心に沿う必要はないだろう」という考えから、今年度はテーマの選択という方法をとった。

②生徒の反応

「土曜講座」では成績評価は行っていないが、レポート提出による出欠管理は行っている。具体的に言うと、生徒に、レポート用紙・顔写真とバーコードのシールを渡し、そのシールをレポートに貼って提出、バーコードで出欠管理をしている。レポートの内容は講義内容のまとめや感想で、講義の中で生徒にそれ以上の課題が与えられるということは現段階では行われていない。出欠管理については「本来的には……生徒の自発性が育っていけば、縛りをかける必要のないこと」としているが、現状ではそこまでは行っていない。学校側としても、出なければいけないという義務感で出席している生徒が圧倒的に多いだろうという考え方をしていた。しかし、B講座が4週のうち2週出席すればいいのに対し、4週連続で出席しなければならないA講座を希望した生徒が学校側の予想よりも多かったことから、情報提供の仕方によっては、A講座の分野（内容は表5を参照）に興味を示す生徒も存在することがわかった。また、生徒はテーマしか選択できないという点で、自分の興味のなかった分野に振り分けられる生徒も出てくるが、「今まで自分が知らなかった世界が広がった」「これを機会にこういうことに興味を持った」という感想が生徒からあがっている。教科教育の枠外の情報提供を通じて、生徒の進路意識の向上させるという学校側のねらいと、生徒の反応とはそれほどずれていないようである。

③課題

学校外部から講師を招くことが多い「土曜講座」では、教員の実務面での負担が課題として挙げられる。企画、講師の依頼、生徒の募集、生徒に対するケア、全てが教員の仕事となり、膨大な実務量となる。生徒へのケアの面でいえば、そこまでは手がまわっていないのが実情である。

3) 「土曜講座」の「これまで」と「これから」

I市にあるA大学の附属高校では、以前から「土曜活用」として土曜日を教科外の活動に利用してきた。それをA高校でも取り入れたのが、「土曜講座」の原形となっている。当時は、「教科教育の枠からはなれてもう一度高校生に伝えたいことをどういうふうな形で教材化できるか」というコンセプトで進められ、教員各自が、土曜日を8週使い、自らプログラムを組んで行っていた。しかし、教員の負担が膨大になるということで、2年でこの取り組みをやめ、その後2年間は、進学講習や講演会などを組み対応してきた。そして、昨年度から現在の形の「土曜講座」を展開している。この間一貫しているのは、教科教育の枠外の情報提供を通じて、生徒の進路意識の向上を図るというねらいである。

しかし、来年度からは、ねらい・手法の面で新たな「土曜講座」が展開されることになっている。例えば、医学部や歯学部を目指す生徒に対して、従来は3年間しっかり勉強することのみが指導されてきたが、それだけではなく、医療が現在抱えている現代的な問題を認識させるため、医師会や病院とタイアップして「医歯薬講座」というものを開講する予定である。

4) まとめ

公立学校では2002年度から学校週5日制が完全実施された。文部科学省は都道府県教育委員会に対して、私立学校が完全学校週5日制に積極的に取り組むことを求める通知を出しているが、公立で減少した授業時間数を、私立ではある程度維持できるというのが強みとなっている。表2を見てわかるとおり、Aでも月2回土曜日を休校とし、それ以外の土曜日を「土曜講座」などの行事のほか、通常授業にも利用している。

2004年度から「医歯薬講座」などの新たな取り組みが始まる。今までは、「進路意識の向上」がねらいだった「土曜講座」が、自らの進路に完全に即したものになってしまうような印象を受けた。しかし、現在と今後の「土曜講座」に共通して評価できるのは、学校外の大人との関わりを持てるという点である。「とにかく外からのいろんな情報を入れていく必要は絶対あるな」と思っているんですよ。僕らがやっていたらやっぱり、受験のためにはどう受かるかというふうになるけど、じゃあ全体的なつながりとしてこれは何なんだろうということを外の目で話をしてもらおうというのはすごく大切なことなんだろうなと思ってるんですよ。生徒たちも、僕らが言うのと同じ様なことを別な観点から言われれば、入り方って違いますから」とC教頭も述べているように、学校教育の一環とはいえ、学校外から情報を得る機会を提供するというのは、評価すべき点であると思う。

表5 2003年度「土曜講座」のA講座内容一覧

A1	物理と数学の接点	B307 国際	
A2	情報技術	B307-1	外国人に教える日本語
A3	科学から見た生物としての人間のバリエーション	B307-2	Merhaba(こんにちは)!トルコ —イランの国を見て隣国イラクものぞいてみよう—
A4	Science in English	B307-3	国連職員への道
B101 地球・環境		B308 人	
B101-1	やさしいエネルギーの話	B308-1	間違いだらけの意思決定
B101-2	光・色と科学	B308-2	捜査の結果は正しいのか～論理学入門
B102 芸術・表現		B308-3	キリスト教とイスラム教
B102-1	アメリカと出会う—映像で見るアメリカ史	B308-4	人と動物の関係学 —人の心理を測る—
B103 命・健康		B309 生物	
B103-1	健康で快適な住まいづくり	B309-1	遺伝子組替え穀物ってなに?
B103-2	ダイオキシンと環境ホルモン	B309-2	牧場とバイオガスパラント
B103-3	看護(看護学、資格取得、キャリアアップ)	B309-3	バイオって、なんだろう?
B103-4	「食べて・治す・防ぐ」そして、一緒に未来へつなごう!	B410 社会	
B204 世の中の仕組み		B410-1	北海道と本州の文化習慣の違い ～北海道で仕事をするということ～
B204-1	市場経済システム	B410-2	魚のアラと牛のフン～食料生産のリサイクル
B204-2	身近な商法の話～もしも旅館で物が盗まれたら	B410-3	観光を知る・学ぶ
B204-3	産業クラスターを中心とする北海道における 産業活性化の取り組み状況	B410-4	現代人の心と宗教
B205 文化		B410-5	報道の現場から
B205-1	熱帯アフリカ文化は 私たちの脳を活性化させる“妙薬”である!?	B411 自然界の原理	
B205-2	新しい土地の発見と地図	B411-1	紙のお話
B206 生活		B411-2	銅のお話
B206-1	魔法の家(街)は意外と身近に		

6 海外研修旅行

ここでは、A高校第2学年時の海外研修旅行について、同高校第2学年主任のG教諭(高校、理科)に対するヒアリング内容を中心にまとめる。なお、A高校では、第1学年の希望生徒を対象に、約2週間にわたる海外語学研修旅行を実施している。また、A中学校でも、第3学年の全生徒を対象に、約2週間にわたる海外語学研修旅行を実施している。ここで取り上げる高校2学年時の海外研修旅行は、これらの研修旅行のなかで最も規模の大きいものである。

1) 海外研修旅行の概要

A高校では、2年生全員を対象に、約1週間にわたる海外研修旅行を実施している。学校は海外研修旅行について、「単なる観光旅行ではなく、戦争・環境・歴史・福祉といった今日的なテーマについてそれぞれの現場で触れ、学ぶことができる『研修旅行』であり、また英語はもちろん、第2外国語を学んでいる生徒にとっては貴重な語学研修の機会ともなるもの」(2003年高校入学案内)としている。

2002年度の行き先は、中国、リトアニア、ベトナム、オーストラリア、ドイツ、マレーシア、モルジブ、イギリスの9カ国であった。しかしG教諭によれば「行く国は関係ないと言ってもいい」とのことである。その理由は、それぞれの国には「明確なテーマ」があるからである。2002年度は各コースのテーマとして、ドイツは「酸性雨とゴミの問題」、イギリスは「ナショナルトラスト」、ベトナムは「ストリート・チルドレンを救済する等の国際ボランティア」、モルジブは「地球温暖化」などが挙げられた。生徒たちはそれらの中から、自分の学習したいテーマにエントリーしていくという形がとられている。

また、研修旅行の実施は9月末だが、高校1年生の終わった3月から研修旅行実施までの約半年間に「事前学習」を行っている。最初の年には年6回くらいで、例えば午後カット・午前カットして行ったり、あるいは終日かけて行ったりしたようである。それ以後は放課後等の時間を使って行っていたが、2年前からはこの事前学習を家庭科1単位として認定し、授業の中でも6時間程度を組み込んでいるとのことであった。

研修旅行実施後は、コースによっては「総括文章」というのを発表したり、「白書」、意識調査などといったものを発表したりする。

2) 海外研修旅行実施の経緯とその目指すもの

1996年の学校設立時には、公立の進学校に優秀な生徒が集まるという北海道の構造に「いかに私学が風穴を開けるか」が重要なコンセプトであったが、そのためには進学実績だけではなく、その上に「プラスアルファ」をもった人間を育てることが求められた。その「プラスアルファ」とは、G教諭は「本物に裏打ちされた国際感覚」であるという。「本物の国際感覚」の育成を目指すものとして積極的に位置づけられているのが、この海外研修旅行である。

では、「本物の国際感覚」とは一体何だろうか。G教諭は、学習というものを次のように捉えていると述べた。まず1つ目に教科書などで自分で学習し、いろいろな知識を身につける。しかしこれだけではだめで、2つ目にこの習得した知識が本当なのかどうか確かめておかなければならない。教科書に書いてあることが嘘かもしれないし、日本で言われていることが本当ではないかもしれない。だからこれを自分で確かめておかなければならない。そして3つ目に、学んだものや確かめたものを発信し、「社会化・還元化」していくことが必要である。これらを行っていくことが「本物」の学習であるという。これをダイナミックに国際舞台でやってゆくの海外研修旅行であり、事前学習によって得た知識を実際の研修旅行で本物かどうかを確かめてくるということしなければ、生徒たちのダイナミックな自己変革はなしえないとG教諭は強調した。環境問題や平和・戦争問題や政治・経済問題などについて、実際の国際舞台で「本物」の学習をしていくことにより、世界や社会の現実・真実が何であるのか、あるいは何が課題であるのかといったことについて考えてゆく。そういった思考が「本物の国際感覚」であるといえよう。

3) コースの事例

では、各コースは一体どのようなものだろうか。G教諭から具体的に話を聞くことのできたベトナム、モルジブ、リトアニア、オーストラリアの事例についてまとめる。

①ベトナム

ベトナムは1996年から2002年まで毎年コースとして採用されている。このコースを選ぶ生徒たちは、半年間に及ぶ事前学習の中で、ベトナムの経済政策である「ドイモイ」を含め、ベトナムの政治・経済についての現状を学習していく。実際にどのような活動をしていくのかといえば、それは貧しい子どもたちの救済である。このコースに属する生徒は60人程度であるが、そこから6班くらいに分かれる。過去には例えば、「タイ企業班」「募金班」「労働班」などといったものが編成されてきた。「タイ企業班」では、雪印、ソニー、ロイズコンフェクトといった企業に、ベトナムの窮地・現状を訴え、物品の提供を願う。そうして得た物品を学校祭などで販売し現金に換えて現地へ持って行くといった活動を行ってきた。医療メーカーから100万円相当に上る額の医薬品の提供を受けて現地へ持っていったり、コンテナの海運会社から大きなトレーラーを借りてきて、8トンもの医薬品・自転車・車椅子・文具等を運んだこともある。

②モルジブ

モルジブコースは、地球温暖化問題がテーマである。モルジブは海拔が非常に低い国で、このまま温暖化が進み

海面が上昇すると、世界で最初に沈む国だと言われている。事前学習で生徒たちは、地球温暖化のメカニズムなど自然科学的な学習を行う。そして実際の研修旅行では、モルジブの民衆が地球温暖化についてどのように考えているかについて、首都マレーで街頭意識調査を行った。モルジブ行く前、生徒たちは、国民は地球温暖化について非常に心配しているだろうという予想・仮説を立てたのだが、実際に意識調査を行うと、ほとんどの国民は地球温暖化すら知らない危機意識のないものだった。このことに生徒たちはおおきなショックを受けたようで、これを通じて教育がいかに重要かを学んだという。

また、研修旅行中にはモルジブ共和国大統領・環境大臣との直接意見交換会も実施された。意見交換会の中では、海岸がどんどん侵食されているという大統領の訴えがあったため、翌年から生徒たちは環境保全のための植林事業を展開している。

③リトアニア

リトアニアでは、東欧諸国のひとつとしての激動の中での国づくりを実際に見てくると、また日本のシンドラとして有名な杉原千畝の軌跡をたどってくるというのがテーマであった。リトアニアでは、研修旅行に行く生徒たちとほぼ同年代の子どもたちが内戦を経験している。そういった同年代の子どもたちのところへ生徒たちはホームステイをし、ダイレクトに国づくりを学んでゆく。リトアニア共和国の首相宅にホームステイをした生徒もいた。

④オーストラリア

オーストラリアはG教諭が今年(2003年)新しく考えたコースで、ヒアリング実施時(7月)はまだ事前学習の段階である。グレートバリアリーフへ海洋学者とともに実際に潜り、海を通して環境学習を行うというのがテーマだそう。生徒たちは実際に海に潜るため、実施の前に全員がパリのオープンウォーターの資格をとる。そして、グレートバリアリーフの珊瑚鑑賞を通して、地球環境を学習してゆく。班は5班に分かれ、それぞれダイビングに関わる安全性の問題、歴史が人類に与えた影響の問題、海が地球環境にどう影響を与えているか、地学・地質系から見るグレートバリアリーフ、生物・生態系から見るグレートバリアリーフについて理解を深めていっている。

4) 教員の業務

以上のように生徒の海外研修旅行における活動を見てきたが、これら事前活動の過程で生まれてきたアイデアは、もちろんすべて生徒が組み立てていくというわけではない。G教諭によると、生徒が組み立て実行して行くという形をとるが、生徒がやるのはあくまで6~7割で、教員が生徒のお膳立てをし、ヒントを与えながら生徒と組み立てていくのが実際のところだという。教員が幅広い知識、コネクション、インターネット等を駆使して、コースごとにテーマを設定し、内容を組み立てて行く。そして徹底的な教員内の議論を行って、コースの組み立てができた上で、生徒の学習スタイルを見通しながら上手に誘導していくのである。

安全管理の面では、教員は生徒を消灯時間・外出時間・団体行動など細かく規定して「管理」していくのではなく、事前学習の過程で組み立てていった活動を生徒たちがいかにスムーズに実行できるかに重点を置いているという。現地の家庭にホームステイすることがあったり、治安や衛生が非常に悪い地域だったりということがあり、教員は事前に下見を行い、地元の警察、病院、政府機関などを必ず訪問をしている。例えばベトナムの場合にはマラリア感染の心配があるが、予防注射やワクチンはどうするのか、外務省・厚生省の勧告や責任問題などはどうなのか、地元の医療機関でだいじょうぶなのか、などの問題すべてをクリアした上でコースは認められる。保護者に対しては、各コースごとに説明会を開き、安全管理の説明、行程の説明などを行っている。

コースの組み立てにしても、安全面の確保にしても、それらの業務は膨大なものであろう。通常の授業や放課後講習などを行った上での業務であるので、教員の多忙さには相当大きなものがあると思われる。

5) まとめ

この海外研修旅行にA高校が非常に大きな力を入れているという強い印象を受けた。実際に行う活動は非常にスケールが大きい。コースの例をみてわかるように、他校の修学旅行・研修旅行にはほとんど見られないと思われる活動が数多く組み込まれている。そしてそこでは、生徒の「本物の国際感覚」の育成が目指されている。環境問題や平和・戦争問題や政治・経済問題などについて、実際の国際舞台で「本物」の学習をしていくことは、生徒たちにとって世界や社会の現実・真実が何であるのか、あるいは何が課題であるのかといったことについて考えてゆく

非常に良い機会となっているのではないだろうか。

実際にA高校3年生に対するアンケート結果（後述）を見ても、自分の進路を何を通して考えたかという質問に対して、地球市民や研修旅行などの活動とする回答が多かったり、「研修旅行で得たものが大きい」、「研修旅行が人生の中で大きな意味を持つと思う」、「（将来は）研修旅行で行ったベトナムなどに、海外ボランティアなどをしたい」などという意見もあり、一定の評価を受けているようである。

「生徒たちを学校の考えたメニューの中に連れて行き、さあお寺を見ましょう、神社を見ましょう、体験学習をしましょう、はい一週間終わりましたというものではない」とG教諭が言うように、単なる観光旅行といった意味合いの強い他校の「修学旅行」とは大いに異なる内容をもっていた。公立の進学校に優秀な生徒が集まるという北海道の構造に風穴を開けるべく、A高校は進学実績だけではなく「プラスアルファ」を持った生徒を育てたいとする基本コンセプトを立てた。その「プラスアルファ」を担うものとして、この海外研修旅行は非常に重要な意義を持っていると言える。

第5章 アンケートによる生徒・保護者の意識分析

本章では、2003年10月31日に回収されたA中学校・高等学校の教育活動に関するアンケート調査の結果から、生徒と保護者がA中学・高校に対してどのような意識や期待を持ち、いかなる評価を行っているかを分析していく。アンケートの対象になったのは高1の2クラスの生徒とその保護者、高3のA大学進学クラスと他大学進学クラスの生徒とそれぞれの保護者である。なお、アンケートの集計結果はグラフの形にして後掲してあるので参照されたい。

1 生徒アンケート 高1

回答者は86名、男子44名、女子41名（無回答1）である。出身中学校の内訳は、A中学29名、公立中学校出身者55名、その他2名である。公立中出身者は札幌圏（札幌を中心とする通学圏）が34名、その他の道内地域からが16名である。

1) Aへの入学について

<質問②>「受験は誰が主にすすめて決めましたか」では、自分だけで決めたのが37名、親・兄弟・先生からのすすめで決めたのが49名で、半数以上が親・兄弟・先生からのすすめによる。

<質問③>「どうしてA中学校・高校に入学しようと思ったのですか」では、最も多かった回答が「学校の設備が充実しているから」で49名だった。次に「ユニークな授業が受けられる」が30名、「海外研修旅行など国際化教育が盛ん」が26名と、A独自の教育理念・教育内容に期待した者も多く、また「自分の学力を伸ばせる学校だと思った」が26名と、高い学力を身につけられると期待した者も多かった。一方「公立の中学・高校には行きたくなかった」が19名おり、「その他」で「公立に落ちたから」とする者も2名いた。

2) 現在の評価について

<質問④>「A中学校・高校に通ってみて、今は学校に対してどう思っていますか。」では、「学校内の設備が充実している」に最も多い49名の回答があった。また一方、「大学や職業について学ぶ機会がある」に30名、「部活動・行事・課外活動が盛んである」に29名、「地球市民や土曜授業などの特色ある授業にやりがいがある」に21名、「授業で国際感覚や情報技術が身につけている実感がある」に17名であり、A中学・高校独自の取り組みに対して生徒たちの評価は軒並み高い。しかし「もっと授業や補習を増やして欲しい」に12名、また「受験対策が足りない」に8名と、基礎学力を伸ばす上で不満を持つ生徒もいる。

次に、A中学出身者のみが回答した<質問⑤>「Aの中高一貫教育についてどう思いますか」で、最も回答数が多かったのは「同じ友達と6年間学校生活をおくれるのが良い」で14名、次に「受験がないからあまり勉強しなくなる」の13名が続いた。友人と長く一緒に学校生活をおくれることへの満足と、高校受験しないことに対する

学力面での不安の両方が見られる。一方、「高校受験がないから、受験に集中した勉強をしなくてよい」に 9 名が回答し、高校受験に急かされない利点を評価する生徒もいる。

3) 卒業後の進路について

〈質問⑥〉「将来就きたい職業は何ですか」では、「専門職」29名、「国際的な職業」11名、「芸術・エンターテインメント関係」10名、「研究職・技術職」7名、というような結果であった。「まだわからない」にも17名の回答があった。

〈質問⑦〉「学校生活の中で自分の進路を、どのように、または何を通して考えましたか（考えていますか）」で、最も回答が多かったのは「自分の学力レベル、偏差値」で36名である。これを見ても、偏差値や学力が生徒の進路選択に与える影響は大きい。しかし、他の回答からは、A独自の教科教育や「地球市民」、「土曜講座」などの特別授業、そして研修旅行などを通じて、生徒たちは進路に対して関心を膨らませることができていることがうかがわれる。

〈質問⑧〉「学校の進路指導について求めているものは何ですか」では、「大学の学部・就職・専門学校全般の情報」に49名、「好奇心を揺さぶるような授業や課外活動」に43名と大多数を占めた。9名が「学校の指導にはあまり期待していない」としている。

〈質問⑨〉「大学はどこに行きたいですか」では、「A大学」が15名、「その他の日本の大学」が65名、「海外の大学」に4名、そして「大学には行かない」と答えた人が1名だった（無回答1名）。希望すれば推薦でA大学に進学できるが、推薦入学を希望せず他大受験を考えている生徒が圧倒的多数である。

A大学進学希望者のみが回答した〈質問⑩〉「なぜA大学に行きたいのですか」では、「A大学でこそ学びたいことがあるから」が6名と伸び悩み、「高く評価されている大学だから」に同じく6名、「高校で受験勉強をする必要がないから」に4名、「北海道を出てみたいから」に3名となった。〈質問⑪〉「推薦でそのままA大学に進学できることについてどう思うか」では、「受験勉強をして入学してくる人との学力差が心配」に10名と、推薦入学希望者の3分の2が自らの学力のレベルに対し不安を感じていることがうかがえる。「高校の時点で、大学進学後を見据えた勉強ができる」が5名と推薦入学を積極的に捉える生徒もいる。

他の日本の大学進学を希望する生徒への質問である〈質問⑫〉「なぜその大学に行きたいのですか」では、「その大学でこそ学びたいことがあるから」に圧倒的多数の46名が印をつけ、A大学進学希望者とは異なった傾向が見られる。

海外の大学進学希望者への質問である〈質問⑬〉「なぜ海外の大学に行きたいのですか」では、「A中学・高校の英語の授業や研修旅行などを通じて関心が高まったから」と「海外で自分を磨き、将来国際的な分野で仕事をしたいから」の2つにそれぞれ3名から回答があった。

4) 学校外での学習について

〈質問⑭〉「学校外で何か勉強していますか」では、「何もしていない」と回答した生徒が55人と圧倒的多数であった。

学校外で何か勉強をしている生徒を対象とした〈質問⑮〉「それはなぜですか」で、最も多い回答は「学校の授業について行くのが大変だから」が15名であり、これらの生徒は学校内での学習に切実な悩みを抱えているのかと想像できる。一方、「学校だけの勉強じゃ足りないから」と「大学受験を意識しているから」にそれぞれ9名と、学校の授業では満足せず、より受験学習を行いたいという生徒もいるようだ。

5) A中学・高校で学べて満足か

〈質問⑯〉「A中学校・高校で学べて満足していますか」では、「はい」が70名、「いいえ」が15名であった（無回答1名）。自由記述を一部紹介する。「はい」と回答した生徒からは、「他の高校では絶対に学べないことを学べるのでやりがいがある」など、A中学・高校の独自の実践に対する評価が学校全体の満足となる傾向が見られる。「いいえ」と回答した生徒からは、「特徴ある授業があつてよいが、受験対策は不十分だと思う」、「授業の進むスピードが速くてついていけないから」など、学習面に対する学校への不満があるようだ。

6) まとめ

<質問⑩>から判断するに、高1生徒は総合的にはA中学・高校を評価しているようである。それは他の質問からも見て取れる通り、A中学・高校独自の教育実践への満足度の高さであり、学内の施設の充実度や、盛んな課外活動・部活動に対する評価の表れである。しかし、一部の生徒の間では、自らの学力レベルへの不安と他大学受験志望の意思が重なることで、学校に対し学力面での支援をより求めたい意識も感じ取れた。特に<質問⑩>の分析結果は、学校外で何かの学習を行っている生徒が、学内において学力レベルが上位と下位の層にいる生徒たちであることを示している。A中学・高校の教育実践の独自色に対する評価が得られている一方で、学力的な面での学習ニーズをもっている層の存在も明らかになった。

7) A中学出身者と公立中学出身者の傾向

最後に、グラフは作成していないが、A中学出身者と公立中学校出身者（高校からの入学者）でどのような傾向の差異が見られるかを検討するために、前者の集計結果から特徴的なものを紹介しておきたい。

入学理由についての<質問③>では、「公立の中学・高校に行きたくなかったから」11名、「ユニークな授業が受けられると思ったから」12名にA中学出身者が高い割合を示している。一方「自分の学力を伸ばせる学校だから」ではわずか2名であった。しかし、A中学・高校の中高一貫教育に対する<質問⑤>では、「同じ友達と6年間学校生活をおくれるのが良い」が13名と多いものの、「受験がないからあまり勉強しなくなる」が14名と最も多く、「継続的・計画的授業が行われている」が6名に対して「行われていない」が9名、「ゆっくりと自分の進路や将来を考えられる」が5名に対して「のんびりしてしまって学習や自分の進路、将来の目標について考えられない」が8名と、学力、学習面での否定的な評価が多くなっている。

何を通じて進路を考えているかを問う<質問⑦>においては、「自分の学力レベル、偏差値」が14名と最も多くなっている。「地球市民や研修旅行などの活動実践、またはそこから膨らんだ関心」も6名いるが、「通常の英数国理社の授業から得られた関心」、「土曜講座や法律演習などの特別な授業から得られる知識・関心」への回答は各2名と低かった。求める進路指導についての<質問⑧>では、A中学出身者は大学等の情報を求める率が低く、授業や課外活動へ期待する者が18名と非常に高い。また、<質問⑨>においては、「海外の大学」の回答者の全員がA中学出身者であった。

学外での学習状況を問う<質問⑫>では、公立中出身者の多くは「何もしていない」に回答しているのに対し、A中学出身者の約半数が塾（6名）や家庭教師（7名）によって勉強をしていることがわかる。その理由を問う<質問⑬>では、「学校の授業についていくのが大変だから」が6名と最も多い。

<質問⑭>で学校での満足度を問うと、A中学出身者29名中25名が「はい」と回答し「いいえ」は3名と少なかった。公立中出身者よりも高い割合で学校には満足しているようである。

全体としてA中学出身者は、同校の国際化教育などユニークな教育に期待して入学している者が多く、そうした面では同校の教育実践に肯定的であるが、塾・家庭教師などを利用して学習を行うなど、学力や進学面での指導の不足感をもっている傾向が見られる。

2 生徒アンケート 高3 A大学進学クラス

高3の生徒は全て、A中学・高校が中高一貫教育を始める前に入学してきており、ここでの調査は主にA高校での3年間に関する問いになっている。

A大学進学クラスの回答者は42名、男性が20名、女性が22名である。出身中学校は、公立中学校が40名、その他が1名、無回答が1名であった。公立中の所在地は、札幌圏27名、その他の道内地域9名、その他4名である。

1) A高校への入学について

<質問②>「受験は誰が主にすすめて決めましたか」では、「自分だけで」が20名、「親・兄弟・先生」が19名と分かれた。

<質問③>「どうしてA中学校・高校に入学しようと思ったのですか」で最も多かった回答は、「A大学まで受

験がなくて進学できるから」の19名であった。高1生徒アンケートの結果とは大きく異なっている。次が「学校の設備が充実しているから」で18名である。また「海外研修旅行等の国際化教育が盛んだから」に15名と、A独自の取り組みに期待した声も多かった。

2) 現在の評価について

〈質問④〉「A高校に通ってみて、今は学校に対してどう思っていますか」では、「学校内の施設が充実している」が20名と最も多かった。次いで、「ゆとりがあってじっくり学べる」が12名、「部活動・行事・課外活動が盛んである」が11名と続いている。「英数国理社の授業が充実していて関心が膨らんでいる」が1名、「地球市民や土曜講座などの特色ある授業にやりがいがある」が0名であり、学校側の学習指導についてこのクラスの生徒の関心は高くない。「その他」では、「進学校というのにとらわれ過ぎていて気がする」、「行事や特別なことが多すぎて、個人の時間があまり充実できない」などの不満も寄せられ、また「研修旅行があって大変良い」との評価の声も見られた。

〈質問⑤〉「みなさんはA中学校出身ではありませんが、A校の中高一貫教育についてどう思いますか」では、高校からの入学者にとってのA中学・高校の中高一貫教育の評価・印象を聞いた。まず「人間関係の広がりがないてつまらない」が最も多い19名、次に「受験に集中した勉強をしなくてよい」が10名であった。高校からの入学者は中学校入学者の人間関係の狭さを見る傾向にある。

3) 卒業後の進路について

〈質問⑥〉「将来就きたい職業は何ですか」では、「国際的な職業」10名、「専門職」9名、「芸術・エンターテインメント関係」6名と続いた。「国際的な職業」が多いのがA大学進学クラスの特徴である。

〈質問⑦〉「学校生活の中で自分の進路を、どのように、または何を通して考えましたか（考えていますか）」では、「自分の学力レベル、偏差値」が15名、次に「地球市民や研修旅行などの活動、またはそこから膨らんだ関心」が10名、「土曜講座や法律演習などの特別な授業から得られる知識・関心」が7名と続いた。偏差値や学力が進路決定に大きな影響力を持つてはいるが、一方で学校側の独自の取り組みによって自らの関心が呼び起こされた生徒も少なくないようだ。

〈質問⑧〉「学校の進路指導について求めているものは何ですか」では、「好奇心を揺さぶるような授業や課外活動」が最も多い22名、次に「大学の学部、就職、専門学校全般の情報」が17名と続く。高1生徒アンケートとの違いは、進路先の情報についてよりも授業や活動の内容を求める回答が上回ったことである。また「大学見学・授業見学、就業体験・インターンシップ、大学生や社会人との懇談」が12名と数字が伸びた点も高1生徒と異なり、大学受験のないA大学進学クラスの特徴と言える。

〈質問⑨〉「大学はどこに行きたいですか」の回答では、A大学進学クラスということで「A大学」に38名とほとんどの生徒が印をつけた。その他、3名が「その他の日本の大学」、そして1名が「海外の大学」を希望しているようである。次にそれぞれの希望進路に分かれた質問を追う。

A大学進学希望者への〈質問⑩〉「なぜA大学に行きたいのですか」では、「A大学でこそ学びたいことがあるから」が20名と最も多く、なんらかの大学進学後の意思から進路選択を行っている生徒が多いようだ。また一方で「高校で受験勉強をする必要がないから」、そして「高く評価されている大学だから」がそれぞれ16名ということで、受験をせずに評価の高い大学に入学できるメリットを考えた生徒も多い。

〈質問⑪〉「推薦でそのままA大学に進学できることについてどう思うか」では、「受験勉強をする必要がないから、余裕を持って高校生活を過ごせる」が最も多い21名だった。「受験勉強をして入学してくる人との学力差が心配」が18名と推薦入学後の不安を覗かせる生徒もいるが、「その他」で「部活動に打ちこめる」と記述した生徒もおり、受験をしないことで得られる他の経験、ゆとりを重要視する傾向が強いことが窺えた。

日本の他大学進学を希望する生徒への〈質問⑫〉「なぜその大学に行きたいのですか」では、「その大学でこそ学びたいことがあるから」に4名、「家庭の事情」が2名と続いた。

海外の大学を希望する生徒への〈質問⑬〉「なぜ海外の大学に行きたいのですか」において、「A高校の英語の授業や研修旅行などを通じて関心が高まったから」と「日本の大学には行きたいところがないから」に1つずつ印

がついた。

4) 学校外での学習について

〈質問⑤〉「学校外で何か勉強していますか」では、「何もしていない」と回答した生徒が36人とほとんどを占めた。

5) A中学・高校校で学べて満足か

〈質問⑥〉「A中学校・高校で学べて満足していますか」では「はい」が35名、「いいえ」が6名（無回答1名）であった。肯定的な意見は、「他の高校では学べないことがたくさんあるから」や「自分の追求したいことが追求できたから」のように、学校の独自の取り組みや、その中での自らの活動に対する満足が見られる。一方否定的な意見は、「補習など行っていない」と学習面でのサポートに不満を感じていたケース、また「学べてよかったとは思っているし、来て良かったと思うが、もう少し個性を伸ばせるところだと思っていた」と、逆にもっと自由な学習活動を求めるケースもあった。

6) まとめ

以上、高3のA大学進学クラスのアンケート調査結果の特徴は、既に推薦での進学の意思を固めている生徒たちであるため、学力や受験対策などの視点からの学校評価はほとんどなく、むしろ学校生活そのものに対する見方が強いという点にある。

また見逃してはいけないのは〈質問5〉に対する回答である。高校からの入学者は中学入学者に対して、一部で辛辣な見方をしている。この結果は、中高一貫校でありながら高校からも多く入学者を受け入れる学校であるために、その両者の間に精神的な壁が存在してしまう状況を示している。原因として考えられるのは、高3の生徒たちは中学入学者たちとの直接の交流が少ないために、お互いの理解が進まない状況が予想されることだ。新設中高一貫校としての学校づくりの難しさだろうが、学校側としても中高の交流を図る取組みに力を入れていく必要があるだろう。

3 生徒アンケート 高3 他大学進学コース

他大学進学クラスの回答者は33名、男性14名、女性19名であった。出身中学校は、公立中学校が28名、その他が2名、無回答が3名であった。公立中の所在地は、札幌圏が22名と大半を占め、その他の道内地域から4名、道外からも1名の生徒が入学している。

1) A高校への入学について

〈質問②〉「受験は誰が主にすすめて決めましたか」では、「自分だけ」が最も多い19名、「親・兄弟・先生」が11名とそれに続いた。〈質問③〉「どうしてA中学校・高校に入学しようと思ったのですか」では、「学校の設備が充実しているから」が最も多く12名であった。また「海外研修旅行等の国際化教育が盛んだから」に11名と、A中学・高校独自の取り組みへの期待を持っていた生徒も多い。また「その他」では、「公立に落ちたから」と不本意入学を強調する生徒が6名おり、「奨学金がもらえるから」と学費援助制度について言及した生徒が2名いた。

2) 現在の評価について

〈質問④〉「A高校に通ってみて、今は学校に対してどう思っていますか」では、「学校内の施設が充実している」が18名と最も多い。次に「受験対策が足りない」に11名が回答した。これと関係して「地球市民や土曜授業などの特色ある授業にやりがいがある」が0名であったことも見逃せない。A高校は大学入学後を見据えた能力形成を目指し、「地球市民」や「土曜講座」などの特色ある授業を積極的に行っているが、ここでの回答を見る限り、それらはあまり評価されていない。

〈質問⑤〉「みなさんはA中学校出身ではありませんが、A中学・高校の中高一貫教育についてどう思いますか」では、A大学進学クラスと同様に否定的な回答が多く見られた。最も多かったのは「6年間同じ学校だと、人間関係の広がりがないのがつまらない」で12名であり、次には「受験がないからあまり勉強しなくなる」で7名であった。

3) 卒業後の進路について

〈質問⑥〉「将来就きたい職業は何ですか」であるが、圧倒的に多かった回答は「専門職」で15名であった。これは高1生徒、高3のA大学進学クラスの生徒と比較しても、際立った割合である。

〈質問⑦〉「学校生活の中で自分の進路を、どのように、または何を通して考えましたか（考えていますか）」では、やはり他大学受験を目指すクラスだけあり「自分の学力レベル、偏差値」が20名と最も多かった。「通常の英数国理社の授業から得られた関心」は8名あった。また「地球市民や研修旅行などの活動、またはそこから膨らんだ関心」が3名、「土曜講座や法律演習などの特別な授業から得られる知識・関心」が1名、「部活動や生徒会などの授業外活動の経験」も1名と、これらの項目が伸び悩んでいる。A大学進学クラスとは対照的である。

〈質問⑧〉「学校の進路指導について求めているものは何ですか」では、「大学の学部、就職、専門学校全般の情報」に17名という多数の回答があり、「好奇心を掻き立てるような授業や課外活動」が5名と少なく、A大学進学クラスとは対照的な結果になっている。

〈質問⑨〉「大学はどこに行きたいですか」では、他大学進学クラスであるため「その他の日本の大学」に30名とほとんどが回答したが、「A大学」も2名いた。また「大学には行かない」に1名の回答があった。これらの詳細について次に順に見ていくことにする。

A大学進学希望者への〈質問⑩〉「なぜA大学に行きたいのですか」では、「A大学でこそ学びたいことがあるから」に2名、また「高く評価されている大学だから」に1名、「北海道を出てみたいから」に1名であった。〈質問⑪〉「推薦でそのままA大学に進学できることについてどう思いますか」では、「受験勉強して入学してくる人との学力差が心配」、「高校の時点で、大学進学後を見据えた勉強ができる」、「推薦か受験かを選ぶに当たって、進路を真剣に考える機会がある」にそれぞれ1名の回答があった。

日本の他大学に進学を希望する生徒への〈質問⑫〉「なぜその大学に行きたいのですか」では、「その大学でこそ学びたいことがあるから」が22名と多数を占めた。また「家庭の事情」と9名が答えている。

最後に「大学には行かない」と回答した生徒への〈質問⑬〉「なぜ大学進学はしないのですか」との問いでは、「就職して早く社会に出て働きたい」、「大学でやりたいことが見つからない」に回答している。

4) 学校外での学習について

〈質問⑭〉「学校外で何か勉強をしていますか」では、「塾」に9名、「通信教育」に12名、「家庭教師」に1名が回答し、「何もしていない」が12名であった。A大学進学クラスと比較すると、このクラスでは学校外で学習を行っている生徒が多い。

〈質問⑮〉「それはなぜですか」では、「大学受験を意識しているから」に15名、「学校だけの勉強じゃ足りないから」が9名、「学校ではやっていない勉強を補いたいから」に4名の回答があった。これは、大学受験のためという者が多い点の特徴である。

5) A中学・高校で学べて満足か

〈質問⑯〉「A高校で学べて満足していますか」では、「はい」が20名に対し「いいえ」が13名と、後者の数字が比較的大きかった。「はい」の理由では、「研修旅行で得たものが大きいから。友達関係も充実しているから」など、学校生活や学校独自の取り組み、そして部活動などにも満足している声が多い。一方「いいえ」では、「受験対策が不足しているから」、「必要のない授業が多い」など、他大学の受験を考えている生徒ならではの不満が表れている。

6) まとめ

高3他大学進学クラスで象徴的だった点は、大学受験への意識があるため、学校に対するニーズがA大学進学クラスの生徒たちとは異なっていたことである。このことは〈質問④〉で「受験対策が足りない」と回答した生徒が多く、またA中学・高校独自の総合学習「地球市民」などの特色ある授業にやりがいを感じる生徒が0名だったことから明らかである。この状況は、〈質問⑧〉における生徒が求める学校の進路指導についても当てはまっている。受験を意識しているこのクラスの生徒にとっては、学校側が普段から行う特色ある授業や課外活動の質よりも、大学の情報そのものが自らの進路選択にとって重要と見なす傾向が強い。このニーズの違いはまた、〈質問⑬〉、

<質問⑩>の回答で塾や家庭教師、通信教育などを利用する生徒の多さからもよく表れている。これは、<質問④>で表れた生徒の不満からわかるように、大学受験をするためには学校だけでは不十分であると生徒たちが感じているからである。

4 保護者アンケート 高1

ここからは保護者を対象としたアンケート調査結果を見ていく。初めに、高1の保護者を対象に行ったアンケート集計結果を分析する。2クラスを対象に行い、全体で48名から回答を得た。子どもの出身中学校の内訳は、A中学が19名、公立中学校が24名、その他が5名であった。出身公立中学校を所在地別に見ていくと、札幌圏が21名、その他の道内地方から2名であった。

1) 入学理由について

<質問②>「子どもをA中学校・高校に入学させた理由は何ですか」では、「A大学への進学に限らず、総じて受験に強く、高い学力が身につけられる学校だから」に24名と最も多い回答があった。これに対応する項目「A大学まで受験を経験せずに進学できるから」が10名であっただけに、保護者のAへの印象は、どちらかと言えば一般的な意味で受験に強い進学校ということになる。また2番目に回答が多かったのは「A中学校・高校の教育内容・実践を評価していたから」で19名である。これは、進学校のイメージを持っている一方で、A中学・高校の行う独自の教育内容・実践への保護者としての期待があったことを意味する。また「子どもに中高一貫の継続した教育を受けさせたかったから」に13名が回答し、中高一貫教育の実施が入学理由に繋がっているケースも少なくない。「その他」では、公立学校に対する不信任が理由になったケース、成績のランクなどを理由に公立を諦めたケースが見られた。また子ども自身が部活動などを理由に入学を強く希望したケースもある。

<質問③>「なぜ公立中学校・高校を選びませんでしたか」では、「私学独自の教育実践が公立に比べて魅力的だから」が30名と、多くの保護者が私学であるA中学・高校への評価そのものを重視していた傾向が窺える。その他の項目で際立って高い数字はない。「その他」も総合して分析すると、公立の教師への不信任と公立の学校環境への不安が少なからず保護者の中に見られる。

2) A中学・高校への期待と中高一貫教育について

<質問④>「A中学校・高校に最も期待することは何ですか」では、「特色ある授業実践によって、子どもの学問・社会などへの総合的な理解・関心が高まること」が37名、「子どもの自立的な人間としての成長」が30名と多数を占める。またそれに対応した項目「受験指導を中心とした子どもの学力向上」が11名であった。このことから、保護者の学校への期待には、総じて子どもの人間的な成長と問題発見能力の育成という面が大きいことがわかる。同時に、「子どもへの、大学進学やその先の将来を見据えた進路指導」も26名と多く、進学教育への期待も大きい。「国際感覚の育成、情報技術への対応」も23名と多かった。

A中学出身者の保護者のみに回答をお願いした<質問⑤>「特にA中学・高校の中高一貫教育についてどう思いますか」では、「高校受験がないから、子どもが受験勉強に追われることがない」が13名、「中高に渡って継続的・計画的な授業が行われている」が8名、「ゆっくりと子どもが自分の進路や将来を考えられている」が8名と、積極的な評価が目立っている。高1の生徒からは受験がないため勉強しないことへの不安も覗けたが、保護者からは「受験がないから、子どもがあまり勉強しなくなる」が3名と少なかったこともあり、中高一貫教育に対するネガティブなイメージはあまりないようである。少数意見としては、「高校→中学への理解がまだ少ない様に思います」とあり、高校と中学との意思疎通がまだまだ不十分ではないという指摘も見られる。

3) 子どもの進路について

<質問⑥>「子どもには将来どのような職業について欲しいですか」では、「子どもの希望する職業を尊重する」が35名と多数を占めた。その他「専門職」や「公務員」、「国際的な職業」などにわずかに回答があった。

<質問⑦>「子どもにはどこの大学に行つて欲しいですか」では、「その他の日本の大学」が31名と多数を占め、次に「A大学」が8名であった。これを見て、現時点では多くの親は推薦でのA大学進学を望んでいないことがわ

かる。

A大学進学希望者への〈質問⑧〉「なぜA大学を希望しますか」では、「A大学が高く評価されている大学だから」に7名とほとんどが回答した。また「子どもが大学受験勉強をせずに済むから」に5名、「A大学でこそ学びたいことがあるようだから」に4名とそれぞれ半分以上の方の回答があった。これよりうかがえる保護者一般の考えは、推薦で評価の高い大学に進学できる利点と、A大学そのものに対する高い期待の両方であろう。

また上に関連して回答者全員に聞いた〈質問⑨〉「希望すれば全員がA大学に進学できることについてどう思われますか」では、「子どもがゆとりを持って高校生活をおくられる」が25名、「受験にとらわれないため、子どもの関心に即した主体的な学習が期待できる」が17名、「大学やその先の将来を見据えた教育が高校で受けられている」が15名とそれぞれ多くの回答が得られた。「受験を経験しないため勉強をしなくなってしまうのではないかと不安」と、「他の進路選択肢が十分に子どもに浸透しているかが不安」にそれぞれ10名の回答があり、少なからず推薦入学制度への不安を覗かせる保護者もいるが、全体的には高校からA大学への推薦入学制度に対しては肯定的な捉え方をする保護者が多い。

次に、他の日本の大学進学希望者への〈質問⑩〉「なぜその大学を望まれるのですか」では、「子どもがその大学でこそ学びたいことがあるようだから」が10名、「子どもには受験でより難関大学を目指してもらいたい」が11名と高く、A大学にこだわらずに積極的な大学選択を望んでいる。「家庭の事情」も9名と多く、道外のA大学に子どもを入学させることに経済的負担を感じていると思われる層もいる。

大学進学にはこだわらないと回答した保護者への〈質問⑪〉「なぜ大学進学を望まないのですか」では、「子どもがまだ大学でやりたいことを見つけていないようだから」に2名の回答があった。

4) 現在の評価について

〈質問⑬〉「現在、A中学校・高校の教育内容・設備その他についてどう思われますか」では、最も多かったのは「コンピュータや体育施設など学内施設が充実」で24名だった。生徒同様、保護者からも学内の設備・施設に対する評価は高い。次に「子どもの生活が充実しているようである」が22名であり、それに対応する項目「子どもが時間に追われて忙しすぎるようである」が16名であった。他の項目を見ていくと、「地球市民や海外研修旅行などの特色ある授業・活動の理念が良い」が20名、「英語などの国際化教育が優れている」が17名、「コンピュータの操作など、情報技術教育が優れている」が15名と、A中学・高校が力を入れている特色ある授業実践についての評価は保護者からも高い。一方「現在の設備と教育内容を評価すると、親の金銭の負担は大きい」に13名の回答があり、また記述でも「設備と教育内容は評価するが、親の負担は大きい」という声もあった。

〈質問⑭〉「A中学校・高校に満足されていますか」では、「はい」が36名、「いいえ」が8名、「無回答」が4名であった。全体的には満足されている保護者が多いようだが、その理由を見ていきたい。

「はい」の記述部分からは、「子どもがいきいきしているし、満足しているようだから」や「子どもが明るく積極的な行動をとるようになった」とあった。また「英語の実力を着実に身につけることができた。教科以外の総合教育は、一見成果の判断が難しいが、将来必ず実を結ぶと期待できる」といった学校の独自の取り組みに対する積極的な評価や、「生徒と先生方の信頼関係がとても良いと思います。暖かい目で子どもを指導してくださる姿いつも感心しています」と教師と生徒の関係に対する評価がなされている。

「いいえ」では、内部進学者と高校からの入学者がいることについて、学力格差の問題とそれへの学校の対応に対する不満が見られた。「高校から入学させて頂きましたが、内部生との進度の差をどのように埋めて行くのか対策などが明確でないので不安です」という意見、また「今年から発生した、学内進学者と高校からの生徒の扱いの違いに不安を感じている」という意見が出されている。また「基本的な生活指導が甘い。成績不良な生徒に対する指導が足りない。高い授業料に見合った教育が受けられていない」と、学校側の生徒への指導そのものに厳しさや徹底さが足りないとの指摘もある。

5) 学校への要望・意見

最後に、保護者に学校への要望・意見を任意で聞いた。多くは既に出てきている批判・要望と差がなく、学力面での徹底指導を求める声、高校入学者と内部進学者の格差への対応、生徒の生活態度の問題に関する意見があった。

またそれ以外では、若い先生が多く指導力に不安との声や、高校からの急激な生徒増加に学校自体が対応できているのかが不安、放課後に部活を行うと子どもの1日が長すぎて負担が大きすぎる、バスの本数を増やして放課後にもう少しゆとりを作って欲しい、などの意見がある。

このように批判的な意見が中心ではあるが、現時点での判断は下せないから1年後2年後に意見や要望を個別に学校側に伝えられる機会を用意して欲しいという冷静な意見や、「世界に通用する18歳」という指導理念に期待している、との積極的な声も寄せられている。

6) まとめ

以上、高1保護者のアンケート集計結果を分析してきた。保護者の全体的な学校に対する評価は、充実した学校設備、「地球市民」や海外研修旅行などの特色ある取り組み、またA中学・高校校の教育理念についての満足から表れている。またそれは、子どもがそれらの実践や体験を通じて学校生活を充実させている姿からも生じていた。

一方、〈質問②〉における入学理由から、保護者はAが受験に強く高い学力を身につけることができる学校と期待した面があることがわかるが、現在その点に関してかなり厳しい評価をしている保護者が一定数いる。学校の特色ある実践に対して積極的な評価をしているが、基礎学力の強化、徹底した受験対策などに学校側は積極的になってくれないと困るという考えが表れた結果である。

7) A中学出身者と公立中学校出身者の傾向

高1生徒の場合と同様に、保護者についても、子どもがA中学出身である場合と公立中学校出身である場合でどのような傾向の差異が見られるかを検討しておこう。以下では前者の集計結果から特徴的な傾向を紹介する。

入学理由を問う〈質問②〉では、公立中出身者に比較して、「中高一貫の継続的な教育を受けさせたかったから」が10名と比率が高く、同校が「高い学力が身につけられる学校だから」と同校の「教育内容・実践を評価していたから」が各6名と低かった。公立を選ばなかった理由を問う〈質問③〉では、私学の魅力をあげる回答が最も多かったが、「公立に起こっている諸問題を懸念しているから」が公立中出身者に比べて高い。

現在のA中高の評価について問うた〈質問④〉では、「子どもの生活が充実しているようである」が11名と最も多く、国際化教育(10名)や情報技術教育(8名)を評価する回答も公立中出身者に比べて割合が高い。しかし、「地球市民や海外研修旅行などの特色ある授業・活動の理念が良い」は7名と数は一定あるが、公立中出身者に比べて比率は低い。「あまり受験対策が充分ではない」は6名と比率が高い。親への情報公開、説明責任の不足は4名あったが、公立中出身者は0名であった。

満足度を問う〈質問⑤〉では、「はい」13名、「いいえ」3名、無回答(「どちらともいえない」と記述)3名であった。内部進学者の保護者は、同校の中高一貫教育実践について全体としては満足している割合が高いが、受験対策等の進学指導については不十分さを感じていると見られる。

5 保護者アンケート 高3 A大学進学コース

回答数は20名、その子どもの内訳は男性が9名、女性が10名(無回答が1名)であった。出身中学校は、20名全員が公立中学校出身であり、地域別に見てみると札幌圏が7名、道外から2名、その他は記載なし、という結果であった。

1) 入学理由について

〈質問②〉「子どもをA高校に入学させた理由は何ですか」では、「A大学まで受験を経験せずに進学できるから」に9名、「A大学への進学に限らず、総じて受験に強く、高い学力が身につけられる学校だから」に8名、「A中学校・高校の教育内容・実践を評価していたから」に6名であった。

〈質問③〉「なぜ公立高校を選ばませんでしたか」では、「私学の独自の教育実践が公立に比べて魅力的だから」が12名と最も多かった。これより、半数以上は公立を否定するというより、私学の実践自体への評価と期待が高かったようである。また「公立でもよかった」が5名、そして「地域の公立に子どものレベルや希望に合った学校がなかったから」が4名と少数ながら回答があった。

2) A高校への期待と中高一貫教育について

〈質問④〉「A高校に最も期待することは何ですか」では、「特色ある授業実践によって、子どもの学問・社会などへの総合的な理解・関心が高まること」が最も多く16名、「子供の自立的な人間としての成長」が続いて14名、そして「国際感覚の育成、情報技術への対応」が10名であった。「受験指導を中心とした子どもの学力向上」が3名であったことから、保護者の学校への期待は、単純な受験指導ではなく子どもの総合的な人間的としての成長にあるようだ。

また高3保護者には直接関係がないが、〈質問⑤〉「子どもはA中学校には通っていませんでしたが、A中学・高校の中高一貫教育についてどう思いますか」では、「中高に渡って継続的・計画的な授業が行われている」に13名、そして「高校受験がないから、子どもが受験勉強に追われることがない」が9名と続いた。またそれ以外の回答を分析しても、中高一貫教育の利点を評価する意見が全体的には多かった。しかし中には「レベルの高い授業と親の期待が過大で、子どもが大変そうという印象がある」という意見も出ている。

3) 子どもの進路について

〈質問⑥〉「子どもには将来どのような職業について欲しいですか」では、「子どもの希望する職業を尊重する」が15名と多数の回答を得た。「専門職」が4名、「国際的な職業」に3名、「公務員」に1名と僅かながら回答が得られた。

〈質問⑦〉「子どもにはどこの大学に行つて欲しいですか」では、17名が「A大学」と回答している。またA大学進学クラスでありながら、「その他の日本の大学」にも3名の回答があった。

A大学進学希望と答えた保護者のみへの〈質問⑧〉「なぜA大学を希望しますか」では、「A大学が高く評価されている大学だから」が最も多い12名、次に「A大学でこそ学びたいことがあるようだから」が8名と続いた。またそれに関連した〈質問⑨〉「希望すれば全員がA大学に進学できることについてどう思われますか」では、「子どもがゆとりを持って高校生活をおくれる」が12名と最も多く、「受験に捉われないため、子どもの関心に即した主体的な学習が期待できる」が9名、「大学やその先の将来を見据えた教育が高校で受けられている」が8名と続いた。「受験を経験しないため勉強をしなくなってしまうのではないかと不安」が5名であったことから、子どもの学力に対する不安が一部にあることは確かだが、全体的には推薦入学制度による様々な効用を保護者も高く評価しているようである。

その他の日本の大学進学希望者への〈質問⑩〉「なぜその大学を望まれるのですか」では、「子どもがその大学でこそ学びたいことがあるようだから」に3名、そして「家庭の事情」が1名であった。

4) 現在の評価について

〈質問⑬〉「現在、A中学校・高校の教育内容・設備その他についてどう思われますか」で、最も多かったのは「地球市民や海外研修旅行などの特色ある授業・活動の理念が良い」で16名であり、次に「コンピュータや体育施設など学内設備が充実」が12名、「英語などの国際化教育が優れている」が8名と続いた。これらから、学校の独自の実践であり特色が安定して支持を得られていることが言える。また「子どもの生活が充実しているようである」が9名であることから、A大学進学クラスの保護者は、子どもの学校生活の状況に対し悪い印象はないようだ。

〈質問⑭〉「A高校に満足されていますか」では、「はい」が18名、「いいえ」は0名（無回答が2名）であった。「いいえ」が0名であったことから、このクラスの保護者の学校に対する満足度の高さが表れている。具体的な記述では「教師が生徒のために努力を惜しまない。信頼に足る教師が多いように感じる。」と、教師の熱心な教育姿勢に対する信頼が高い。

5) 学校への要望・意見

最後に、保護者から任意で学校への要望・意見を頂いた。肯定的なものは、「よい先生に恵まれ、充実した高校生活を送れました」と学校への感謝を述べる声であった。一方、要望・意見として、「スクールバスの登下校にないのですが、もっと便利な方法はないのでしょうか」というもの、また「学内進学にあたっての基準をもう少し高く設定し、厳しさを体験できるようにしてはどうか（一部省略）」と推薦入学制度に対する改善点を指摘する意見が出された。

6) まとめ

以上、A大学進学クラスの保護者アンケートを分析してきた。結論としては、既に推薦でA大学進学のため、高1保護者の一部から見られたような受験対策への不安は皆無であり、子どもの人間的な成長、充実した学校生活に対し全体的に満足していると言える。

6 保護者アンケート 高3 他大学進学コース

高3 他大学進学クラスの保護者からの回答者は18名、その子どもの内訳は男性が5名、女性が13名である。出身中学校は、公立中学校が17名で、1名が無回答であった。その所在地は、札幌圏が14名、その他道内地域が2名（無回答1名）となっている。

1) 入学理由について

〈質問②〉「子どもをA高校に入学させた理由は何ですか」では、「A大学への進学に限らず、総じて受験に強く、高い学力が身につけられる学校だから」が7名、「A中学校・高校の教育内容・実践を評価していたから」が6名であった。しかし、「その他」への回答が9名と最も多いことから、入学理由が多様であったことが読み取れる。その具体的な記述を見ると、「本人（子ども）の希望」、「公立の第1志望受験に失敗したから」、「内申書による格付けのない高校だったから」と理由があげられている。

〈質問③〉「なぜ公立高校を選びませんでしたか」では、「公立でもよかった」に6名、そして「地域の公立に子どものレベルや希望に合った学校がなかったから」に7名と回答があり、必ずしも公立高校そのものに対して否定的なイメージを持っていない保護者がかなりいる。一方で「私学の独自の教育実践が公立に比べて魅力的だから」に6名が回答しており、一部で公立とは異なる私学独自の実践に対し評価を高く持っている保護者もいる。

2) A高校への期待と中高一貫教育について

〈質問④〉「A中学校・高校に最も期待することは何ですか」では、学校が「子どもの学問・社会などへの総合的な理解・関心が高まること」が9名と最も多いが、「受験指導を中心にした学力向上」を期待する回答も8名と多い。

〈質問⑤〉「子どもはA中学校には通っていませんでしたが、A中学・高校の中高一貫教育についてどう思いますか」では回答がばらついたが、多数の回答を得たのはA大学進学クラスの保護者と同様、肯定的な項目についてである。しかし、一部で否定的な捉え方もされていた。「（一部省略）本当に頭がよいのかはわからないと思う。教えられたことしかできなくなるような気が…」というような記述も寄せられている。

3) 子どもの進路について

〈質問⑥〉「子どもには将来どのような職業について欲しいですか」では、「子どもの希望する職業を尊重する」が13名と多くを占めた。「専門職」に少数ながら5名の回答があった。

〈質問⑦〉「子どもにはどこの大学に行つて欲しいですか」では、「その他の日本の大学」が15名、「A大学」が1名、そして「大学進学にはこだわらない」が3名であった。

A大学進学希望と答えた保護者の〈質問⑧〉「なぜA大学を希望しますか」に対する回答は、「A大学が高く評価されている大学だから」とあった。

回答者全員への〈質問⑨〉「希望すれば全員がA大学に進学できることについてどう思われますか」では、A大学進学クラスや高1の保護者が「子どもがゆとりを持って高校生活をおくれる」に多くの回答をしたのに対し、このクラスでは僅か3名に留まっていた。また他の項目も全体的に数字が伸び悩んでいた。これらの結果から、クラスの大半が既に他大学受験の意思を持つため、推薦による大学進学の意義・意味については関心が小さいと思われる。

その他の日本の大学進学希望者への〈質問⑩〉「なぜその大学を望まれるのですか」では、「子どもがその大学でこそ学びたいことがあるようだから」が最大の12名であった。

「大学進学にはこだわらない」という回答をした者を対象とした〈質問⑪〉「なぜ大学進学を望まないのですか」

では、就職や専門学校への進学を視野に入れているケース、また「子どもがまだ大学でやりたいことを見つけていないよだから」という理由も出されている。

4) 現在の評価について

〈質問⑬〉「現在、A中学校・高校の教育内容・設備その他についてどう思われますか」では、「子どもの生活が充実しているようである」が最も多い13名、次に「地球市民や海外研修旅行などの特色ある授業・活動の理念が良い」が9名、そして「コンピュータや体育施設など学内設備が充実」が8名と続き、これらは他クラスの保護者と同様の傾向である。また「あまり受験対策が充分ではない」に7名の回答があり、他大学進学クラスならではの数字の伸びを示している。その他、国際化教育・情報技術教育などに対する評価がそれほど伸びていない点も、他クラスとは異なった傾向である。

〈質問⑭〉「A高校に満足されていますか」では、「はい」が14名、「いいえ」が3名であった（無回答1名）。多くの保護者は学校に対し満足しており、その声としては「先生が優れている」、「教育目標が明確であり、それに向けた取り組みも目に見えてはっきりしている」のようなものがある。一方「いいえ」の回答者からは、「他大学受験が、中途半端である」という厳しい意見も出されている。

5) 学校への要望・意見

最後に、今までに学校に寄せた意見や現在の要望について任意で回答を得た。まず、「あれだけ学習に時間をさいて、休み中の宿題が多いにもかかわらず、受験につながる学習がなされていないのが残念でなりません」と、学校の受験指導に対する不満の意見がある。そして「進路指導ももう少し先生方も知識を持って行っていただきたいと思います。ただ『頑張りなさい』だったら誰でも言える事と思います。進路の事については少しがっかりしています」と、学校の進路指導に対する強い不満が寄せられている。

また学校側の進路指導と関連して、「A大学の付属校という特殊な高校のためか、他難関大学志望だった生徒がたいした努力もせずにあっさりあきらめてしまう。友人にひきずられ、だめであれば最終的には自分もA大学へ進学すれば良いという甘い考え方に走る子が多いと思う。学校側はどう考えているのか知りたい」という意見も出されていた。

6) まとめ

以上、高3他大学進学クラスの保護者のアンケートの集計結果を分析してきた。個々での保護者も他のクラスと同様、A高校の特色ある教育実践に対しては良い評価をしていた。しかし一方で、他大学受験の意思があるために、学校の受験指導が物足りないとの不満もまた見られている。

7 まとめ

1) A大学進学クラスと他大学進学クラス

高3の両クラスでは一部違った傾向が見られていたが、それを分けるキーワードとなっているのはやはり大学受験であった。A大学進学クラスの生徒からは、学校の特色ある教育実践への満足度、部活動や課外活動を通じた学校生活の充実度が明確に表れていた。一方他大学進学クラスの生徒からは、学校側に対し受験を意識した学習指導にもっと力を入れて欲しいという要求が見られており、またその反動として、学校独自の教育実践に対し消極的な評価を下す層も一部見られている。両クラスの保護者も生徒たちと同様の傾向を見せており、他大学進学クラスの保護者は進学指導の充実を求めている。

2) A中学出身者と他中学出身者

高1クラスでは出身中学によってもやはり異なった傾向が見られていた。A中学出身者とその保護者により目立って見られた傾向は、公立の中学校・高校に対する不信感であり、私学の独自の教育実践、中高一貫教育への期待である。その他、英語・国際化教育への評価の高さも他中学出身者に比べて大きい。それは生徒の中で海外の大学への進学を希望する者がいたことから明白である。しかし、一部のA中学出身生徒は学校での授業についていくのがたいへんなので塾や家庭教師を利用する傾向が強く、その保護者とともに進学指導面で不足と不安を感じてい

る。高1は全体にA大学よりも他大学への進学希望がかなり多いが、内部進学者は単純な進学教育を求めているのではなく、それゆえに逆に進学面での不安を生んでいるのではないか。なお、出身中学の違いによる傾向の差異といっても、これは全員がきれいに2分割されるということではなく、部分的な傾向ということをお断りしておく。

3) 全体を通して

まず、A中学・高校の独自の教育実践については、生徒からも保護者からも高い評価が得られている。生徒の自主性であり、自律的な学習意欲を育てるという学校側の教育理念に対し、一定の支持は得られていると考えてよく、特に推薦によってA大学進学を視野に入れている生徒・保護者からの満足の声は多い。

一方で、他大学受験を視野に入れている生徒と保護者からは、学校側の学習指導、進学指導に対し不安と不足感が見られている。特色ある教育実践などへの評価と期待がある一方で、受験に求められる学力の定着が不十分であり、そちらにも力を入れてもらいたいという要求が実際に出されていた。

これらの状況から、A中学・高校校を一般的な進学校として認識しているか、それとも、ただの進学校ではない独自の実践を行う学校と認識しているか、この差異が生徒にも保護者にも存在していることがわかる。学校は、自らの教育理念に沿って自信を持って数々の特色ある実践を行っている。実際に、それらに対しては前者の側からも満足の声が出てきているのである。しかし、前者には、大学受験対策・学力面の学習指導が、特色ある学校の教育実践の前に先立って欲しい、つまり進学校としての学習指導を優先して欲しい、という要求がある。

進学校としての面を強調するあまり学力指導・受験対策に集中した実践に偏っては、本来のA中学・高校の教育理念からは離れてしまうことになる。高い受験・進学要求に応えながら独自の教育理念を貫くことができるかが、同校の大きな課題として存在していることがこのアンケートから明白になったと言える。

第6章 学校と保護者の関係

アンケートでは、A中学・高校の評価をめぐって一定の意識の分化が見られた。A中学・高校に何を期待しているかで、その評価は異なると思われる。つまり、生徒・保護者も一枚岩ではなく、学校の教育方針に共鳴する者もいれば、不満や不安、違和感を持っている者もいる。そこで、ここではA中学・高校と特に保護者の関係の一端を垣間見、その課題に触れてみたい。

1 学力・受験指導をめぐって

1) ある保護者のヒアリングから

アンケートでは、受験指導や学力への対応が保護者の意識分化の軸になっていた。まず、学力・受験指導に強い要求をもっている保護者の声を拾ってみたい。ヒアリングした保護者は2人で、どちらもA中学から内部進学したA高校1年生(中校一貫教育第1期生)の保護者である。

まず2人は、なぜ子どもを公立中学校や他の私立中学校ではなく、A中学へ入学させたのだろうか。これに対しては、「公立は風紀が悪いが、私立は良いところを伸ばしてくれる」「地元の公立中学校には良くないイメージがある」「公立と私立は進学意識・教育意識に差がある」といった意見があり、公立中学校にはあまり良くないイメージがあるが、それに比べて私立は進学や教育環境に関してアドバンテージになるという意識を持っていたといえる。

そしてA中学を選ぶ決め手となったのは、その学校説明会であったという意見が共通していた。説明会でB校長から、A中学・高校は進学校であるということ、そしてそれだけではなく、大学での学びを見越し、かつ世界に通用する国際感覚を生徒が持てるような「プラスアルファ」の教育を中高一貫教育の中で積極的に行っていくという学校の教育理念を聞き、それに非常に共感したという。A高校は進学校であるということ、A大学にも推薦で入学できること、そしてその上で「プラスアルファ」の教育を受けられるというのが、保護者のA中学を選ぶ際の重要な要素であったようだ。

ただし、私たちがインタビューした保護者たちは、その「プラスアルファ」の部分、つまり「地球市民」や海外研修旅行や「司法講座」などの特色のある教育プログラムの実践については、現在懐疑的な意識をもっている。「プ

ラスアルファの部分に時間をかけ過ぎではないか。そればかりやってもテストの点数は上がらないし、受験にも結びつかない」、「模試などで結果が出なければ意味がない」、「行事は準備に時間をかけ過ぎる。授業はいつたいうのか」といった意見が出された。英語の授業に関しても、「ネイティブの先生が出てきても、結局ペーパーテストの点数には結びつかないのではないか」と心配している。

2) 進学校に由来する難しさ

上の保護者の意見が全体の中でどの程度共有されているのかは明確ではない。少なくとも、大学への推薦入学を希望する生徒の保護者は「受験・進学が大事」というのはまた違う意見をもっていると思われる。またアンケートから見ても、A 中学・高校の教育実践について比較的肯定的な回答が多かった（こうした保護者の声も拾うべきであったが、今回の調査ではできなかった）。

ただ、アンケートからは、学力指導や受験対策面での不足をいう保護者が一定数いたことも事実である。2 人の保護者に限らず、保護者たちはA 中学・高校を進学校として見ている。そのため受験に結びついた学力をつけさせること、進学のための勉強がしっかりなされることが前提とされているだろう。同時に、A 中学・高校の教育に受験対策の繰り返しだけを望んでいるわけでもない。同校の独自の教育実践に共感を寄せてもいる。

しかし、難関大学が進学の目標であったり、子どもの成績が振るわなかったりすると、最初は共感していた A 中学・高校の独自の教育もしだいに色褪せて見えてくることもある。学校側からすれば、けっして学力面で教育を疎かにしているわけではなく、むしろかなり手厚く指導しているということであるが、高い学力と豊かな人格形成の両立を目標としているところで、特に前者の学力面での伸張が見られなかった時に、独自の教育実践が標的とされてしまいかねない。ここには、A 中学・高校タイプの進学校に顕著な難しさが見られる。

2 生徒の自立をめぐる

A 中学・高校は、生徒をいかに自立させていく教育が実施できるかという点に意識を置いているが、この点についても 2 人の保護者からは否定的な意見が出された。「中学生の段階で自立、自立と言われても、自分で全部やるのは無理。もっと責任をもって指導をしてもらいたい」というのである。

学校側の説明によれば、生徒の学校生活、学習生活をめぐってさまざまな要求が保護者から学校に上げられてくるという。その中には、たとえば、中学生には教科書の持ち帰りが重くて大変なので毎日どの教科書を持ち帰ったらよいかを先生に指示してほしいといった過剰な指導を求めるものや、髪型の指導で精神的に落ち込んでいることを知らずに子どもの変調を一方向的に学校を批判してくるようなケース、学校内での子ども同士のちょっとした事故に親が介入して子ども同士の関係を壊してしまうようなケースなどが間々あるという。

ここには、単に学校の教育方針をめぐる対立が表れているというよりも、親と子どもの関係という家庭の問題を含ませた学校・保護者・生徒（子ども）の関係をめぐることが表れているととらえるべきと思われる。あるいは、契約観念の浸透という現代社会の特質が表れているともいえる。つまり、子どもの有りようはすべて学校の指導の結果とはいえないわけで、家庭の有りようも大いに相関している。親と子の対話が十全ではなかったり、そうでなくても子どもの自立期は親は子どものことを理解し切れなくなるのだが、そこで子どもの変調を見ると、保護者は一方向的に学校への批判に走ってしまうことが出てくる。

そして契約観念がこうした学校批判を強化する傾向がある。保護者は子どもの成長のためのサービスを学校から購入しているという意識が強くなっている。そのため子どもの成長に何らかの問題を感じたときに学校を契約違反として批判するのである。上のいくつかのケースも、契約観念が学校批判を強めているとはいえないだろうか。

なお、こうした学校への苦情や非難が生じることの背景には、保護者が意見を出しやすい関係を A 中学・高校が作っているということがあることを断っておきたい。

3 まとめ

アンケートでは、生徒・保護者の意識に分化が見られた。その分化は学力、受験対策面での評価に起因していることがうかがわれた。2人の保護者は、A中学・高校の独自の教育実践をある意味で「理想的」と評価しながらも、やはりA中学・高校を「進学校」として認識した上で子どもを入学させている。学校のいう「学力」と「学習能力」の両立というコンセプトが保護者側に深く理解されていなければ、保護者と学校の関係はずれを拡大する可能性がある。同様のことは、子どもの自立をめぐつてもいえる。そして、学校と保護者のずれは、コンセプトに対する見解の違いというだけでなく、子ども、親、学校という3者の関係性の問題という側面も有していた。つまり学校の方針や実践は当然評価の対象となるが、その評価は＜生徒・保護者＞対＜学校＞という構図だけで理解できるものではなく、＜子ども＞対＜親＞の関係の実態をくぐらせて初めてより深く理解できるといえよう。

こうしたことを踏まえて、課題としていえることは次の3つである。

第1に、保護者に対する学校側の説明の充実である。2重の目標を立てているA中学・高校タイプの進学校は、その教育コンセプトを入学前はもちろん入学後も十分に説明し理解を得なければならない。同校が進学校である限り、こうした保護者の意識・評価の分化を一定は抱え込まざるをえないと思われるが、保護者が学習する機会を設定するなど、学校は保護者に十分な理解を求めることが必要である。

第2に、保護者も自らの教育理念と家庭での子どもへの姿勢が問われるということである。自立の問題のところで述べたように、自立しつつある子どもを理解するのは親であっても容易ではない。学校に高い学費を払ったことの見返りに受験学力面やしつけ面でのサービスを、商品を購入するかのように要求するというだけでは、学力を伸ばすどころか、より広い意味での子どもの成長をはかることにつながらないこともありえる。

第3に、学校と保護者の連携の必要性である。子どもの成績がいまどうかということだけでなく、いかに子どもの成長をはかっていくか、子どもの成長とは何かといったことについての相互理解が学校と保護者間で深められなければならないということである。社会における契約観念の浸透は、保護者自らが自己を消費者としておいてしまいがちである。特に私立中高一貫教育校の保護者はそうした契約意識が強いであろう。従来、保護者は弱い立場であって、学校は閉鎖的、官僚的であった。契約観念はこうした状況を変える力をもっている。しかし、教育を商品取引的に考えすぎると、子どもの成長が脇におかれてしまうことにもなりかねない。教育観・理念、子どもの成長、具体的な進路目標の実現といった容易に調和しがたい課題で双方が一定の緊張関係を保ちながらも対話を進め、連携をしていくことが重要であろう。

終章 私立中高一貫教育の展望

1 「学力」と「学習能力」の両立

私立中高一貫教育校といえは通常進学実績をあげるために受験一辺倒の教育を行っているイメージされるが、A中学・高校はそうした枠にはまらない教育理念をもって、独自の教育実践を展開しつつあった。それは、各教科や総合学習「地球市民」、海外研修旅行などの教育実践の分析から明らかであろう。私立大学受験の重点科目であり、もともと受験対策的な授業になりがちな英語や数学でさえも、リスニングとスピーキングを重視し（英語）、もし受験教科からはずれても学習する意欲がもてるような形に授業計画を組み直そうとする動き（数学）が見られた。

A中学・高校は、進学のための学力の向上をいっさい考慮しないということではなく、そうした学力を高めることも重視している。進学指導も否定しておらず、生徒の進学目標がかなえられるように特に高校3年次では受験対応型授業も実施している。しかし、狭い意味の受験学力だけでは、大学進学後や大学卒業後の十分な学習・研究や活動・労働を保障しない。同校は、無味乾燥な受験教育や知識量獲得型授業でなく、学ぶ意欲と生きた学力、あるいは世界や社会の現実を学ぶこととそうした現実を学ぶための学力を身につけることを教育目標とし、それを目指した実践を展開しようとしている。同校の概念を借りれば、「学力」と「学習能力」の両立が求められているのである。

2 生徒・保護者の分化

では、こうした理念と実践は生徒と保護者にどのように評価されているのか。アンケートの集計結果からは、おおむね同校の教育理念や実践は肯定的に評価されており、全体として満足度も高いことが明らかである。この点から、同校の実践はまずは成功しているといえることができる。

しかし、こうした肯定的評価と満足度は、高校3年生A大学進学クラスとその保護者において際だっているが、高校3年生他大学進学クラスとその保護者においては受験対策の不足感という点から低下し、高校1年生とその保護者においても学力的な面での学習指導の不十分感という点から低下している。特に前者（高3他大学進学クラス）においては、A中学・高校独自の「世界に通用する18歳」を育てようとする実践は、受験型学力向上の障害物とさえとらえられかねない傾向が一部に見られる。また後者（高1）、特に内部進学者とその保護者では学力面での不安が強い。

つまり、同校の理念と実践は全体としては肯定されつつも、生徒の進路目標の差異や内部進学か高校受験で入学したかで、意識は分化する傾向があると想定される。この点は、アンケートのクロス分析や生徒・保護者各層へのヒアリングを実施しなければ明確にはいえないが、大学受験と学力がこの意識分化の軸になっていることは今回のアンケート分析と保護者ヒアリングからはっきりしている。

A中学・高校は、新設校ながら相対的に高い知名度を道内で得てはいるが、進学型私立中高一貫教育校としての共通したイメージにくられてもいる。また有力私立大学の附属校であるが、そのお膝元には所在していないため他大学進学者も多く、半附属・半進学型という特性を有している。さらに併設型中高一貫教育校であるため、A中学からの内部進学者と受験による入学者が高校には併存している。このことが、上のような意識分化をもたらしているのである。

このような分化した層にいかにか統一かつ柔軟な対応を取ることができるかという点が同校の大きな課題としてある。来年度から高3のA大学進学クラスと他大学進学クラスというクラス編制をやめる予定であるが、この課題については今後も一定の試行錯誤が必要ではなかろうか。

3 中高一貫教育の評価

公立の連携型中高一貫教育の場合、従来十分な関係をもたなかった中学校と高校が協働・協力して教育を新たに始めるものであって、導入の前後で変化を計りやすいところがある。しかし、A中学・高校の場合、管理職へのインタビューでも、中高一貫教育が当たり前であって、中高一貫であるから何かを新たに行うというわけではないということであり、その効果は判定しがたいところがある。

私立のA中学・高校の場合、中高一貫教育のもつ制度的特性から成果、効果を見るということは難しく、その学校の独自の教育理念や目標、実践がどのようなものであるかを見なければならぬということである。教育理念や目標のあり方で、中高一貫教育制度はいかようにも使えるし、変形できる。したがって、同校の中高一貫教育を評価するには、その制度的特性よりも結局はその学校の実践の質を問うということに行き着かざるを得ない。

そう考えると、つまるところ同校の教育の評価は、先に述べた「学力」と「学習能力」の両立はいかなる形で実現しているかという点の評価にかかってくる。この両立を私たちは理念レベルでは評価したいと考えている。しかし、その現実態がどうであるかの解明は、今回の私たちの調査では、生徒ヒアリングなども実施できず、不十分なものとどまった。ただアンケートからは、おおむね良好な評価が見られたということになる。

もっとも、繰り返しになるが、ここには先に触れた生徒と保護者の学校認識と進路、学力による分化の問題が立ち現れる。

4 私学教育革新の可能性

A 中学・高校は単なる受験進学校として存在していたのではなく、進学要求に対応しながら、同時にそれを越える実践を試みている。これは進学実績のみを競う傾向をもつ私学教育の革新を図りながら、今日の少子化のもと経営問題に対応せざるを得ない私学にとって実行可能な実践の方向性を示しているとして受け止められよう。

その際課題となるのが、生徒・保護者の進学要求である。A 中学・高校の場合、その教育理念と実践を脅かすものは、受験指導や学力対策の要求であった。特に A 中学・高校の場合、その学力ランク的な位置からして、生徒・保護者は強い受験指導要求をもっていると思われる。そのため、同校の独自の実践の意義が十分に理解されない状況が部分的に見られた。

これは同校特有の課題とはいえない。高校全体に覆い被さる課題である。定員問題、経営問題に敏感にならざるを得ない私学にとっては特に直面しがちな課題である。

先行研究で取り上げた小川洋は、私立中高一貫教育の台頭について社会階層変動を決定的な要因ととらえている。しかし、もし社会階層との関連のみで私学の台頭を説明すれば、小川自身が資産なく高学歴に熱心と性格づける「新興中間層」が向かった私立中高一貫教育校が台頭してきたことの構造的歴史的必然性も強まり、「高校教育改革」の展望は悲観的なものとならざるをえない。

特定の階層にのみ享受されうる存在として私立中高一貫教育校は存立している。改めて私学助成の増額が求められる。しかし、「私学の自主性」や教育実践の質という視点を前にすると、単に私学助成を拡充すればよいというだけでは不十分であろう。つまり私学教育の革新の展望の必要性である。

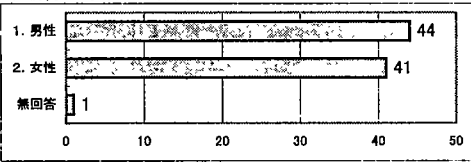
生徒・保護者からは絶えざる受験指導要求が沸き上がってくる。また私学は経営問題にも対処しなければならぬ。さらに私学の高額費という問題も残る。そういう中で、私学は、安易に生徒獲得市場の論理に迎合しない道を選ぶうかが問われている。「学力」と相乗するようにその独自の実践を組立てる方向に1つの展望をえることはできないだろうか。独自の実践について迎合でない形で保護者の理解を求め、実践の力で理念の実績をあげること、こうした方向に私学教育革新の可能性を見たい。そのような実践の展開が他の私立中高一貫教育校でも見られるかどうかは、今後もっと事例研究を積み重ねていく必要がある。

[付記] 本稿は、北海道大学教育学部の授業科目「教育行政学調査実習」（2003年度前期）において A 中学・高校の中高一貫教育を対象に行った調査をまとめたものである。調査を実施するに当たって、同校校長、教頭（2名）、教諭（2名）、保護者（2名）、北海道庁総務部学事課主査・主任は、ご多忙の中、こころよく対応していただいた。アンケートに答えてくださった方々（同高校1年生・3年生とその保護者）を含めて、各位に厚くお礼を申し上げる。

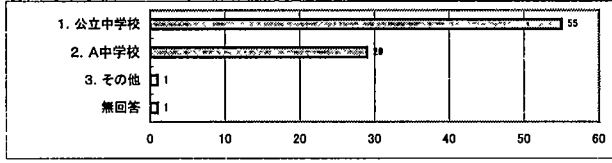
A中学校・高等学校の教育活動に関するアンケート

①高校1年生へのアンケート(2クラス実施、回答数86)

○最初にあなたの性別を教えてください。

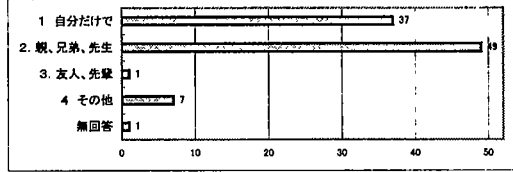


①出身中学校はどこですか？ (○を1つ)



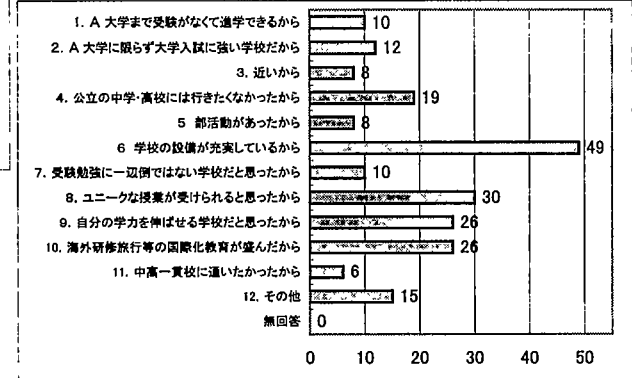
*1の所在地 札幌圏34(札幌市20、恵庭市5、苫小牧市3、江別市2、石狩市1、北広島市1、岩見沢市1、栗沢町1)
道内地方16(旭川市、網走市、根室市、網走市、赤平町、松前町、三石町、鳳尾町、音更町、標茶町、利尻町、豊頃町、清水町、宗谷支庁各1、北海道2)
道外2(福島県、横浜市各1) 記載なし3
*3 その他 インターナショナルスクール1

②受験は誰が主にすすめて決めましたか？ (○を1つ)



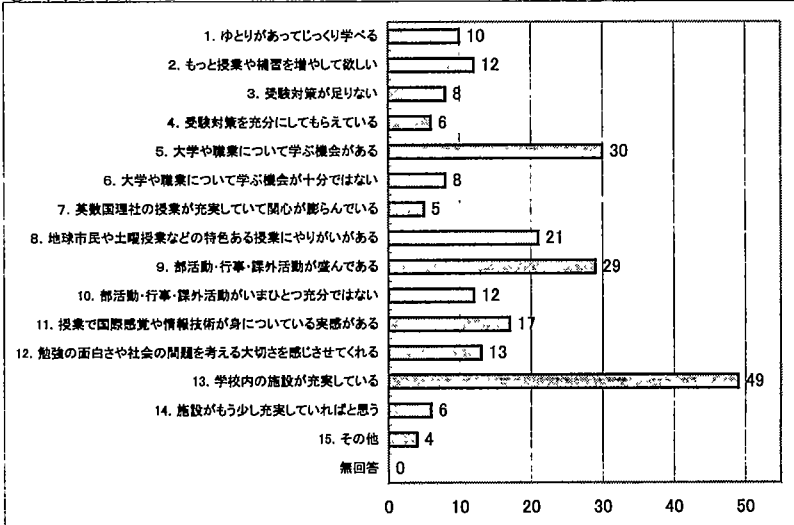
*4 その他:
「自分と親」
「誰でもない」
「中学校からの内部進学学生が頭がいいと聞いたから」
「自分と親と先生」
「自分、親、友人」

③どうしてA中学校・高校に入学しようと思ったのですか？ (○をいくつでも)



*12 その他「公立校に落ちたから」…2人
「札幌にあるから」「札幌に出たかったから」
「外に受験するかどうか結構迷ってしまったから」「高校受験をしなかったから」
「入ったことによって将来的に役立つと思った」「自分にピッタリな学校だと思ったから」
「入学したかった高校に入れる能力がなかったから」「親族がそうだったから」

④A中学校・高校に通ってみて、今は学校に対してどう思っていますか？ (○をいくつでも)

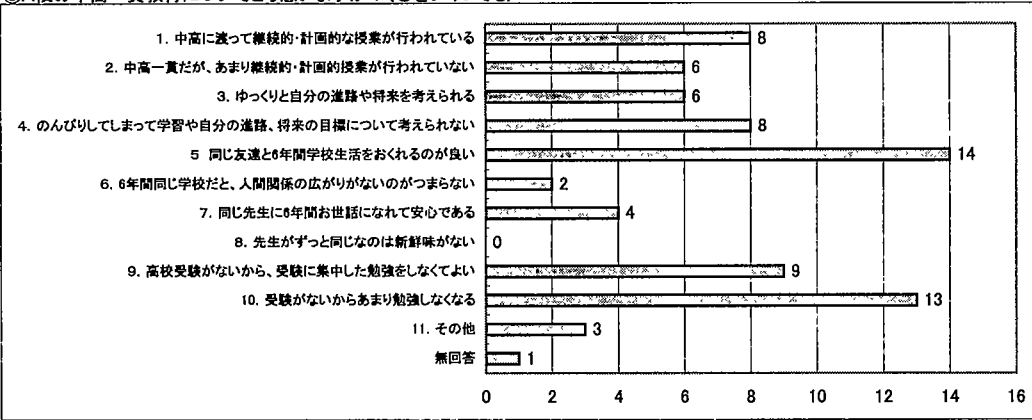


*15 その他:
「ゆとりがない」
「矛盾点が多く、A校に疑問をもつ」
「自主性があまり尊重して投げやりなところがある」

高校1年生へのアンケート

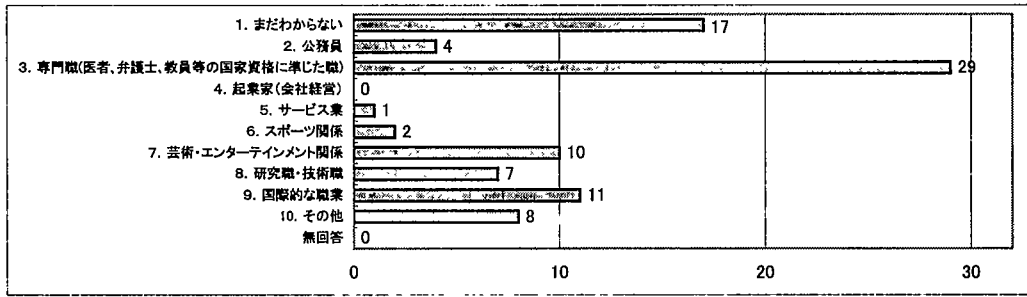
①で2と答えた人 = A中学校出身者のみ回答]

⑤A校の中高一貫教育についてどう思いますか？(○をいくつでも)



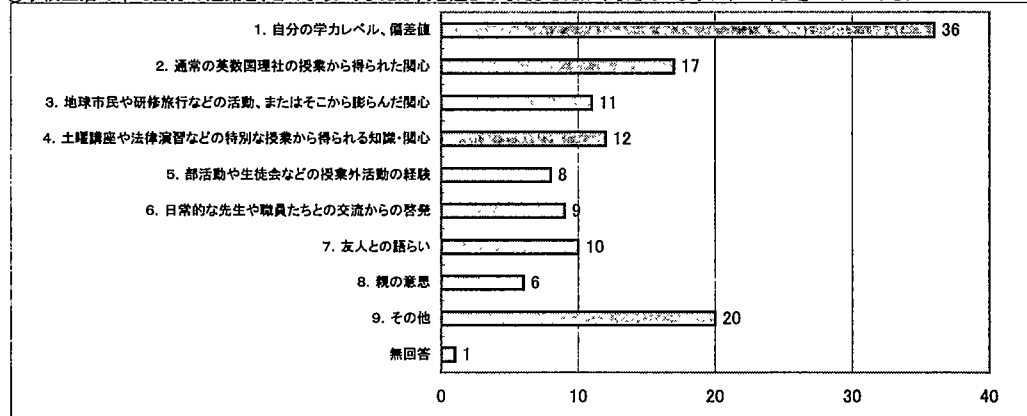
*11 その他：
 「私たちは第一期生だから、あいまいなプログラムでやってきたように思う」
 「この学校は矛盾点が多く、ためだと思う。責任は果たすべきだ」
 「中高一貫のくせに部活動が一緒じゃないのが不満」

⑥将来就きたい職業は何ですか？(○を1つ)



*9 その他： 「通訳」「医療系」「金融機関」「マスコミ」

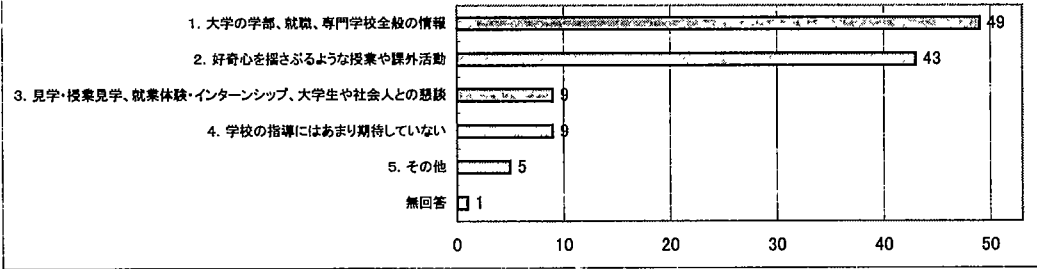
⑦学校生活の中で自分の進路を、どのように、または何を通して考えましたか(考えていますか)？(○をいくつでも)



*9 その他：
 「気づいたらやりたいと思ってた。」
 「昔からの意思」「自分の意志」「自分の好きなコトから」
 「やりたい職業のために」「自分のしたいこと」
 「色々なことを考えて」「日常の経験など」
 「中学の時すでに考えていた」「中学時代の周りの環境」

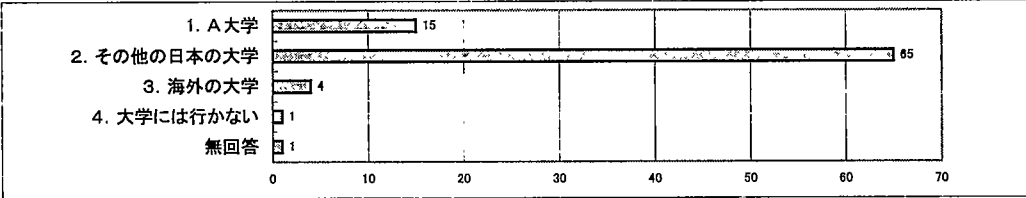
高校1年生へのアンケート

⑧学校の進路指導について求めているものは何ですか？（○をいくつでも）

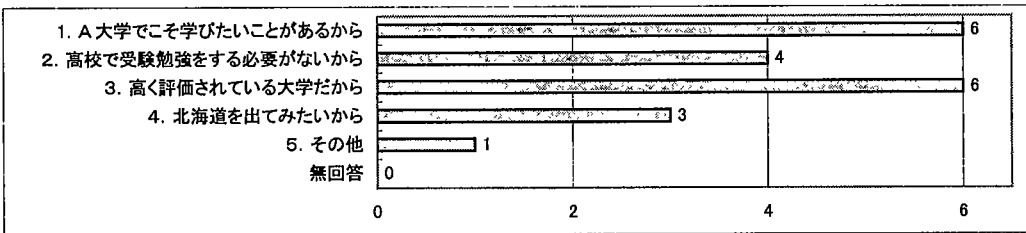


*5 その他：
 「社会人としてのマナー」
 「学部別の指導(講座)をしてほしい」
 「学力テストで書いた志望校の合格可能性」

⑨大学はどこに行きたいですか？（○を1つ）

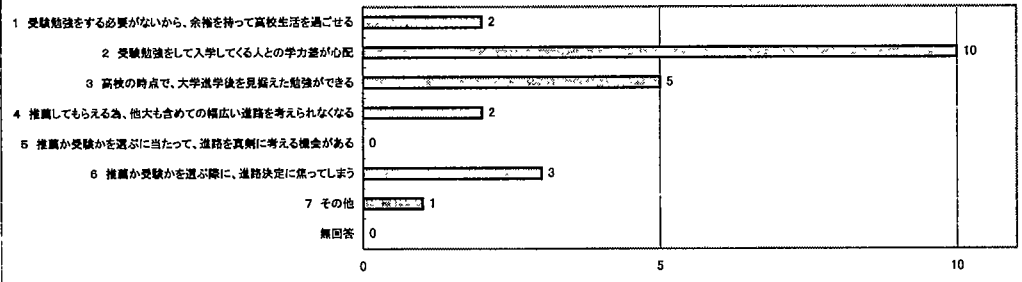


【⑨で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答】



【⑨で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答】

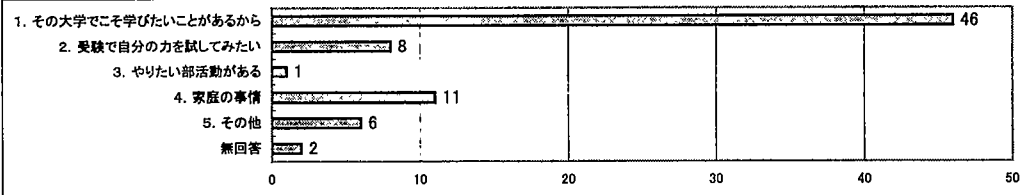
⑩推薦でそのまま立命館大学に進学できることについてどう思いますか？（○をいくつでも）



*7 その他：
 「就職に有利だから」
 「野球」

【⑨で2と答えた人 = その他の日本の大学進学希望者のみ回答】

⑪なぜその大学に行きたいのですか？（○をいくつでも）

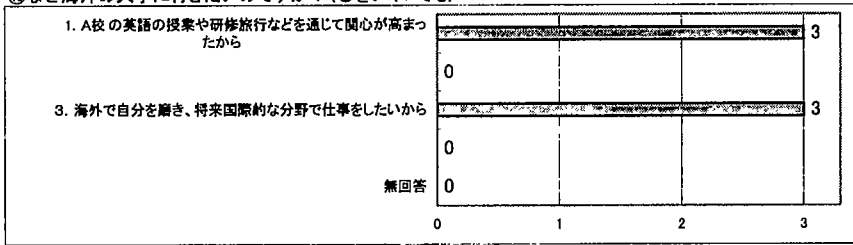


*5 その他：
 「金銭的・土地がら」
 「大学には行きたいから」
 「高い、京都ヤダから」

高校1年生へのアンケート

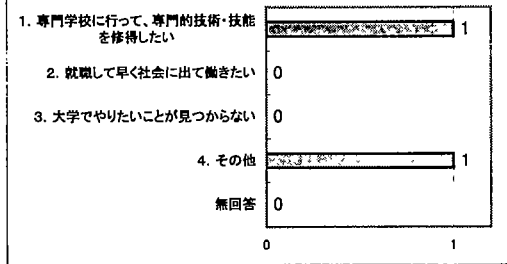
⑨で3と答えた人 = 海外の大学進学希望者のみ回答

⑭なぜ海外の大学に行きたいのですか？(〇をいくつでも)

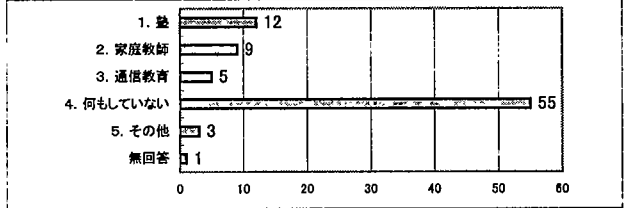


⑨で4と答えた人 = 大学にはいかない人のみ回答

⑮なぜ大学進学はしないのですか？(〇をいくつでも)



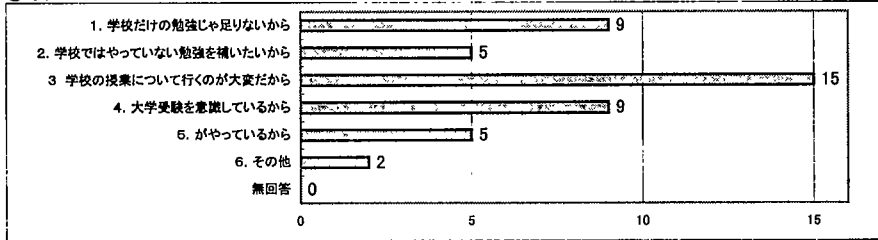
⑮学校外で何か勉強をしていますか？(〇をいくつでも)



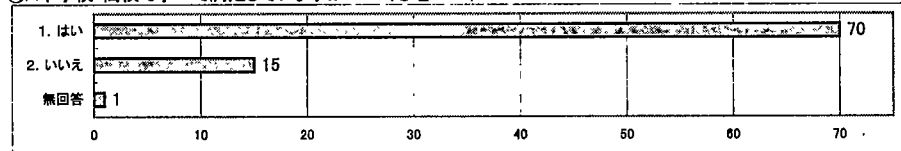
*5 その他「参考書等で勉強」

⑮で1、2、3と答えた人のみ回答

⑯それはなぜですか？(〇をいくつでも)



⑰A中学校・高校で学べて満足していますか？(〇を1つ)



- *理由：1 はい → 「この学校じゃなきゃできなかったことや、会わなかった人もいっぱいいるから」「色々な所に住んでいる人や住んでた人達と話ができるから」「良い友達に出会えたから」「良い先生達にめぐりあえたから」「はんぱなく楽しいけれど、授業はたのしい」「様々な課外活動ができたから」「他の高校では絶対に学べない事や学べるのでやりがいがある」「他では学べないこと、体験できないことも多いから」「不満もあるけど、中学でのんびり出来たし、面白い体験もできたから」「充実した環境で学んだりできるし、さまざまな活動を行っていて、設備もいい」「勉強する環境が良い」「自分の学力が上がっていると実感できたから」「好きな部活をしているから」「公立よりはおもしろい」「良くも悪くもない」「別に良くも悪くもないけど、どちらかといえば満足だから」「案外フツー」「びみょうだけど、楽しいこともあるから」「楽しいから」「校風も良く、明るい学校生活が送れていると思っているから」「他を知らないのだから比べようがありません。与えられた場に慣れ満足しなければそこで生活するのが辛いので」
- 2 いいえ → 「この学校のシステム自体に疑問もつから」「満足してはいけなから」「ロックンロールじゃねえ」「道方生への配慮」「特長ある授業があつてよいが、受験対策が不十分だと思う。(A大に入るから?)」「部活などの面では充実しているが授業はあまり面白くない。」「授業の進むスピードが速くて、ついていけないから。」「新米の先生の授業がわかりづらい」

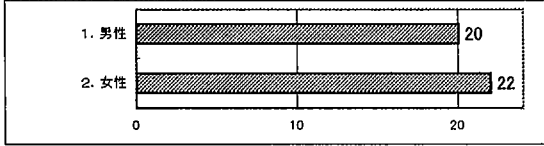
⑱最後に将来の夢はありますか？ あれば教えてください。(任意で記述)

- 「医療関係」「医療系の専門職とか」「カウンセラー」「精神科の医師」 「テレビ局関係」「美術、デザイン系がやりたい」「考古学者」「電子、情報等の理系の研究をしたい」
 「臨床検査に興味があります。将来は北大で学びたいと考えているので、がんばって勉強して北大に入りたいて「私立ではない大学へ進学したいです。そして、お金に不自由しない生活をしたい」
 「法曹関係」「弁護士、公認会計士、獣医」「獣医」「すこい酪農経営者になりたい」 「自分の職業に自信を持っている大人になりたい」「人の役に立てる仕事」「平和」「誰か超える大人」
 「研究職、なにか機械を開発したり、改良したりして生活を豊かにしたい。もしくは、遺伝子技術を農作物などに」「夢は夜に寝て見るものです」
 「中学校の教員になりたい」「立命館が慶祥が宇治で英語の先生か、海外で先生の仕事をしたい」
 「スチュワーデスかグランドホステス。留学もしたい」「翻訳や翻訳家。自分の英語力を使っていきたい」
 「できれば、国連の職員になりたい」「国際社会に出て活躍したい」「世界を見たい」
 「プロ野球選手か保育士」「プロ野球選手になる」「翻訳家。でも最近、演劇をやっている、声優になりたいとも思いました」
 「バイオリンを習っているので、音楽活動をしたいです。あるいは劇団に入っているので演劇界。どちらも生活す 楽しいです」

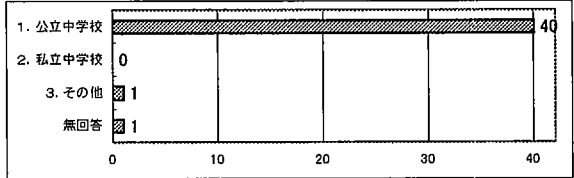
A中学校・高等学校の教育活動に関するアンケート

②高校3年生(A大学進学クラス)へのアンケート(1クラス実施、回答数42)

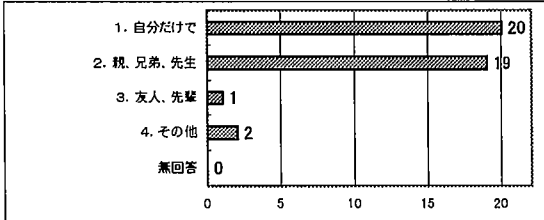
○最初にあなたの性別を教えてください。



①出身中学校はどこですか？(○を1つ)



②受験は誰が主にすすめて決めましたか？(○を1つ)



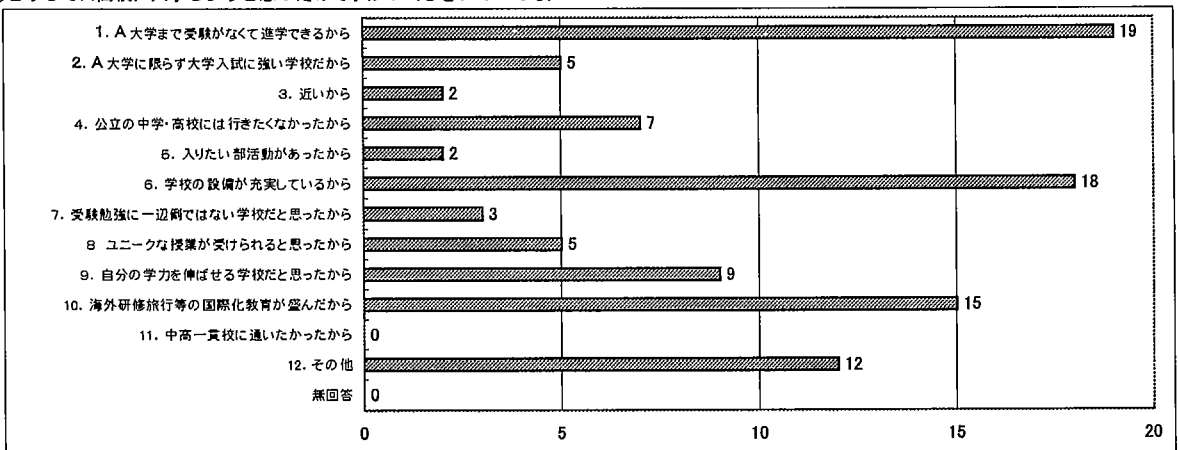
*4 その他: 「釧台リンデンスクールの先生」

*1の所在地 札幌圏27(札幌市14・江別市5・北広島市3・千歳市3・苫小牧市1・厚岸町1)

道内地方9(函館市・根室市・伊達市・名寄市・羽幌町・滝上町・清水町・礼文町・忠類村各1)
道外2(千葉県流山市・神奈川県横浜市内各1) 記載なし2

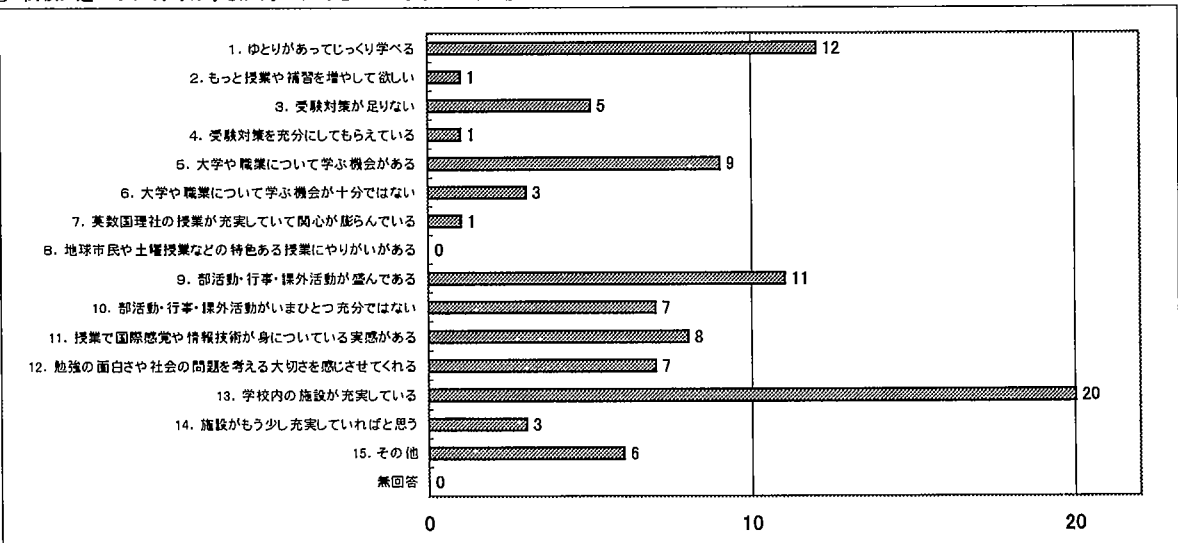
*その他 国立北海道教育大学附属札幌中学校1

③どうしてA高校に入学しようと思ったのですか？(○をいくつでも)



*12 その他: 「他にに行きたい学校がなかったから」、「公立に行ったら学校を辞めるから」、「寮が充実した学校だったから」、「札幌でレベルの高い私立だったから」、「面白い人がいそだったから」、「公立に落ちたから」、「家だから」

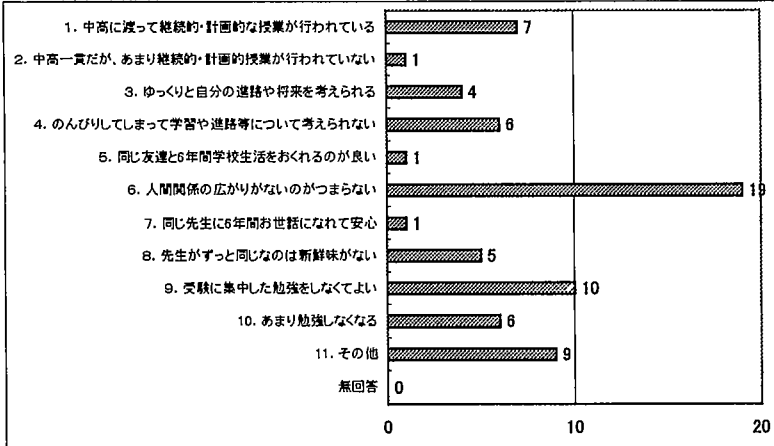
④A高校に通ってみて、今は学校に対してどう思っていますか？(○をいくつでも)



*15 その他: 「進学校というのとらわれ過ぎている気がする」、「行事や特別なことが多すぎて、個人の時間があまり充実できない」、「受験が無い分、日々大変」、「研究旅行があって大変良い」、「道い」

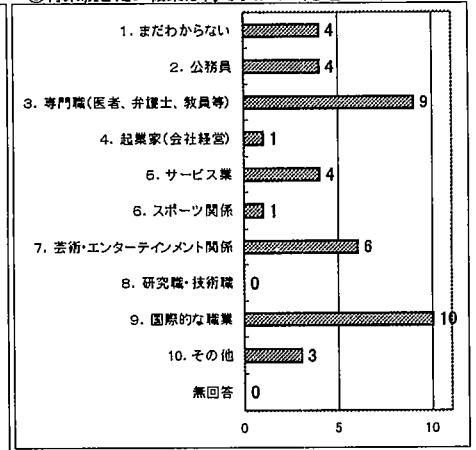
高校3年生へのアンケート(A大学進学クラス)

⑤みなさんはA中学校出身ではありませんが、A校の中高一貫教育についてどう思いますか？(○をいくつでも)



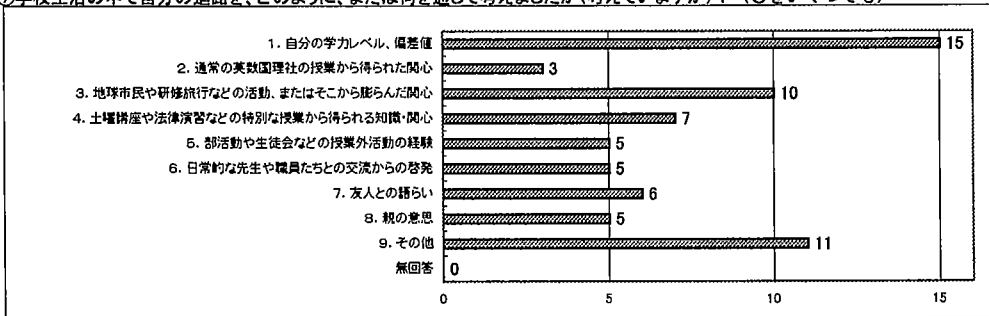
その他: 「中学から来る子と受験してくる子に差が出る」、「中学からいる子は全てにおいて感覚がおいしいと思う」、「考え方に偏りが出ると思う」、「社会に弱い、物い」、「必要ない」、「職は良いが…」、「親子にのる。世間をあまり知らなく育つため」、「はっきり言って邪魔」、「よくわからない」

⑥将来就きたい職業は何ですか？(○を1つ)



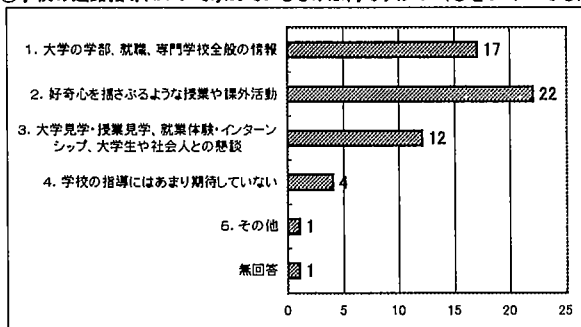
*10 その他: 「マスコミ」、「スクールカウンセラー」、「ジャーナリスト」

⑦学校生活の中で自分の進路を、どのように、または何を通して考えましたか(考えていますか)？(○をいくつでも)



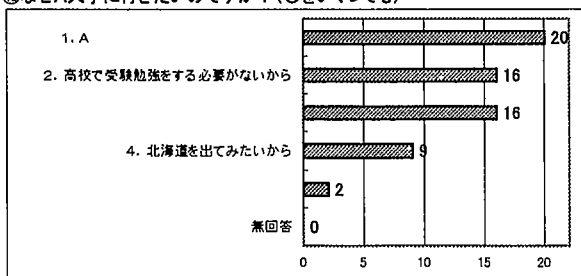
*9 その他: 「日常生活から啓発」、「中学時代からの関心」、「将来の夢」、「気づいたらその意思があった」、「学校外での活動を通して学んだことが多い」、「入学前からの意志のみ」、「小さい頃からやりたいことの実現のため」、「何も考えていない」、「自分の意思」、「文獻」、「流れ」

⑧学校の進路指導について求めているものは何ですか？(○をいくつでも)



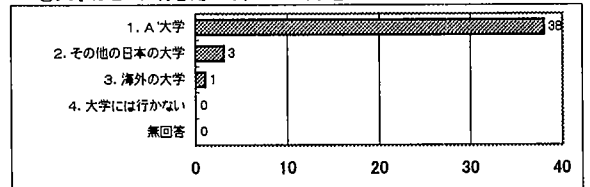
[⑧で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答]

⑩なぜA大学に行きたいのですか？(○をいくつでも)



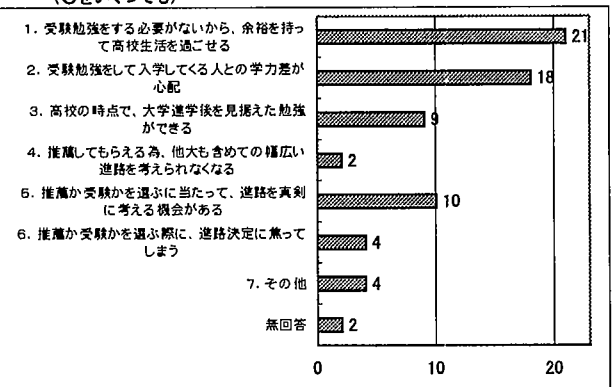
*5 その他: 「就職率がいいので」

⑨大学はどこに行きたいですか？(○を1つ)



[⑨で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答]

⑪推薦でそのままA大学に進学できることについてどう思いますか？(○をいくつでも)

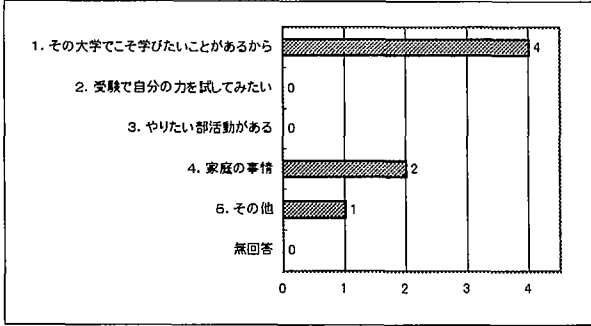


*7 その他: 「自分の時間がとれるのでいい」、「論文つらい」、「学部選択の時に進路を真剣に考える機会がある」

高校3年生へのアンケート(A大学進学クラス)

⑨で2と答えた人 = その他の日本の大学進学希望者のみ回答]

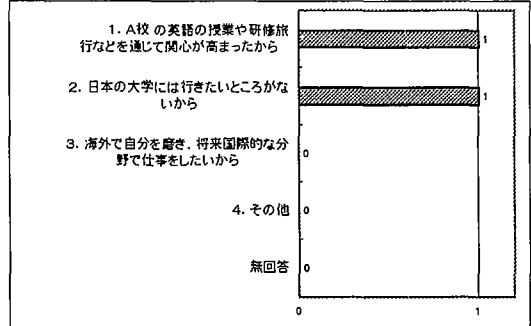
⑩なぜその大学に行きたいのですか？(〇をいくつでも)



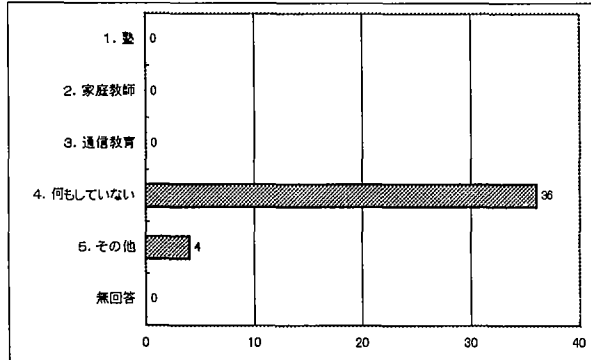
*5 その他: 「情報に集中する地域でもあるから」

⑨で3と答えた人 = 海外の大学進学希望者のみ回答]

⑩なぜ海外の大学に行きたいのですか？(〇をいくつでも)

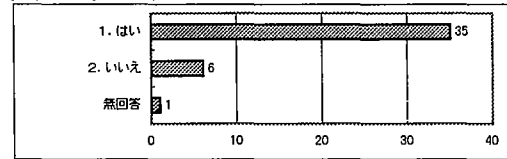


⑪ 学校外で何か勉強をしていますか？(〇をいくつでも)



*5 その他: 「英会話」、「自分で」、「自習」

⑫A高校で学べて満足していますか？(〇を1つ)



*理由: 1 はい

「自分の追及したいことを追及できたから」、「他の高校では学べないことがたくさんあるから」、「他の高校に出れば良かったかな」、「他の学校ではできない経験(海外研修や部活動など)ができた」、「いろいろな人がいるから」、「自分が成長できたから」、「国際的な面に関しては充実しているから」、「研究旅行が人生の中で大きな意味を持ったと思うため」、「良い先生」、「校風が自分に合うため」、「周りのレベルが高いと刺激される」

2 いいえ

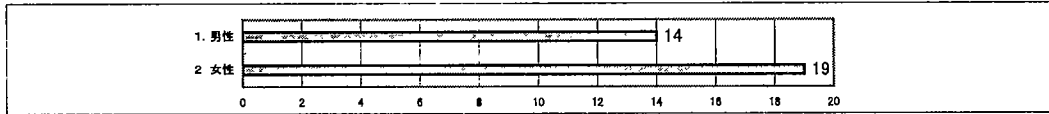
「出会いは良かったけれど、学校というものに対し疑問が多いのは、自分の中から抜けていない」、「学べて良かったとは思っているし、来て良かったと思うが、もう少し個性を伸ばせる場所だと思っていた」、「教師」、「補習など行っていない」

⑬最後に将来の夢はありますか？ あれば教えてください。(任意で記述)

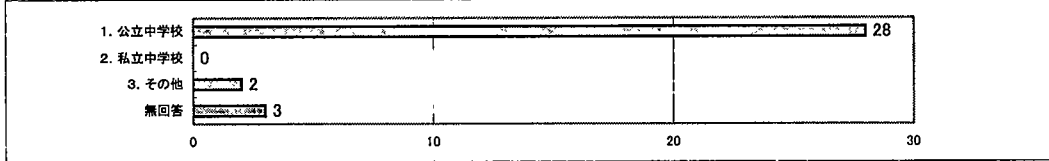
「『専門職』と決めるのではなく、その資格を持ちつつ別な職業についていきたい。幅広い視野を持てる人になりたい」、「司法試験に合格したい」
 「スポーツに関わりたい。そこで、大学で学んだことを活かす。具体的には地方自治など」「ジャーナリストになって世界を少しでも生活のしやすい状態にしたい。人々を幸せにしたい」
 「できれば大学の専攻を活かせる職に就きたい。もしくは自分の力を試せるような職がよい」「北海道で暮らすこと」「広告を創る仕事をする」「公務員になって安定した生活を送る」
 「イルカの飼育師」、「音楽で食う」、「教師になって、サッカー部を教える」、「日常的に英語を必要とする職業に就きたい」、「国際的な職業に就きたい」、「地方行政に何らかの形で携わりたい」

A中学校・高等学校の教育活動に関するアンケート
 ③高校3年生(他大学進学クラス)へのアンケート(1クラス実施、回答数33)

○最初にあなたの性別を教えてください。

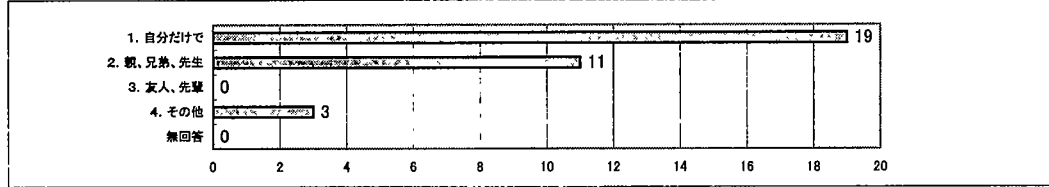


①出身中学校はどこですか？(○を1つ)



*1 所在地 札幌圏22(札幌市10、江別市6、苫小牧市3、小樽市2、千歳市道内地方4(網走市・帯広市・美幌市・標津町各1) 道外1(神奈川県1 転勤のため)
 *3 その他 国立北海道教育大学附属札幌中学校2

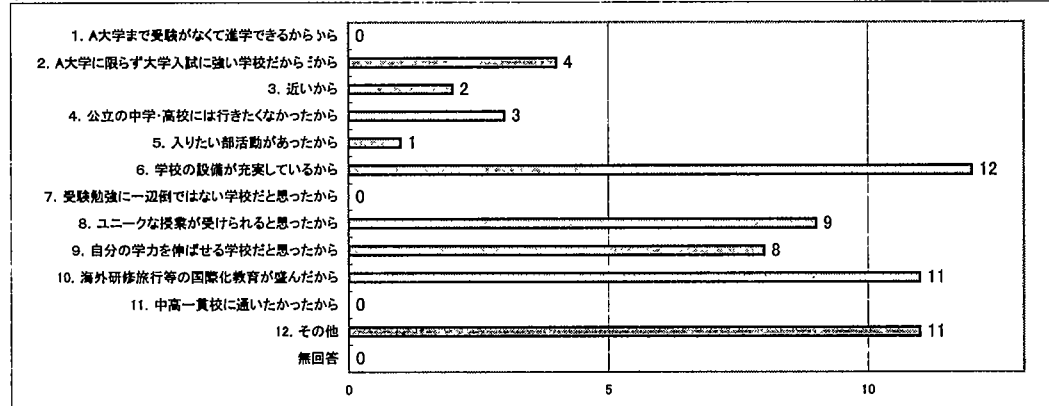
②受験は誰が主にすすめて決めましたか？(○を1つ)



*4 その他: 「なりゆき」 「自分と親」

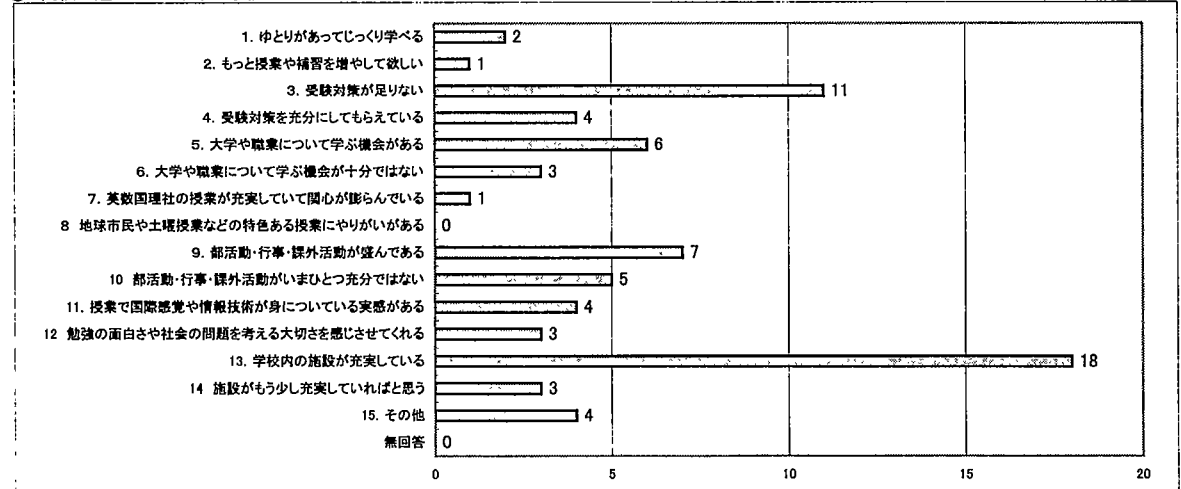
1. A大学まで受験がなくて進学できるから

③どうしてA高校に入学しようと思ったのですか？(○をいくつでも)



*12 その他: 「公立に落ちたから」…6人 「奨学金がもらえるから」…2人 「強弱」 「環境が良いから」

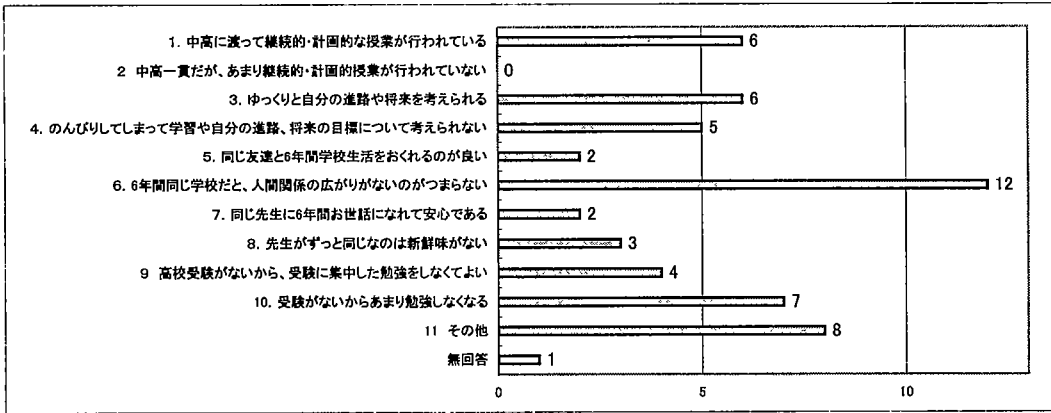
④A高校に通ってみて、今は学校に対してどう思っていますか？(○をいくつでも)



*15 その他: 「習っていることややっていることが違う」 「何も」

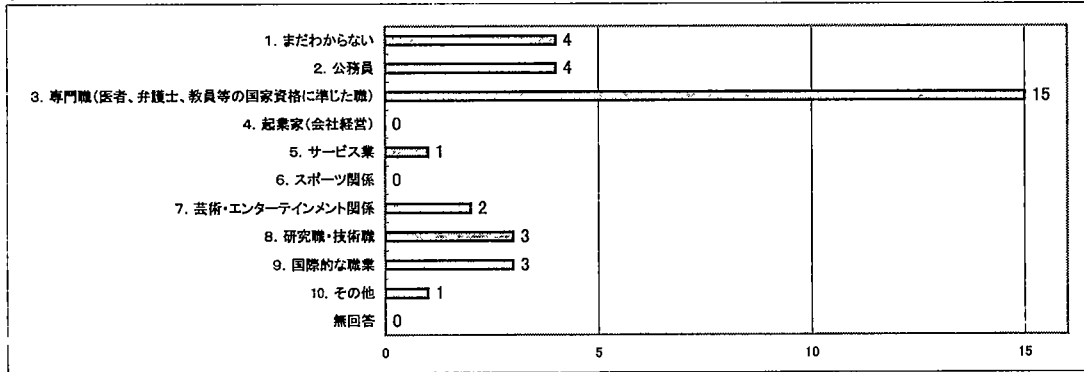
⑤みなさんはA中学校出身ではありませんが、A校の中高一貫教育についてどう思いますか？(○をいくつでも)

高校3年生へのアンケート(他大学進学クラス)

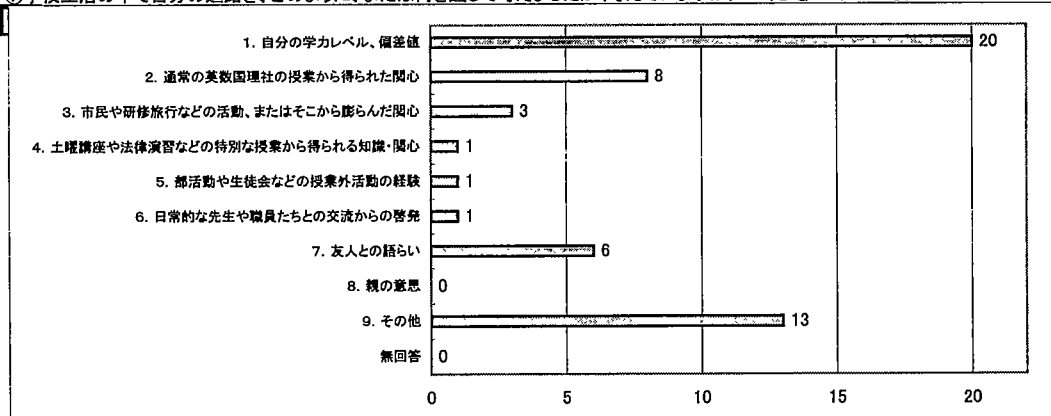


*11 その他: 「社会性が身につかない」「世間知らずになりそう」「中学生は甘やかされていると思う」「Aというブランドにうぬぼれている感がある」「視野が狭くなる」「勉強だけというイメージ大」「世間知らずになりがち」

⑥将来就きたい職業は何ですか？(○を1つ)

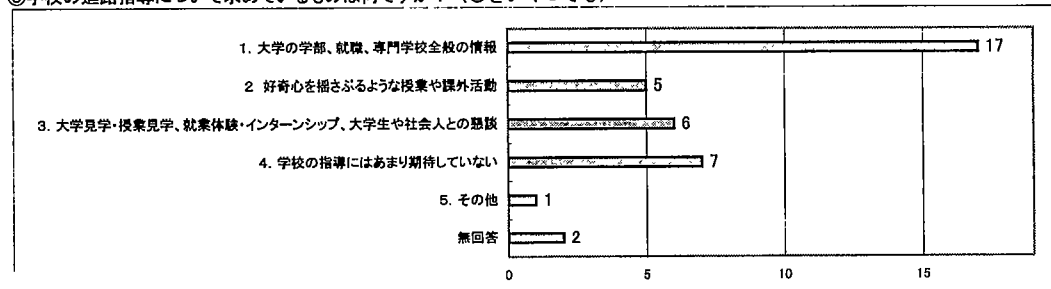


⑦学校生活の中で自分の進路を、どのように、または何を通して考えましたか(考えていますか)?(○をいくつでも)



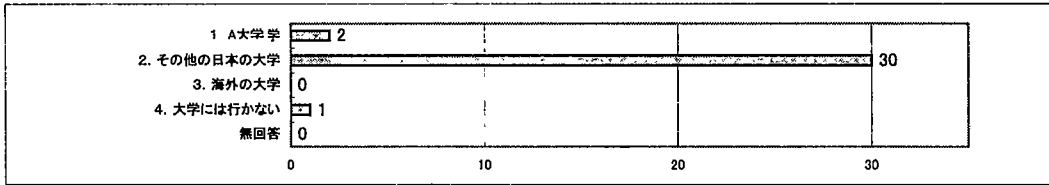
*9 その他: 「自分の意志」「興味のあること」「研修旅行から」「元々の夢でもあった」「もともと関心のあったことから」「流れ」「将来を考えて」「自分の興味・関心」「日常のできごと」

⑧学校の進路指導について求めているものは何ですか？(○をいくつでも)

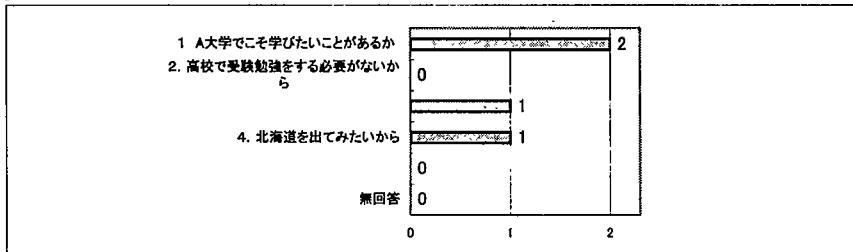


⑨大学はどこに行きたいですか？(○を1つ)

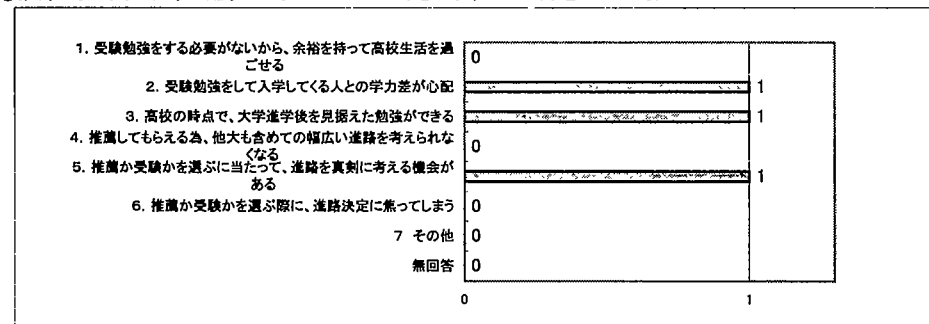
高校3年生へのアンケート(他大学進学クラス)



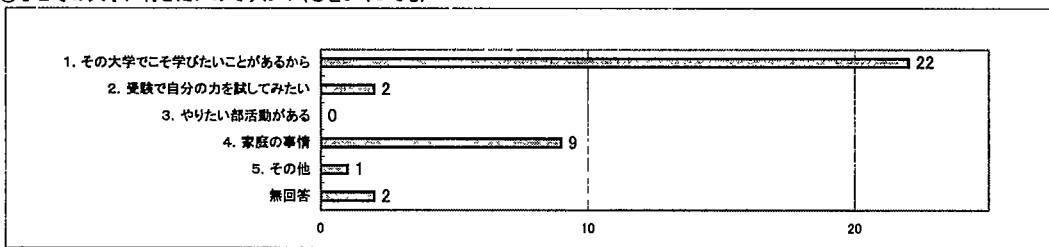
⑨で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答
 ⑩なぜA大学に行きたいのですか？(〇をいくつでも)



⑨で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答
 ⑪推薦でそのままA大学に進学できることについてどう思いますか？(〇をいくつでも)

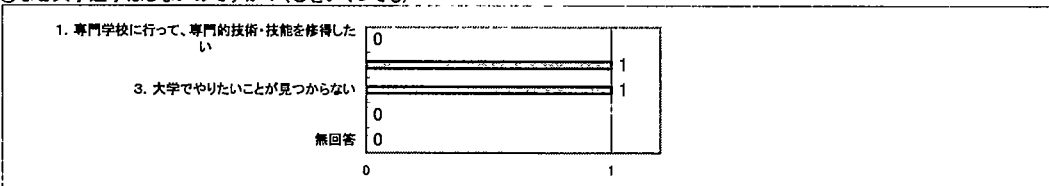


⑨で2と答えた人 = その他の日本の大学進学希望者のみ回答
 ⑫なぜその大学に行きたいのですか？(〇をいくつでも)

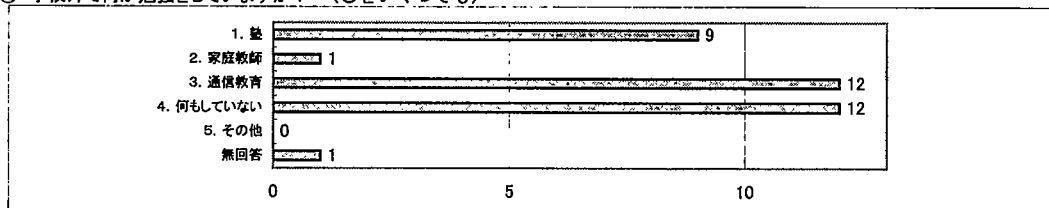


*5 その他: 「とにかく行ってみたい」

⑨で4と答えた人 = 大学には行かない人のみ回答
 ⑬なぜ大学進学はしないのですか？(〇をいくつでも)



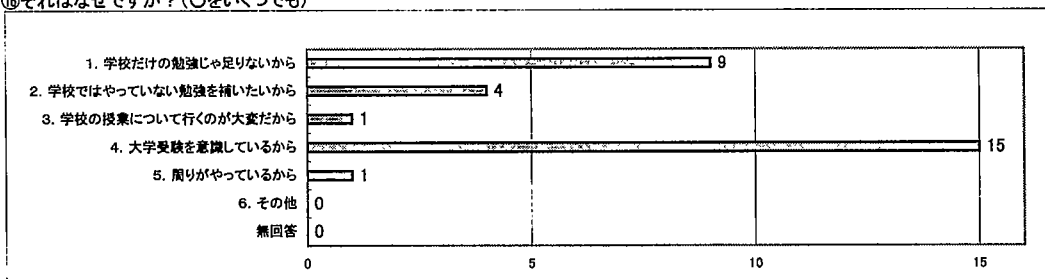
⑭ 学校外で何か勉強をしていますか？(〇をいくつでも)



高校3年生へのアンケート(他大学進学クラス)

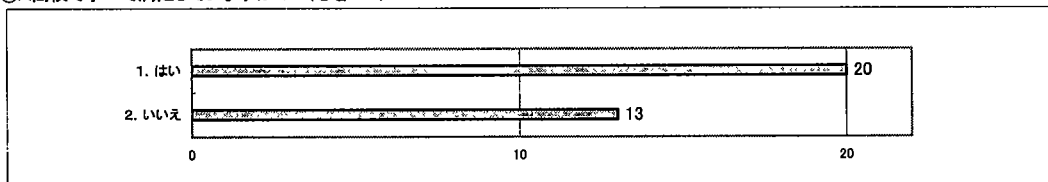
⑮で1、2、3と答えた人のみ回答]

⑯それはなぜですか？(○をいくつでも)



*6 その他: 「絶対量を増やしたいから」

⑰A高校で学べて満足していますか？(○を1つ)



*理由: 1 はい → 「研修旅行で色々なことを見れたか」「学力がのびたと思うので」 「国際関係が充実している」 「友達が多かった」
 「せつびがとてよい、12月せんにうでA大学にいける」 「良い部活に入ってよい仲間が多かった」
 「研修旅行で得たものが大きいから。友達関係も充実しているから」 「部活などの経験が多かったから」
 2 いいえ → 「受験対策が不足しているから」 「パンフレットにひかれたが、その通りではなかつた」「必要のない授業が多い」「つまらない」

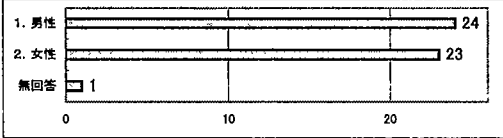
⑱最後に将来の夢はありますか？ あれば教えてください。(任意で記述)

「A高校の先生になって研修旅行の引率でモルディブに行くこと!!」 「世界一周・臨床検査技師になる・その次はスクリーナー」 「弁護士になりたい」 「海外で仕事すること」
 「新薬を開発して、いろんな人を助けたい」 「研修旅行でいったベトナムなどに、海外ボランティアなどをしたい」 「資格探本(冗談ではなく)」 「広い視野で物事をとらえること」

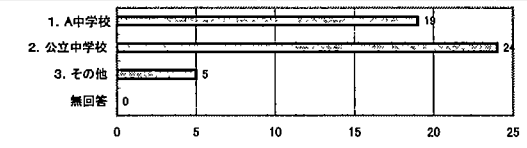
A中学校・高等学校の教育活動に関するアンケート

④高校1年生保護者へのアンケート (2クラス実施、回答数48)

○最初にあなたの子どもの性別を教えてください。



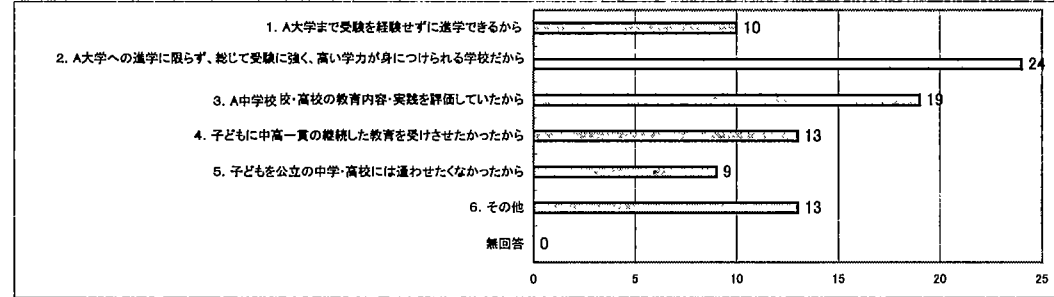
①子どもの出身中学校はどこですか？ (○を1つ)



*2の所在は札幌圏21(札幌市14、恵庭市3、苫小牧市2、北広島市1、岩見沢市1)
道内地方2(空知支庁2) 記載なし1

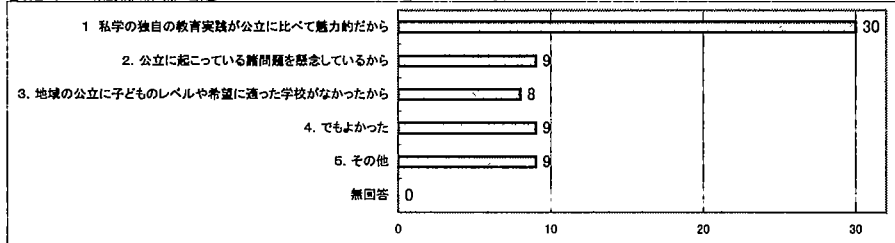
*3 その他 中3途中で福岡から札幌へ転居1、記載なし1

②子どもをA中学校・高校に入学させた理由は何ですか？ (○をいくつでも)



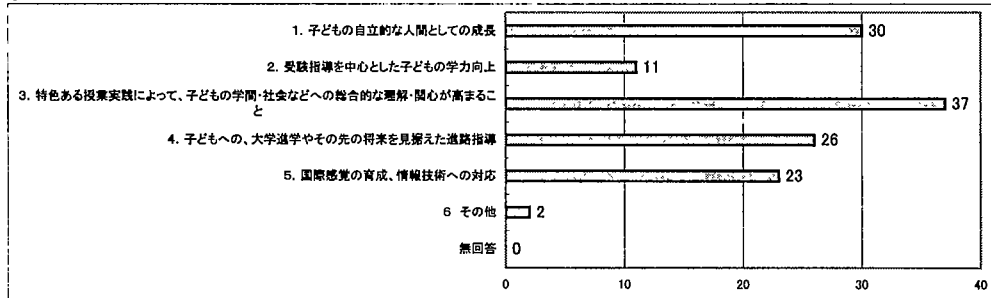
*6 その他:
 「公立高校を選んだから」「学校の広報内容を本当ののだと思ったから」
 「副教科が苦手、5教科に見合ったランクをもらえなかったので公立をあきらめた」
 「地元の公立中には送らせたくなかったから」「公立の教師の質が悪い」「公立にはない魅力がある」
 「本人が甲子園を目指せると思ったから」「本人希望の部活があった為」「子どもの強い希望」
 「副教科が苦手、5教科に見合ったランクをもらえなかったので公立をあきらめた」
 「英語学習のレベルが他校と比較した結果、最も期待できる高校と判断したので」
 「サッカーのクラブチームに送らせたく(中学生の時)それと高校の受験は子供にとって大変だと思ったので」
 「先生が熱心であること、親・生徒の先生への信頼度が高い、良い関係が待っている。学校と親・生徒の垣根が低い。教育理念に共感できるから」

③なぜ公立中学校・高校を選ばせませんでしたか？ (○をいくつでも)



*5 その他:
 「不合格だった」
 「地元の小学校にあまりなじみなかったから」
 「公立の教員は変なのが多い」「公立の教師の質が悪い」
 「大学は道外の大学へ進むことを親子共に希望しているから」
 「もともとA校と決めていたので、公立か私立かは私どもにとってはあまり関心がありません」
 「本人がA校に魅力を感じ、進学を希望したから」「本人の希望」
 「違うことになったサッカーのクラブチームと近い場所にあるA校があったから」

④A中学校・高校に最も期待することは何ですか？ (○をいくつでも)

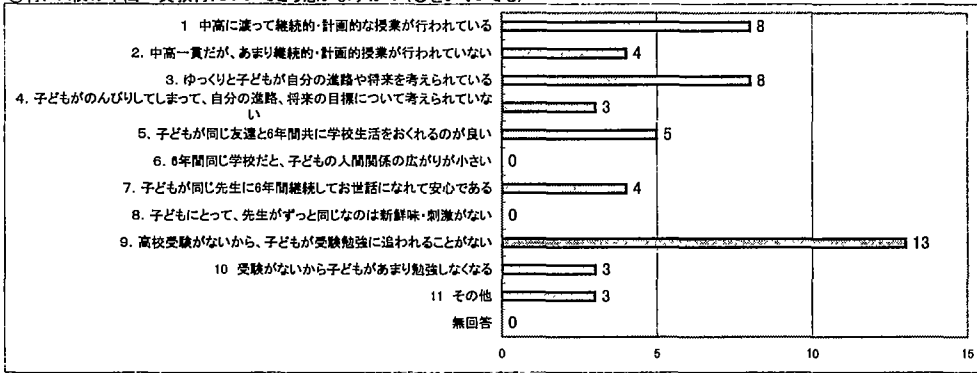


*6 その他 「優れた教師陣」

高校1年生保護者へのアンケート

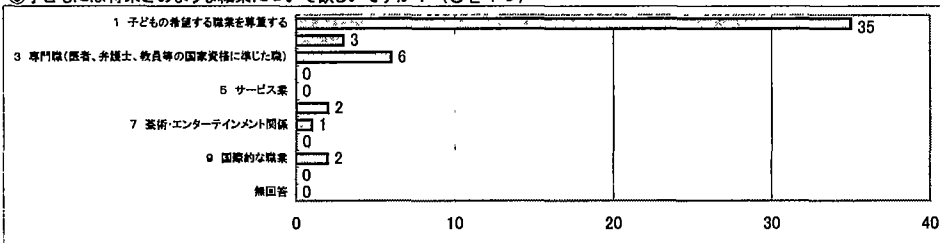
【①で1と答えた人 = A中学校出身者のみ回答】

⑤特にA校の中高一貫教育についてどう思いますか？(○をいくつでも)

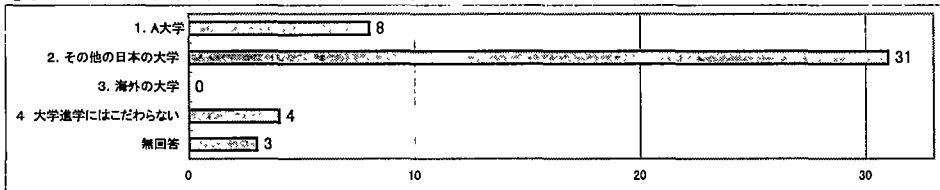


*11 その他:
 「多くの先生方に人間的魅力と情熱を感じる」
 「英語には力が入っているが、数学は弱いのでは？」
 「高校→中学への理解がまだ少ない様に見える」
 「高校進学の際に他校のからの友人も増えて刺激になり、他の中高一貫校よりも良いと思います。他の私立中学は中高一貫のクラスが別なので」「あまり関心がありません」

⑥子どもには将来どのような職業について欲しいですか？(○を1つ)

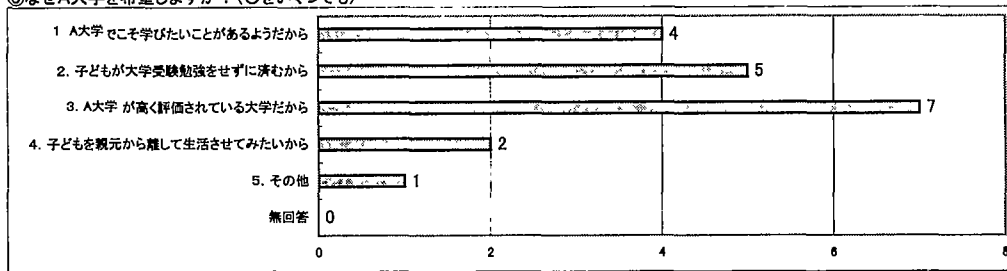


⑦子どもにはどこの大学に行くって欲しいですか？(○を1つ)



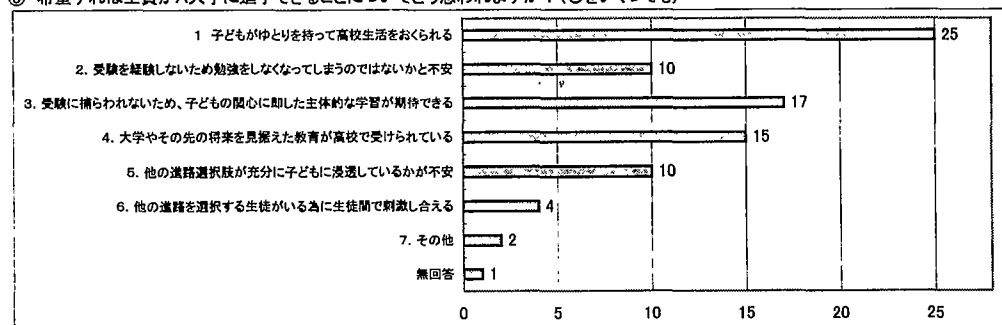
【⑦で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答】

⑧なぜA大学を希望しますか？(○をいくつでも)



*5 その他 「将来の選択肢が広がると感じているから」

⑨ 希望すれば全員がA大学に進学できることについてどう思われますか？(○をいくつでも)

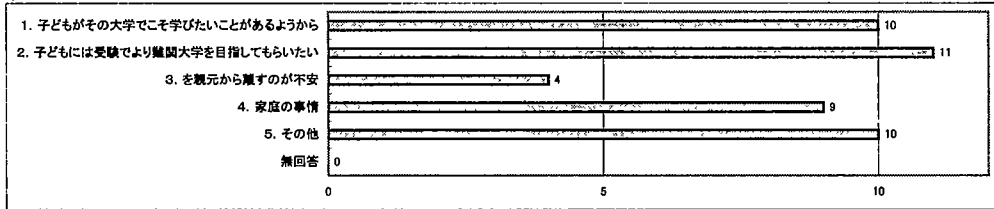


*5 その他 「中学、高校を運してクラブ活動に打ち込める」「何も努力をせず全員が進学できるわけでは決してなく、ステップアップがあってこそ進学ですのでどう思われるも何もありません」

高校1年生保護者へのアンケート

【⑦で2と答えた人 = その他の日本の大学進学希望者のみ回答】

⑩なぜその大学を望まれるのですか？(○をいくつでも)

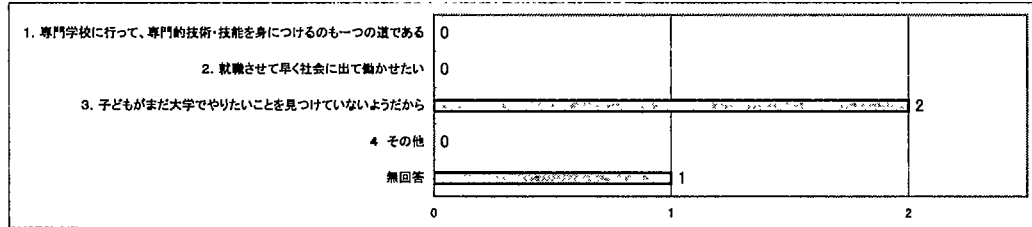


*5 その他:

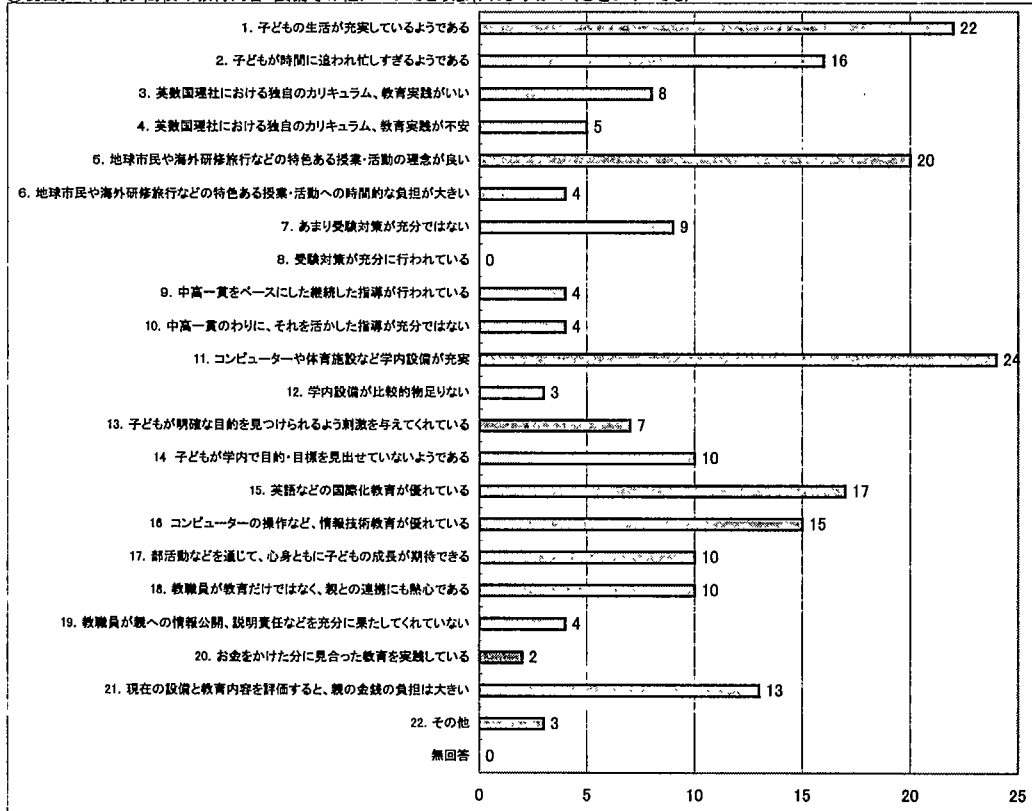
「経済的な事情」「金銭面の問題」
 「親も札幌出身で、公立中・公立校・公立大という道路悪い聞いて来ました」
 「高校受験をしていない分、大学進学は受験を体験して欲しい。さらに、子どもが東京へ出ることをきぼうしているのだから」
 「これは決定ではなく、まだ高1ですので本人の学力と親と子どもの希望等を今後よく話し合ってから決める」
 「今のところ、本人が専攻関係を希望しているから」
 「本人が望む大学に行けば良い。まだ明確になっていない」
 「第一希望の学科がAIがない。希望と一致するならAIに行っても良い」

【⑦で4と答えた人 = 大学には行かない人のみ回答】

⑫なぜ大学進学を望まないのですか？(○をいくつでも)



⑬現在、A中学校・高校の教育内容・設備その他についてどう思われますか？(○をいくつでも)



*22 その他:

「子供の側の問題ですが、教師や学校システムを活用できていないので、学力をつける為に家庭教師をつけています。そういう意味でも子供にかかる経済的負担は大きいのが実情です」
 「設備と教育内容は評価するが、親の負担は大きい」

高校1年生保護者へのアンケート

⑩A中学校・高校に満足されていますか？（〇を1つ）



*理由: 1 はい →

「『世界に通用する18』を育てるという教育理念を実践しているところ。学内の雰囲気がとても良く、先生たちから熱心さも伝わってくる」
 「英語の実力を着実に身につけることができた。教科以外の総合教育は、一見結果の判断が難しいが、将来必ず実を結ぶと期待できる」
 「子どもが明るく積極的な行動をとるようになった」「子どもがのびのびと生活しているから」
 「のびのびとした校風、先生方が熱心であること、中学時・高校時共に研修旅行を通して海外に触れることができる」
 「生徒と先生方の信頼関係がとても良いと思います。暖かい目で子どもを指導してくださる姿にいつも感心しています」
 「子供がいまきいているし、満足している様子だから」「本人が満足しているようだから」
 「全てにおいて具体的な方向を示す様指導されており、将来的な面において明確な目標を持つ状況である。学校と教との間わりも深く、理解しやすい」

2 いいえ →

「受験がなかった以外に、一貫校としての特色をまるで感じられません」
 「高校から入学させて頂きましたが、内廊生との進度の差をどのように埋めるのか対策などが明確でないので不安です」
 「基本的な生活指導が甘い。成績不良な生徒に対する指導が足りない。高い授業料に見合った教育が受けられていない」
 「中学生と高校生を別の役割にして、それぞれがしっかり生活できるようにして欲しい。学力にはかなり目がいき、生活態度の指導がおろそかになっているような気がする」
 「『初生なので健康の話を聞くと、やはり、いろいろ違いが見られ不満です。先生が言っておられる理想と現実・結果が違ってしまう」
 「もうすこし子供の特徴・良さ・個性をのばしてほしい」
 「今年は1学年の人数が多く、クラスによっては、新任の先生が多く、指導法が優れているとはいえない。又、今年から廃止した、学内進学者と高校からの生徒の扱いの違いに不安を感じている」

無回答 →

「どちらともいえない」

⑪最後に、今までに学校に寄せたことのある意見や、今お持ちになっている要望などがありましたら教えてください。

「ここ2年ほど、優秀な生徒を輩い、また今後も入学してくると予想されます。やはり、北大現役合格者を毎年二桁以上出せるようなレベルの授業をやっていたことが必要なのではないでしょうか。「現役では北大に入れない」という噂も公立高の先生から聞いています」

「中高一貫さ徹底させ、足並みを揃えるため、他高校受験を排除すべきとは言わないまでも、中学入学時の意志確認をしっかりしてほしい。他高校受験生には、受験科目以外の授業の取り組みが不真面目なところがあって好ましいとは思えない」

「このアンケートの結果を(教職員にも実施)それぞれの結果を保護者にも公開してください」

「⑩に対して、通りの2年間で進度の差が埋まるのか、それともそのままがあるまま行くのか、もう少し詳しく知りたいと思います。そのため補習があるとういと要望しています。また、希望者には内部生が使用しているテキストなどを販売して頂けると自習もできると思うのですが…。加えて、A大学の情報がもう少し頂けたらと思います(各学部の卒業後の進路など)」

「⑩に対応する改善策をとっていただきたい。先生は優秀なんでしょうが、若い先生が多いため、教えるという点において未熟な先生も中にはおられるようです。能力ある授業を行えるよう努力をお願いしたい。生徒が先生を評価するといったシステムも導入しては？と提案します」

「中学校在学中に1つだけ不満に思ったことは、部活動の数が少ない点です。道場なので公立の中学校よりも活動ができないのはわかりますが、それにして文化系・体育系共に少ないと思ひ、子どもが3年間通学する上で残念でした。それ以外の点は想像以上に良かったです」

「大学受験も大事ではあるが、今、この年令で感じられるもの吸収できることを大切にして指導していただきたい。」

「世界に通用する十八才」に期待しております」

⑫回答(続き)

「まだまだこれから2年半ありますので、今何がということは特にありません。何事も1年が過ぎてからと思っています。その時に出てきた要望・意見等を担任の先生や各教科の担当の先生とお話が出来る場を個別につくってくださると嬉しいのですが」

「とてもよい学校だと思っているが、知り合いに中学から入学を勧めたいと思っても、生活面でよい評判をきかない。目立たない子には不向きな気もするし、自己中心の子が多いようにも思う。用事で学校へ行っても挨拶する子が少ないと思う。卒業した公立中学はとても良かった。小学校の延長のまま高校生にならなみたいた子どももあきれている」

「集団生活(学校生活)をする上での、個人と集団は、感性、相性に違和感を持つ事なく、溶け込む必要があります。中学から4年間、一度も親子共々、学校に溶け込んでいたと思っております」

「教員先生数の増加に、学校自体が適合できているのか不安なところ。施設面や体制面など」

「カリキュラム上、仕方がないかもしれないけど、一日の授業時間を6時間にして欲しい。部活をする、いつも帰宅は9時近くになってしまう。文武両道を追求するには、負担が大きすぎると思うのですが…」

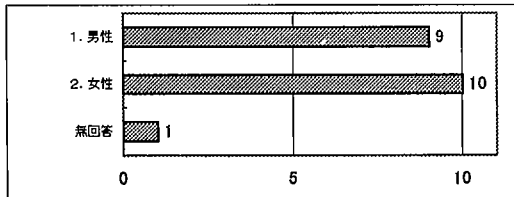
「地球市民や海外研修を通じて、世界の現実を直視することは大事と思う。但し、万一それが特定のイデオロギーを押しつける結果になればかえって有害である。現在流行している考え方以外に様々な考え方がある事を教えてほしいと思う」

「授業終了から帰宅(駅まで)時間がかなりすぎる為(駅からの乗継が悪かったり…)、時間が無駄になるようです。終了後すぐにバスに乗らないと駅からの乗継が悪かったりするので、すぐに帰らなければいけなかったりするので、放課後もう少しゆとりがあったら…と思います。大塚までのバスを増やして欲しい…。放課後講座を1年生のうちから行って欲しいです」

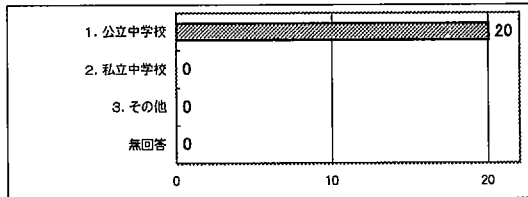
A中学校・高等学校の教育活動に関するアンケート

⑤高校3年生保護者（A大学進学クラス）へのアンケート（1クラス実施、回答数20）

○最初にあなたの子どもの性別を教えてください。

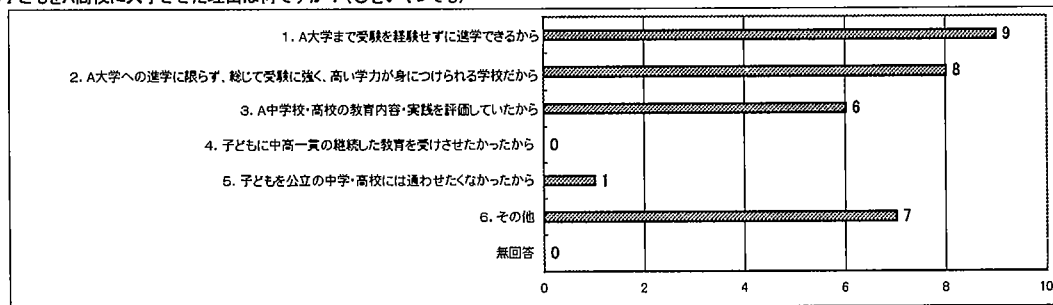


①子どもの出身中学校はどこですか？（○を1つ）



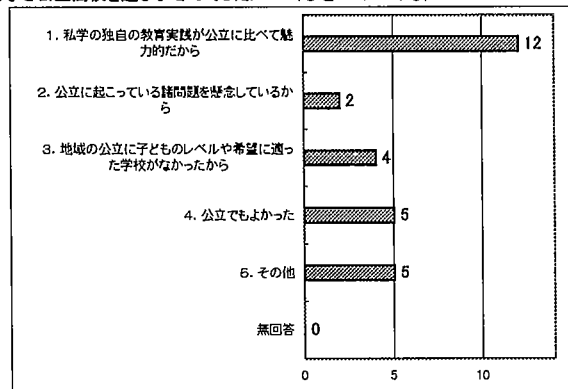
*1 所在地 札幌圏7(札幌市3, 江別市2, 北広島市1, 千歳市1), 道外2(千葉県滝山市, 神奈川県横浜各市), 記載なし1

②子どもをA高校に入学させた理由は何ですか？（○をいくつでも）



*6 その他: 「子どもの希望があったので」「子どもが公立の高校に行きたがらなかった為」「子どもの意思」「子どもが選んだ学校を信じて」

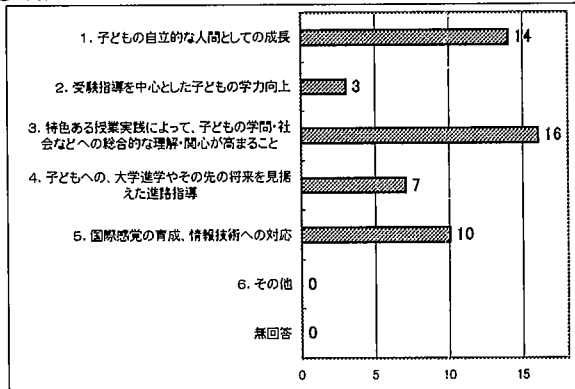
③なぜ公立高校を選びませんでしたか？（○をいくつでも）



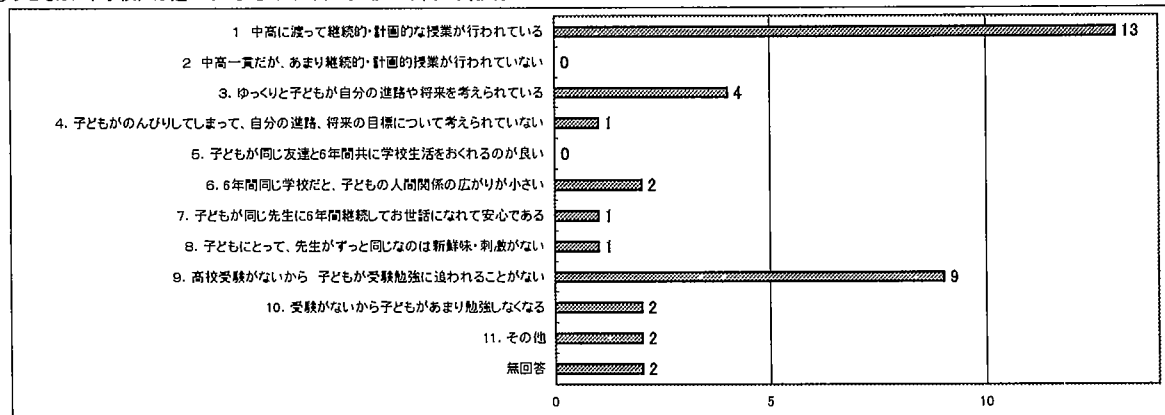
*5 その他

「子どもの希望」「学校説明会でとても教育内容・実践を評価したから」「横浜からの転居で、札幌の公立のレベルがよくわからなかったから」「子どもの希望を聞いて」「子どもが公立の高校に行きたがらなかった為」

④A高校に最も期待することは何ですか？（○をいくつでも）

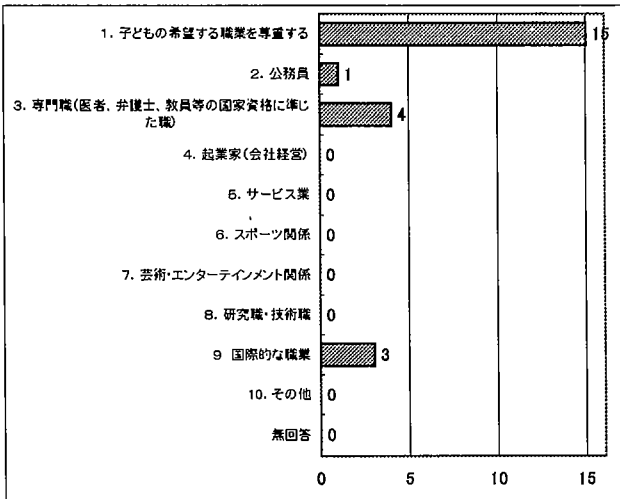


⑤子どもはA中学校には通っていませんでしたが、A校の中高一貫教育についてどう思いますか？（○をいくつでも）

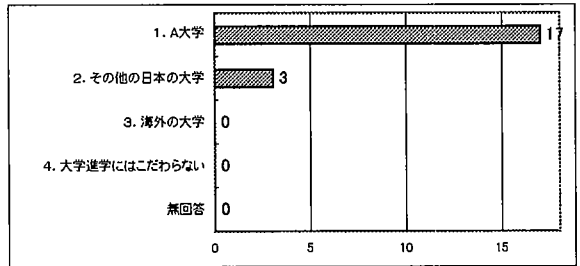


*11 その他: 「レベルの高い授業と親の期待が過大で、子どもが大変そうという印象がある。」「学校の指導力、校風によって、子どもの考え方が左右されると思う。」

⑥子どもには将来どのような職業について欲しいですか？(〇を1つ)



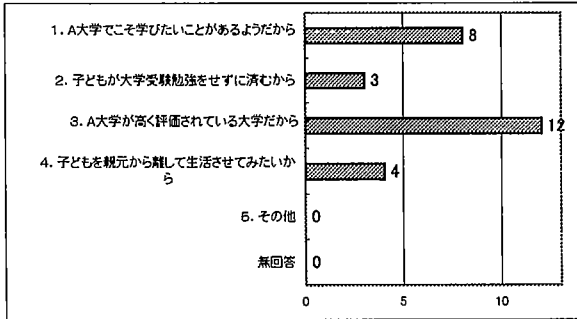
⑦子どもにはどこの大学に行かって欲しいですか？(〇を1つ)



→「経済的自立ができれば」

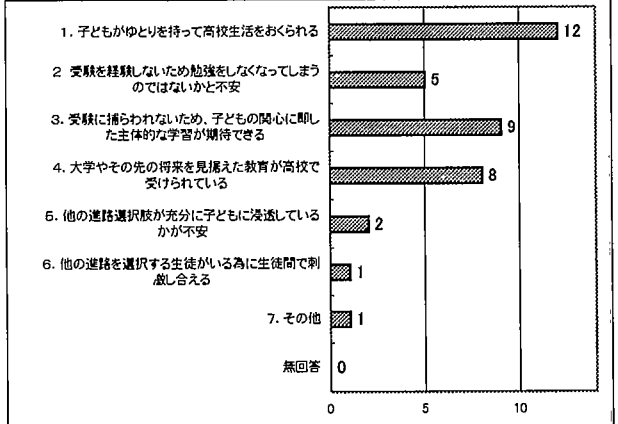
【⑦で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答】

⑧なぜA大学を希望しますか？(〇をいくつでも)



⑨ 希望すれば全員がA大学に進学できることについてどう思われますか？

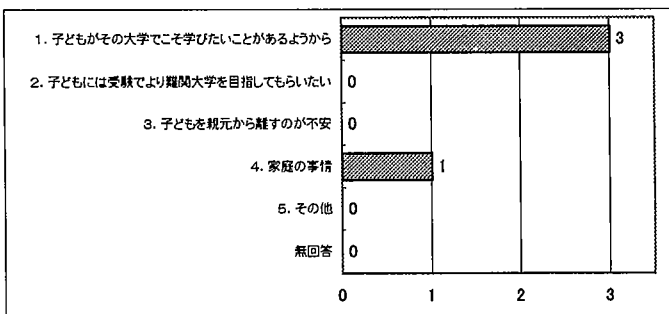
(〇をいくつでも)



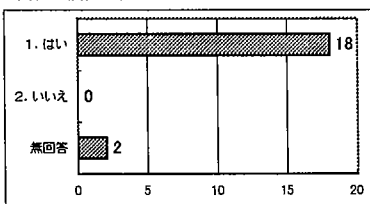
*7 その他:「競争社会である現実を踏まえ、受験を通しての刺激も必要と思う」

【⑦で2と答えた人 = その他の日本の大学進学希望者のみ回答】

⑩なぜその大学を望まれるのですか？(〇をいくつでも)



⑪A高校に満足されていますか？(〇を1つ)



*理由: 1 はい

「本人が学習に正面から向き合うようになり、先生方が将来に向けての情報と指導を適確にしていただけだから」

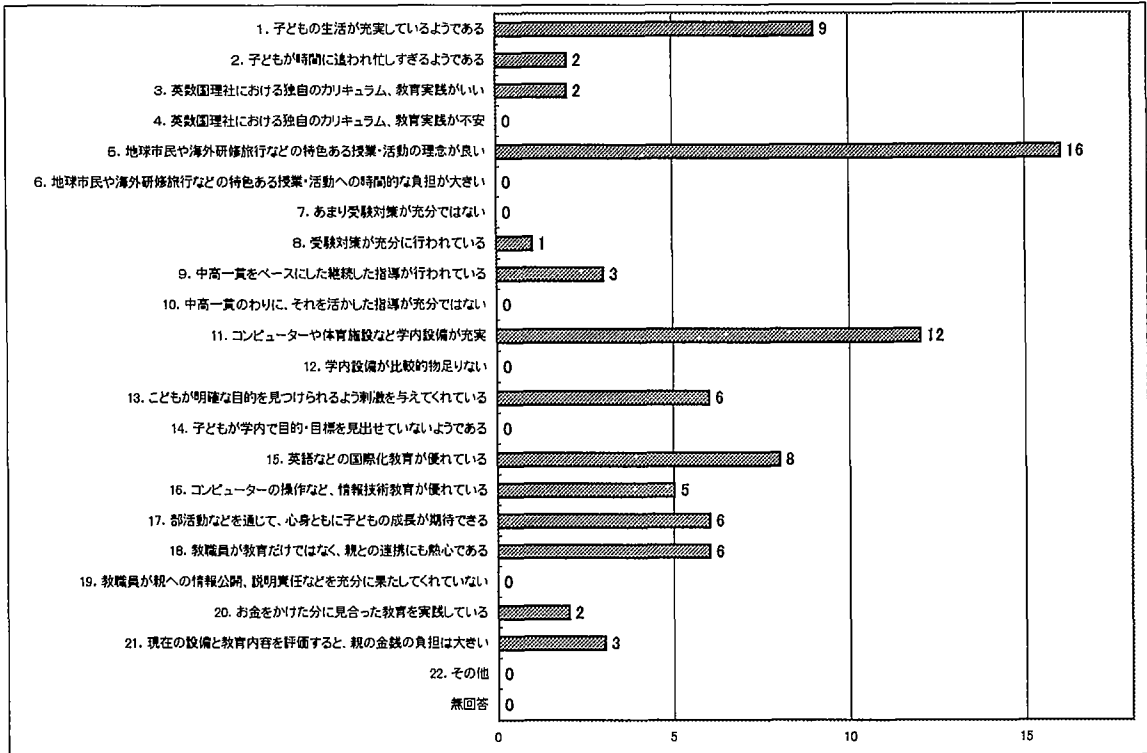
「多くの行事を常に目的意識を持って行っているところ。先生が熱心であること、子どもが自分の進むべき方向をしっかりと考えられるまで成長できたこと」

「先生、クラスメートとのかわりなどで、自分を磨くことの大切さ、人と人とのつながりの深さを学んだと思う。学園祭も大きな成長のひとつの機会です」

「教師が生徒の為に努力を惜しまない、信頼に足る教師が多いように感じる。」「他校を知らない。」

「おおむね満足しています。もう少し学習等が少なければもっと良い。」

⑬現在、A中学校・高校の教育内容・設備その他についてどう思われますか？(〇をいくつでも)



⑭最後に、今までに学校に寄せたことのある意見や、今お持ちになっている要望などがありましたら教えてください。

「A校祭がとてもしばらしいです」

「スクールバスの昼下校になっているのですが、もっと便利な方法はないのでしょうか」

「よい先生にめぐまれ、充実した高校生活を送れました」

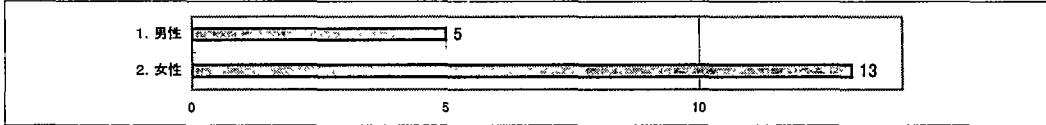
「学内進学(A大学)の枠があるという安心感がある反面、受験という体験がなく、競争社会の緊張感が薄れる様だ。

学内進学にあたっての基準をもう少し高く設定し、厳しさを体験できる様にしてはどうか。大学に行っても厳しさを体験できと思うが、日本の大学生は遊ぶ人が多く、進学(受験)も社会勉強になると思う」

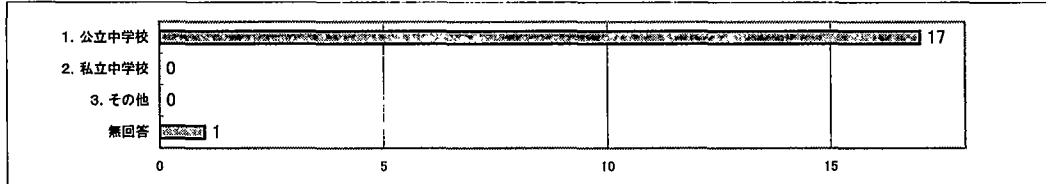
A中学校・高等学校の教育活動に関するアンケート

⑥高校3年生保護者(他大学進学クラス)へのアンケート(1クラス実施、回答数18)

○最初にあなたの子どもの性別を教えてください。

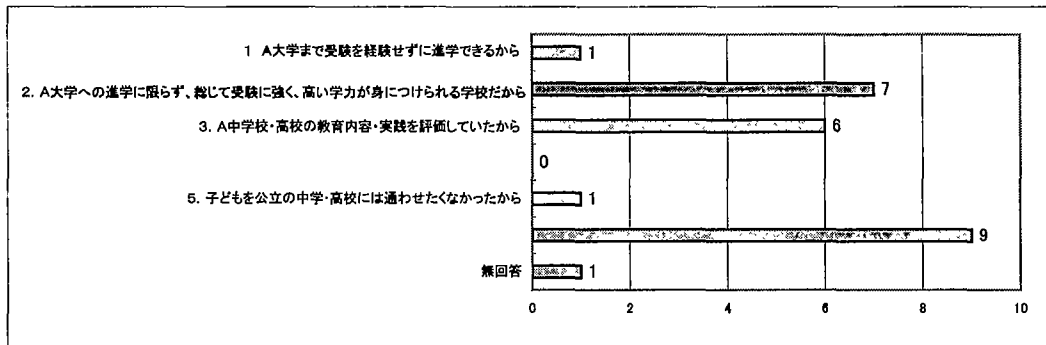


①子どもの出身中学校はどこですか？(○を1つ)



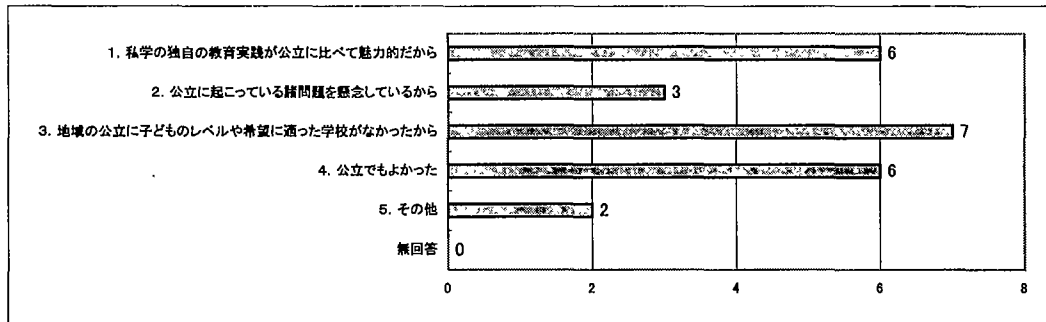
*1 所在地 札幌圏14(札幌市7、江別市3、苫小牧市2、小樽市1、千歳市、道内地方2(美幌市1、空知地区1) 記載なし!

②子どもをA高校に入学させた理由は何ですか？(○をいくつでも)



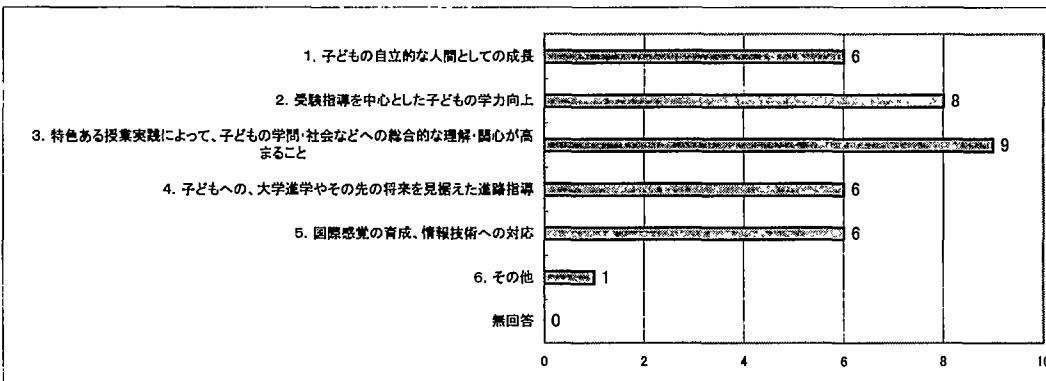
*6 その他: 「本人(子ども)の希望」…2人 「第2次志望だった」 「地域に通った学校がなかったから」「公立の第1志望校受験に失敗したから」「内申書による格付けのない高校だったから」「公立の高校の環境が子どもに合わないと思ったから」

③なぜ公立高校を選びませんでしたか？(○をいくつでも)



*5 その他: 「子どもの意志に任せた」「本人が選ばなかったから」

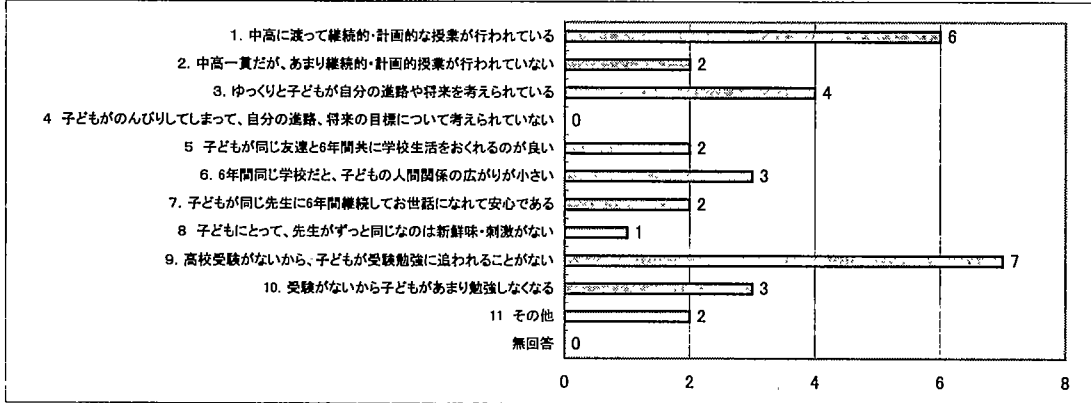
④A中学校・高校に最も期待することは何ですか？(○をいくつでも)



*6 その他: 「入学案内に載せた教育の実践をちゃんとやること」

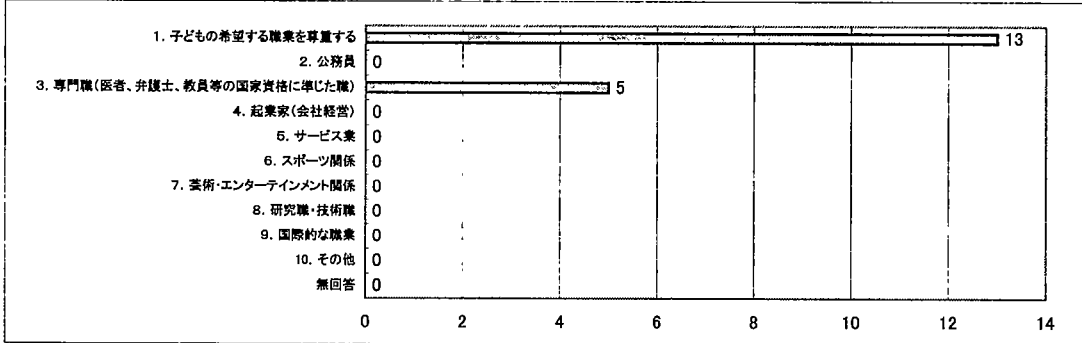
高校3年生保護者へのアンケート(他大学進学クラス)

⑤子どもはA中学校には通っていませんでしたが、A校の中高一貫教育についてどう思いますか？(○をいくつでも)

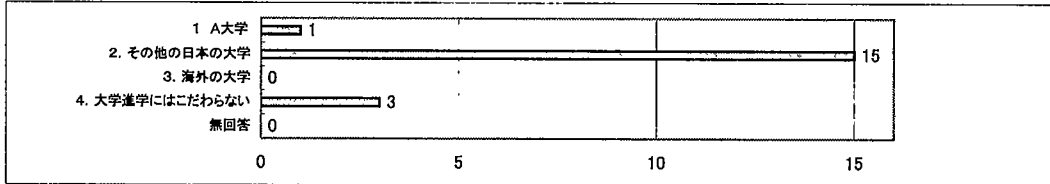


*11 その他: 「お金持ちが行く、教育にお金をかけられる環境に小学校のときからなっていると思う。本当に願がよいのかはわからないと思う。教えられたことしかできなくなるような気が…」

⑥子どもには将来どのような職業について欲しいですか？(○を1つ)

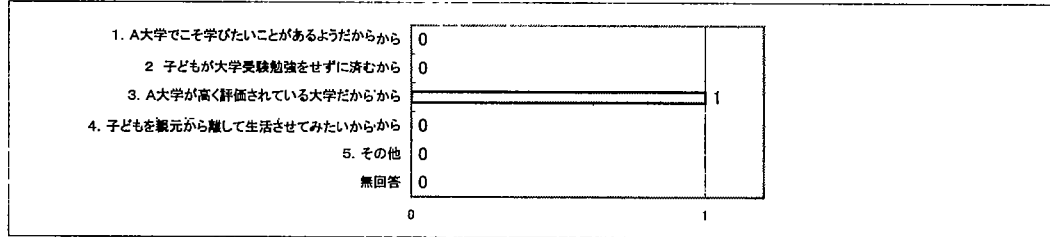


⑦子どもにはどこの大学に行きたいですか？(○を1つ)

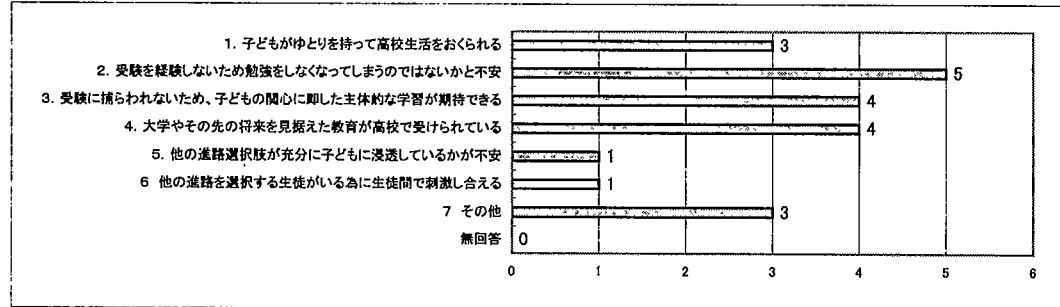


[⑦で1と答えた人 = A大学進学希望者のみ回答]

⑧なぜA大学を希望しますか？(○をいくつでも)



⑨ 希望すれば全員がA大学に進学できることについてどう思われますか？(○をいくつでも)

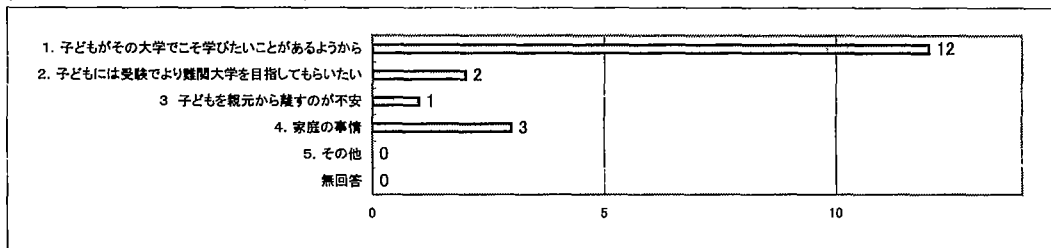


*7 その他: 「様々な選択肢があって良い」「よくわからない」

高校3年生保護者へのアンケート(他大学進学クラス)

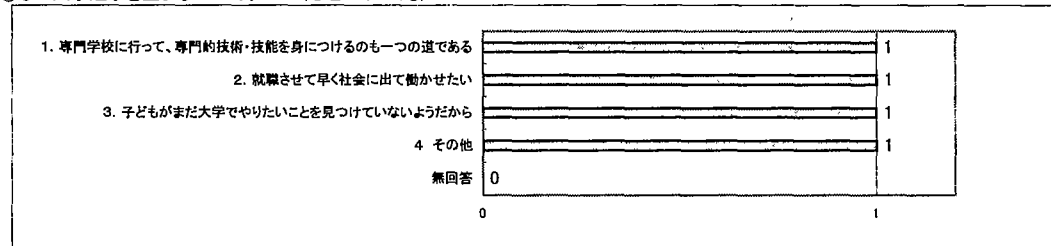
【⑦で2と答えた人 = その他の日本の大学進学希望者のみ回答】

⑩なぜその大学を望まれるのですか？(○をいくつでも)



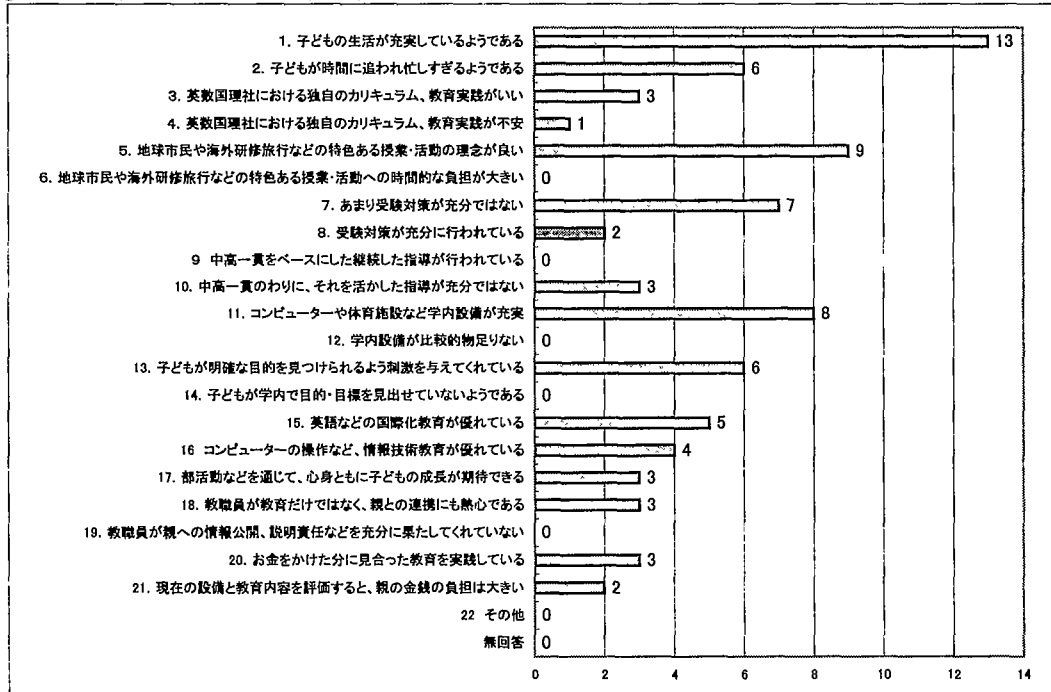
【⑦で4と答えた人 = 大学進学にはこだわらない人のみ回答】

⑫なぜ大学進学を望まないのですか？(○をいくつでも)



*4 その他: 「こだわらない=望まない ではない、どの大学でも進学先にはこだわらないということ」

⑬現在、A中学校・高校の教育内容・設備その他についてどう思われますか？(○をいくつでも)



⑭A高校に満足されていますか？(○を1つ)



*理由・1はい → 「先生が優れている」「教育目標が明確であり、それに向けた取り組みも目に見えてははっきりしている」
2いいえ → 「他大学受験が、中途半端である」

⑮最後に、今までに学校に寄せたことのある意見や、今お持ちになっている要望などがありましたら教えてください。(任意で記述)

「学校に対しては十分とはいえませんが、満足している方です。でも、あれだけ学習に時間をさいて、休み中の宿題が多いにもかかわらず、受験につながる学習がなされていないのが残念でなりません。それに進路指導ももう少し先生方も知識を持って行って頂きたいと思います。ただ「頑張らなさい」だったらだれでも言える事だと思います。進路の事については少しがっかりしています」
「A大の付属校という特異な高校のためか、他難関大学志望だった生徒がたいした努力もせずあっさりあきらめてしまふ。友人にひきづられ、ためであれば最終的には自分もA大へ進学すれば良いという甘い考え方にはしる子が多いと思う。学校側はどう考えているのか知りたい」
「教科担任がクラスによってちがう場合、テストの前プリントがくばられたりくばられなかったりするらしい。受け持ちのクラスがちがっても、プリントは全員にくばらなければいけないと思う。子どもが学校に不信感を持つと思います。私学なのだから、オンブズマン的な役割をはたすものがあってもよいと思います。」